

# 坪ノ内遺跡

TSUBONOUCHI ISEKI

中山間地域総合整備事業

(長田地区闘場整備)予定地内

# 輪ノ内遺跡

WANOUCHI ISEKI

役場庁舎建設予定地内埋蔵文化財有無確認調査

## 埋蔵文化財発掘調査報告書



1998年3月

島根県  
羽須美村教育委員会

# 坪ノ内遺跡

TSUBONOUCHI ISEKI

中山間地域総合整備事業

(長田地区圃場整備)予定地内

# 輪ノ内遺跡

WANOUCHI ISEKI

役場庁舎建設予定地内埋蔵文化財有無確認調査

埋蔵文化財発掘調査報告書



1998年3月

島根県  
羽須美村教育委員会

## 序

羽須美村教育委員会では、羽須美村産業開発課の委託を受け、平成8年度から9年度にかけ、中山間地域総合整備事業(長田地区埋場整備)予定地内に存在する『坪ノ内遺跡』の発掘調査(記録保存)を行いました。また平成9年度、羽須美村総務課の委託を受け、役場庁舎建設予定地内の埋蔵文化財有無確認試掘調査を行いました。この試掘調査によって中世の造構を確認し、『輪ノ内遺跡』の存在が明らかになりました。この報告書は以上二つの遺跡の調査結果をまとめたものです。

大字上田 長田『坪ノ内遺跡』からは、大字戸河内 柚ノ木『菅城遺跡』(平成5年度 範囲確認試掘調査・平成7年度 本調査)と同様、弥生時代後期の住居跡を検出しました。さらに縄文時代晩期から江戸時代にわたる遺物を確認しており、このことは私たちが存在する背景の深みというものを、改めて考えさせられる事象といえます。

また、大字下口羽根布『輪ノ内遺跡』は本調査ではありませんが、14世紀から15世紀と思われる造構を検出し、そのことは「本村における高橋氏の時代」を考える上で重要な遺跡となるかもしれません。

羽須美村(旧口羽村・旧阿須那村合併)は、発足して41年目を迎ました。地方分権が叫ばれる今日、その地域の特色を活かすことが重要だとすれば、羽須美の性格や個性を再認識する上で、本村の生い立ちを吟味し、多角的に評価し、どう活かしていくかを模索することは実のあることではないでしょうか。例えば現代の地方分権を中世 国人領主の時代と比較されている方もおられるようです。この報告書が本村において、そのようなことに思いを馳せる時の参考ともなれば、これ以上の幸せはありません。21世紀を目前にし、歴史に学ぶことはロマンにとどまらず、意義有ることと考えます。

最後になりましたが、坪ノ内遺跡の記録保存及び、輪ノ内遺跡の発見にあたり、土地所有者、地元の方々、関係機関、さらに多くの皆様にご指導・ご援助を賜りましたことを厚くお礼申し上げるとともに、今後とも羽須美村の文化財保護・活用にご協力頂きますようお願い致します。

平成10年3月

羽須美村教育委員会

教育長 加藤芳藏

# 例　　言

1. 本書は、羽須美村産業開発課の委託を受け、羽須美村教育委員会が平成8年度から9年度に実施した、中山間地域総合整備事業（長田地区闇場整備）予定地内「坪ノ内遺跡」の発掘調査報告書及び、羽須美村総務課の委託を受け、羽須美村教育委員会が平成9年度に実施した、役場庁舎予定地内埋蔵文化財有無確認調査の報告書である。

2. 調査体制は次のとおりである。（平成8年度から平成9年度）

調査主体 羽須美村教育委員会

　　加藤 芳藏　（教育長）

事務局　社会教育課

　　岡崎美和子　（社会教育課長）

　　服部 繁　（社会教育係長）

　　天野 尚也　（社会教育課主任主事）（平成9年度）

　　藤原 大祐　（社会教育課主事補）

　　兼正 浩子　（社会教育指導員）

調査員　角矢 永嗣　（社会教育課主事）

調査指導〔敬称略〕

　　西尾 克己　（島根県教育庁文化財課）

　　柳浦 俊一　（島根県教育庁文化財課）

　　吉川 正　（島根県文化財保護指導委員）

発掘作業員 「坪ノ内遺跡」（平成8年度から9年度）

　　有江 甫・鈴物 房義・大石 年江・大前コスエ・岡崎 悅子・沖田 康則

　　奥田 未人・桑田 昇・酒井チエコ・佐々木 強・白川 鑑行・菅原 春雄

　　坪 明・田中喜代人・日高フサミ・日野岡キクエ・広高 章・藤川 幸子

　　丸原 栄宗・三上 純・三上 斎・三上美知子・三島 幸夫・宮口 義登

　　三好 安江　〔50音順〕

（平成9年度）役場庁舎建設予定地内埋蔵文化財有無確認試掘調査「輪ノ内遺跡」

　　有江 甫・今村 元美・鈴物 房義・大石 年江・大前コスエ・桑田 昇

　　河野 静人・田中喜代人・日高 保雄・三好 安江　〔50音順〕

整理作業員 三好 順子・兼正 浩子・三上 源子

3. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の方々の助言・協力を得た。〔敬称略・順不同〕

島根県教育庁文化財課、広江 耕史・岩橋 孝典。島根県立八雲立つ風土記の丘、大谷 晃二。

瑞穂町教育委員会、森岡 弘典・藤田 陸弘。古川 健二。唐溪由美子(大和村教育委員会嘱託)。

島根県埋蔵文化財センター、伊藤 徳広・内田 律雄・角田 徳幸・椿 真治・守岡 正司。

広島大学、河瀬 正利。広島県立美術館、村上 勇。  
広島県立歴史民俗資料館、伊藤 実・島田 朋之・葉杖 哲也。  
羽須美村文化財審議会委員、日高 伊三・日高 亘・岡本 昇吾・丸原 巧・口羽 萬造。  
尚、土地所有者をはじめ、地区の方々。㈱中国産業、㈱鉄物組、羽須美村産業開発課、羽須  
美村総務課には、ご理解と多大なご配慮を頂いた。前述の皆様方に記して謝意を表したい。

4. 遺跡での写真撮影は、主に三好 安江の補助を得、角矢が行った。
5. 基本土層・造構・遺物の出土状況の実測は、主に三好 安江の補助を得て角矢が行った。
6. 遺物の実測は、三上 源子・柳浦 俊一・岩橋 孝典・伊藤 徳広・角矢が行った。
7. 基本上層図・造構・遺物の出土状況図・遺物実測図のトレースは、三好 順子・兼正 浩子・  
三上 源子・角矢が行った。
8. 本書に掲載した遺物写真は、瑞穂町教育委員会及び古川 健二の協力・助言を得て角矢が行った。
9. 本書の編集執筆は、柳浦 俊一他、前述の方々の助言・協力を得て、角矢が行った。
10. 本書で使用した造構記号は次の通りである。  
S I…竪穴住居 S R…自然流路（旧谷川） P…ピット（柱穴） S X…その他の造構
11. 掘図中の方位は、国土座標による第三標系の軸方位に準じ、レベル高は標高を示す。
12. 掘図の縮尺は、図中に示した。凡例、(1:3)=3分の1 また、掘図中の⑤はストーンである。
13. 凡例、掘図中、第●▲図の遺物番号■は、●▲—■と記す。図版中、西→は、被写体を西側から撮  
影の意。
14. 凡例、本文中図は、註図であり、参考、引用文献・助言、指導内容等である。  
(58ページに記す。)
15. 本書に掲載した第1図・第30図は、中央地図株式会社が建設省国土地理院の承認を得て複製した  
羽須美村全図(1:25000)をトリミングし、使用した。
16. 図版a.は、国際航業株式会社が1976年9月に空撮したもの(撮影縮尺1:7000)をトリミングし  
使用した。
17. 本遺跡出土の遺物及び実測図・写真等の記録資料は、羽須美村教育委員会が、はすみ文化プラザ  
内で管理保管している。

# 本文目次

## 坪ノ内遺跡

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の位置と環境	1
第3章	調査の概要と経過	4
第4章	遺構と遺物	7
	(1)基本層序	7
	(2)竪穴住居跡 S 101~03	11
	(3)旧谷川跡 SR 01	17
	(4)その他の遺構 SX 01	18
	(5)包含層出土遺物	19
第5章	調査の成果と課題(まとめ)	45

## 輪ノ内遺跡

第6章	試掘調査(輪ノ内遺跡)に至る経緯	47
第7章	試掘調査区の位置と環境	47
第8章	試掘調査の概要と経過	50
第9章	遺構と遺物	52
	(1)基本層序	52
	(2)遺構と遺物 柱穴・土坑	52
	(3)包含層出土遺物	52
第10章	試掘調査の成果と課題(まとめ)	56
	註(引用・参考文献)	58
	報告書抄録	87

## 挿図目次

第1図	坪ノ内遺跡 位置図	(1:25000)	2
第2図	坪ノ内遺跡 調査前地形図・調査区設定図		5
第3図	坪ノ内遺跡 調査後地形図・遺構位置図		6
第4図	坪ノ内遺跡 土層断面図(第2図A-A'・B-B')	(1:60)	8

第5図	坪ノ内遺跡 土層断面図(第2図C-C')	(1:60)	9
第6図	坪ノ内遺跡 土層断面図(第2図D-D'・E-E')	(1:60)	10
第7図	坪ノ内遺跡 S I O 1 実測図	(1:60)	12
第8図	坪ノ内遺跡 S I O 1 出土遺物	(1:3)	13
第9図	坪ノ内遺跡 S I O 2 実測図	(1:60)	14
第10図	坪ノ内遺跡 S I O 2 出土遺物	(1:3)	15
第11図	坪ノ内遺跡 S I O 3 実測図	(1:60)	16
第12図	坪ノ内遺跡 S R O 1 実測図	(1:30)	17
第13図	坪ノ内遺跡 I-A・II-A区 遺物出土状況図 他	(1:30) 他	18
第14図	坪ノ内遺跡 出土遺物(縄文晩期～弥生中期)	(1:3)	19
第15図	坪ノ内遺跡 出土遺物(弥生後期)	(1:3)	21
第16図	坪ノ内遺跡 出土遺物(弥生末期～古墳中期Ⅰ)	(1:3)	23
第17図	坪ノ内遺跡 出土遺物(古墳中期Ⅱ)	(1:3)	25
第18図	坪ノ内遺跡 出土遺物(古墳中期Ⅲ)	(1:3)	27
第19図	坪ノ内遺跡 出土遺物(古墳後期Ⅰ)	(1:3)	29
第20図	坪ノ内遺跡 出土遺物(古墳後期Ⅱ)	(1:3)	30
第21図	坪ノ内遺跡 出土遺物(奈良・平安Ⅰ)	(1:3)	32
第22図	坪ノ内遺跡 出土遺物(奈良・平安Ⅱ)	(1:3)	33
第23図	坪ノ内遺跡 出土遺物(中世)	(1:3)	34
第24図	坪ノ内遺跡 出土遺物(鎌倉)	(1:3)	35
第25図	坪ノ内遺跡 出土遺物(平安後期～鎌倉)(貿易陶磁Ⅰ)	(1:3)	36
第26図	坪ノ内遺跡 出土遺物(平安～安土・桃山)(貿易陶磁Ⅱ)	(1:3)	38
第27図	坪ノ内遺跡 出土遺物(室町・江戸)(古錢)	(1:1)	40
第28図	坪ノ内遺跡 出土遺物(江戸)	(1:3)	41
第29図	坪ノ内遺跡 出土遺物(その他)	(1:3)	43
第30図	輪ノ内遺跡 位置図	(1:25000)	49
第31図	試掘調査(輪ノ内遺跡)トレンチ設定図	(1:500)	51
第32図	試掘調査(輪ノ内遺跡)トレンチ実測図	(1:60)	53
第33図	試掘調査(輪ノ内遺跡)出土遺物	(1:3)	54

# 遺物観察表目次

第8図	坪ノ内遺跡	S I O 1 出土遺物 観察表	13
第10図	坪ノ内遺跡	S I O 2 出土遺物 観察表	15
第14図	坪ノ内遺跡	出土遺物(縄文晩期～弥生中期)観察表	20
第15図	坪ノ内遺跡	出土遺物(弥生後期)観察表	22
第16図	坪ノ内遺跡	出土遺物(弥生末期～古墳中期Ⅰ)観察表	24
第17図	坪ノ内遺跡	出土遺物(古墳中期Ⅱ)観察表	26
第18図	坪ノ内遺跡	出土遺物(古墳中期Ⅲ)観察表	28
第19図	坪ノ内遺跡	出土遺物(古墳後期Ⅰ)観察表	29
第20図	坪ノ内遺跡	出土遺物(古墳後期Ⅱ)観察表	31
第21図	坪ノ内遺跡	出土遺物(奈良・平安Ⅰ)観察表	32
第22図	坪ノ内遺跡	出土遺物(奈良・平安Ⅱ)観察表	33
第23図	坪ノ内遺跡	出土遺物(中世)観察表	34
第24図	坪ノ内遺跡	出土遺物(鎌倉)観察表	35
第25図	坪ノ内遺跡	出土遺物(平安後期～鎌倉)(貿易陶磁Ⅰ)観察表	37
第26図	坪ノ内遺跡	出土遺物(平安末～安土・桃山)(貿易陶磁Ⅱ)観察表	39
第27図	坪ノ内遺跡	出土遺物(室町・江戸)(古錢)観察表	40
第28図	坪ノ内遺跡	出土遺物(江戸)観察表	42
第29図	坪ノ内遺跡	出土遺物(その他)観察表	44

# 図版目次

図版1a.	坪ノ内遺跡遠景 1976年9月(1:7000)空撮	61	図版5a.	SI02 検出状況 東→	65
b.	遺跡の背後の山側、尾根端部に窓地、その右は「叶谷」南東→	61	b.	SI02壁溝内柱穴検出状況 南西→	65
c.	1-A区からの眺望、遠景の右山に淨福寺、左山に燒尾城南東→	61	c.	SI02 壁溝内柱穴 遺物10-I出土状況 東→	65
図版2a.	II-A区から龜岡寺五輪塔群のある尾根先端部を望む北東→	62	図版6a.	SI03 完掘状況 南東→	66
b.	SI01・SI02 検出状況 南東→	62	b.	SI03 完掘状況 北東→	66
c.	SI01・SI02 完掘状況 南東→	63	c.	SI03 遺物25-7及び焼南出土状況 北東→	66
図版3a.	SI01 検出状況 南西→	63	図版7a.	SR01(II-D区)土層堆積状況 南東→	67
b.	SI01 土層堆積状況 北東→	63	b.	SR01(II-D区) 検出状況 北西→	67
c.	SI01(壁溝部)土層堆積状況 南西→	63	c.	SR01(II-D区) 遺物4-6出土状況 北西→	67
図版4a.	SI01(壁溝内)遺物8-1出土状況 東→	64	図版8a.	II-A区 遺物17-2出土状況 北西→	68
b.	SI01 遺物8-4出土状況 →	64	b.	I-A区 遺物16-12他出土状況 北→	68
c.	SI02・SI01 完掘状況 北東→	64	c.	IC038-9世纪の須恵器 SI02柱穴出土状況 北西→	68

図版9 a. I-D区8~9世紀の須恵器と鉄滓出土状況	69	図版19 a. 試掘調査(輪の内道跡)東区全景西→	79
b. I-D区遺物254出土状況と鉄滓出土状況	69	b. 東区NゾA-1完掘状況南東→	79
c. I-D区遺物258出土状況北東→	69	c. 東区NゾA-1遺物338出土状況南東→	79
図版10 a. III-AK(第3回土壌断面図D)遺物28出土状況南→	70	図版20 a. 東区NゾB-2完掘状況南東→	80
b. II区拡張部鉄滓出土状況北西→	70	b. 東区NゾB-2(拡張部)遺構検出状況東→	80
c. II区拡張部遺物17-1出土状況北西→	70	c. 東区NゾB-2(柱穴)遺物33-22出土状況東→	80
図版11 a. SDI出土遺物8-1	71	図版21 a. 試掘調査西区全景東→	81
b. SDI出土遺物14-他	71	b. 西区NゾB-5B完掘状況南西→	81
c. 遺物15-8	71	c. 西区NゾB-5B遺物33-3出土状況南西→	81
図版12 a. 遺物16-12	72	図版22 a. 西区NゾB-5B遺物33-10出土状況南→	82
b. 遺物17-1	72	b. 西区NゾB-6B完掘状況南西→	82
c. 遺物18-15	72	c. 西区NゾB-6B遺物33-12出土状況北西→	82
図版13 a. 遺物18-4	73	図版23 a. 東区NゾB-2柱穴出土遺物33-22内面	83
b. 遺物18-6	73	b. 東区NゾB-2(拡張部)土坑上面出土遺物33-17他外側	83
c. 遺物20-11	73	c. 西区NゾB-6B出土遺物33-12(灰釉陶)外側	83
図版14 a. 遺物22-8(布目痕のある十器片)	74	図版24 a. 東区NゾB-2柱穴出土遺物33-22内面	84
b. 遺物294(砥石)	74	b. 東区NゾB-2(拡張部)土坑上面出土遺物33-17他内面	84
c. 遺物243-他(束縛系口鉢)外側	74	c. 西区NゾB-6B出土遺物33-12(灰釉陶)内面	84
図版15 a. 遺物25-2他(白磁)	75	図版25 a. 西区NゾB-5B出土遺物33-3	85
b. 遺物25-19他(白磁)外側	75	b. 東区NゾC-1出土遺物33-19他外側	85
c. 遺物25-11他(青磁)外側	75	c. 東区NゾC-1出土遺物33-19他内面	85
図版16 a. 遺物25-2他(白磁)	76		
b. 遺物25-19他(白磁)内側	76		
c. 遺物26-11他(青磁)内側	76		
図版17 a. 遺物26-18他(青花)	77		
b. 遺物28-1他(肥前系染付)	77		
c. 遺物29-3(鉄滓が付着した土器片)外側	77		
図版18 a. 遺物26-18他(青花)	78		
b. 遺物28-1他(肥前系染付)	78		
c. 遺物29-3(鉄滓が付着した土器片)内側	78		

## 第1章 発掘調査に至る経緯

平成8年度中山間地域総合整備事業(長田地区)圃場整備計画に際し、羽須美村産業課(羽須美村長三上 隆三)から平成8年1月8日付で、埋蔵文化財及びその他の文化財の有無、また存在する場合の取扱いについて照会があった。羽須美村教育委員会社会教育課(羽須美村教育委員会教育長 加藤 芳藏)はこれを受け検討を行った。まず、長田地区圃場整備予定地周辺には、横尾(見玉)城跡【第1図20】・横尾城古墳(円墳二基)【同19】・紙園社【同18】・淨福寺と淨福寺横穴墓【同30】・亀円(縁)寺と五輪塔群【同22】・尼子道・柿尾山八幡宮【同27】・比丘人城跡【同26】などの存在が知られており、本村でも歴史的遺産を多くとどめた地域であること。また、分布調査(踏査)の結果、圃場整備予定地内西(上)地区の一部において遺物を表面採取したこともあり、圃場整備予定地内の試掘調査を実施したいとの旨を回答した。(同年3月6日付)

同年4月15日、圃場整備予定地内西(上)地内を埋蔵文化財有無確認の試掘調査を行った。調査の結果、やはり踏査時に遺物を表探した周辺で、8世紀~9世紀代の須恵器や、土師質土器、鉄滓などが、かなりの量出土したことから、付近にその当時の遺構がある可能性が高く、圃場整備により遺物包含層及び地山面まで削除さ(切)られる場合には、発掘調査が必要であるとの結論に達した。(尚、同年7月、圃場整備予定地内東(下)地区においても、埋蔵文化財の有無確認の試掘調査を行ったが、存在は認められなかった。)以上のことにより、調査地区を地名から『坪ノ内遺跡』とし、平成8年度から平成9年度をかけ発掘調査(総面積約1,000m<sup>2</sup>)を行うこととなった。

(圃場整備予定地内西(上)・東(下)地区を表記した工事図面は、紙面の都合上割愛させて頂いた。)

## 第2章 遺跡の位置と環境

羽須美村は、島根県のおよそ中央部邑智郡の南東部に位置し、北は大和村、西に瑞穂町、そして南は広島県高田郡高宮町・美土里町、東に江ノ川を隔て広島県双三郡作木村と接する県境の地であり、村の中央を江ノ川支流出羽川が流れ、川沿いの標高約170mに阿須那の街、標高約110mには口羽の街がある。(昭和32年2月11日、旧口羽村・旧阿須那村が合併し羽須美村は誕生した。)

大字上田長田は、羽須美村の南東に位置し、出羽川支流長田川に沿う長田の街の標高は約220m。

そのすぐ南は高宮町の直会に接し、県境には国境石が立っている。坪ノ内遺跡は、長田川北側(叶谷)に向かう尾根筋との谷部から丘陵部にかけての遺跡であり、標高約245m~242.5mにかけての、水田耕作に適した陽当たりの良い場所に立地している。

『島根県の地名』山本 清監修団の羽須美村『口羽』及び『琵琶甲城』に次のとおりあるので、引用する。



1 畠口跡路	2 六地藏寺跡	3 十郎跡	4 十郎跡	5 桃ヶシ・十郎跡
6 桃ヶシ二号跡路	7 青山印跡	8 了義坊(佐土真院)	9 前坂山古跡(酒造)	10 細見名利(明見)城跡
11 松山印跡	12 錦屋印跡	13 鈴ヶ置石一号跡路	14 鈴ヶ置石二号跡路	15 大澤一弓馬跡
16 大澤一弓馬跡	17 伏木印跡	18 妹尾社	19 鳥屋山古跡(酒井一系)	20 鶴見少玉(鶴見)城跡
21 畠ノ内遺跡	22 魚円墳(牛頭山)ヒ五輪塚群	23 地盤(佐土真院附近)あるいは廻遊する地の可能性を考慮した。	24 西神奈(八富宮)	25 金屋子社が合祀されたこと
26 が金屋子社はどちらかで金屋子社ではないかと可能性も考えている。	25 上地入跡	26 北丘入跡	27 横尾山(八富宮)	28 鶴見石(石見)史跡
29 が金屋子社はどちらかで金屋子社ではないかと可能性も考えている。	26 上地出跡	27 上地出跡	28 鶴見石(石見)史跡	29 鶴見古跡
30 泷根寺(佐土真院)と糸屋寺(穴薙山)酒井神社に合祀	31 畠田瓦窯	32 金屋山(酒井神社に合祀)	33 本坂跡	34 大折古跡
35 古伊二号跡	36 古伊一弓馬跡	37 干日古跡路	38 この三つの塚を三田山(39 石見銀山山・40 安佐おつば山・41 嶋後兩山)という。これより下流を	39 工事、上流を可観むといふ

第1図 坪ノ内遺跡 位置図 (1 : 25000)

『上田村 墳羽須美村上田』

『下口羽村の南東に位置し、東を北流する江川対岸は備後国下作木・大津村(現広島県作木村)、南は安芸国川根村(現同県高宮町)。村の中央西寄りを出羽川の支流長田川が北流する。山地で平地は少なく、砂鉄採取跡地の新開と改良と考えられる棚田の谷間に小集落を構成している。川根村との境近く村との境近くの長田に楨尾城がある。比高九〇メートル、四方に延びる急峻な尾根に空堀を設け、西側背後の後城とよぶ境は大きく掘切され、小規模であるが堅固な構えをもつ。文明八年(一四七六)九月一日の高橋氏が益田氏と結んだ契状(益田家什書)に被官一六人が拿連判を加えているが、そのなかにみえる長田備中守光季の拠城といわれる。享禄二年(一五二九)毛利元就は高橋氏を藤根城で滅亡させ、のち臣臣の桂元澄を楨尾城に配し、児玉内蔵助を代官としたといわれることから児玉城とも称される。当村は古くは長田村と称したといわれるが、天文一一年(一五四二)七月一二日の桂元澄寄進状(『贈村山家返章』山口県文書館蔵)に「石州上田村上口名之内五百田毫反」とみえ、伊勢神宮に神田として寄進されている。これに対し天正五年(一五七七)九月二九日の桂元重が大槻那として登場する棟札(柿尾山八幡宮蔵)に「長田村八幡宮再建」とみえる。

元和五年(一六一九)の古田領帳に村名がみえ、高六三五石余、年貢高は田方二六三石余・畠方一二八石余。上口羽・戸河内との村境をなす伴藏山塊は良質の砂鉄を産し、長田川右岸の上田・平佐とともに鉄穴流しが行われる跡も多い。長田川上流戸河内境の上坂鍬は大正末期まで続いた。鉄穴流しで排出した転石を利用した石垣は三~五メートルと高く、径一メートル以上の石も多く使用されており、城壁の石組のごとく石工の技がうかがえる。楨尾城跡の南麓にある柿尾山八幡宮は天長元年(824)折津国八田郡(八部郡か)長田の三上真恵門が折津長田社(現兵庫県神戸市長田区)から勧請したと伝える。(八幡宮由緒記)。境内社として金屋子神社・出雲神社・藍染神社の三社合殿を祀る。明暦四年(一六五八)奉納の三六歌仙団額六枚を社宝として伝える。柿尾山八幡宮から東の谷を隔てた淨土真宗本願寺派淨福寺は天正一八年順昌の開基と伝える。平佐に同派了泉坊がある。慶長一四年(一六〇九)八月一二日には京都西本願寺准如が願主了泉坊西念の求めにより木仏を下付している(木仏之留)。明治元年(一八六八)火災により焼失したが、翌二年再建立。楨尾城跡南麓の亀円寺発寺の片隅に駕遊堂があり、もと禪宗亀円寺の本尊と伝える釈迦像を安置し、大槻那は桂元澄とされている。付近には数多くの大小五輪塔からなる墓地あり、やや離れた所にある多くの古墳群は天文九年安芸吉田(現広島県吉田町)攻めに敗れた尼子方落武者の墓碑と伝える。楨尾山には城跡に隣接した尾根上に楨尾山古墳二基(円墳)がある。淨福寺裏山では大正六年(一九一七)寺地拡張工事の際に横穴墓が発見され、人骨・須恵器・耳環・刀子片が出士、六世紀後半のものとされている。』

## 第3章 調査の概要と経過

坪ノ内遺跡の本調査は、平成8(1996)年10月28日から平成9(1997)年9月25日にわたる。

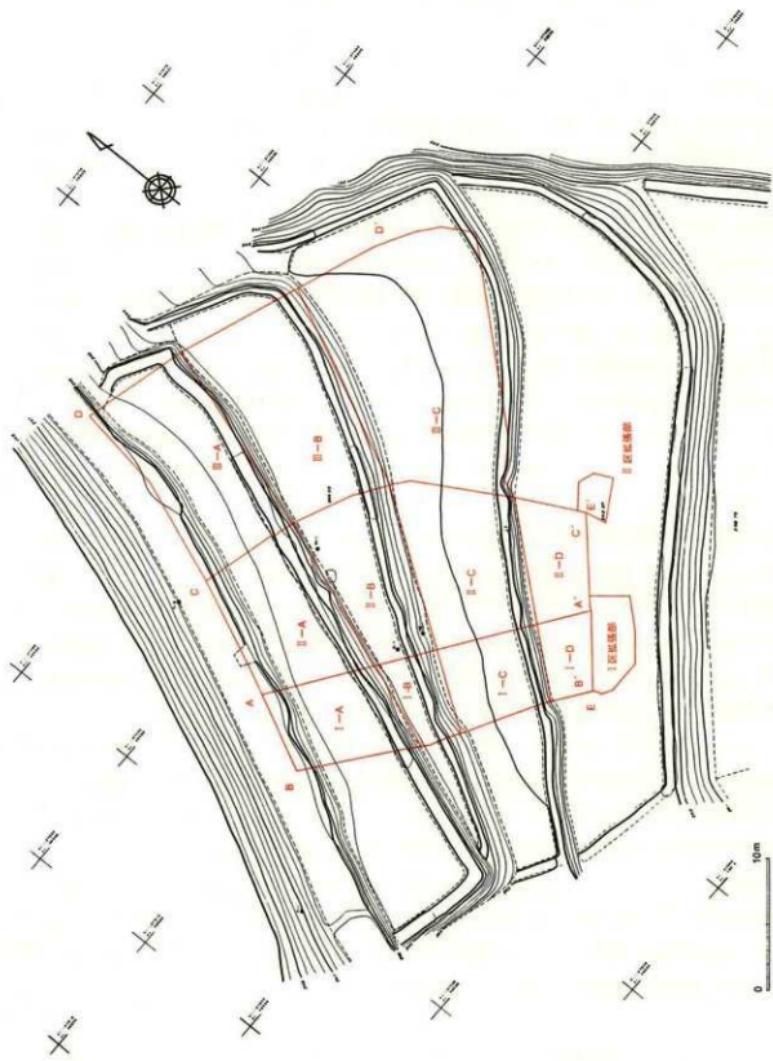
平成8年度は、I区・II区の調査を行なった。I区とII区の調査は、初め土層を観察する為と、谷部に位置しており湧水も考えられることから、排水路を兼ねた意で等高線と垂直になるよう、調査区の上(北西)から下(南東)までトレンチを設定した。第2図A-A'である。このトレンチの掘削を始めた直後、いきなり図版8aのとおり土師器の甕や高杯が検出された。その後、地山面が出るところまで掘削し、層位を確認し分層4、各層ごとに堀削を心がけた。ただし、4層(黒墨色土Ⅲ)と5層(黒褐色土)は、色名では明確に違っても実際はもっと似通った土色であり、しかも礫が咬んでいたり土色が判りやすいところはいいのであるが、断面で観ても分層しにくい場所での、しかも平面上での堀削となると、なかなか思うようにいかなかったのが正直なところである。また、1つの層に一時代の遺物のみを包含する層は皆無であった。2・3・4層は、観た目・質共に変わらない黒墨色土を概念上で分層したものである。他の分層できる層全てに一時代以上の遺物が確認された。したがって、この層はこの時代からこの時代の範囲の遺物を包含する層、というように判断し、調査する格好となつた。ただし、7層・7'層ともなると、坪ノ内遺跡で出土した全ての時代の遺物を包含するといった具合であった。

平成9年度は、III区及びI区拡張部とII区拡張部を行なった。I区拡張部はI-D区でS103を検出したことで、II区拡張部は排水用に掘った溝から4~5世紀の土師器が出土したことにより、共に圃場整備予定地内にあったことから抜けたものである。調査区を拡大し、つまりIII区を設定調査したのは、平成8年度の調査I区・II区、特に谷部に位置するII区から時代も種類も実際に様々な遺物が流れ込んだかたちで出土した為、今回の圃場整備予定地内ではない北西(山側)には拡張する必要はないが、圃場整備予定地内でII区より北東の丘陵部には遺構が広がっている可能性が極めて高いと考えたからである。しかし、結果的にはS103・SX01を検出した地は、流れ込みによる遺物を採取することが中心となった。第4章の基本層序で触れる理由により、地山上面で江戸時代の磁器と4~5世紀の土師器が並んで検出されるといった様相であった。III区の立地条件からすれば、遺構が拡がっていたのは間違いないと考えられるが、後世の水田化に伴い失われたようである。

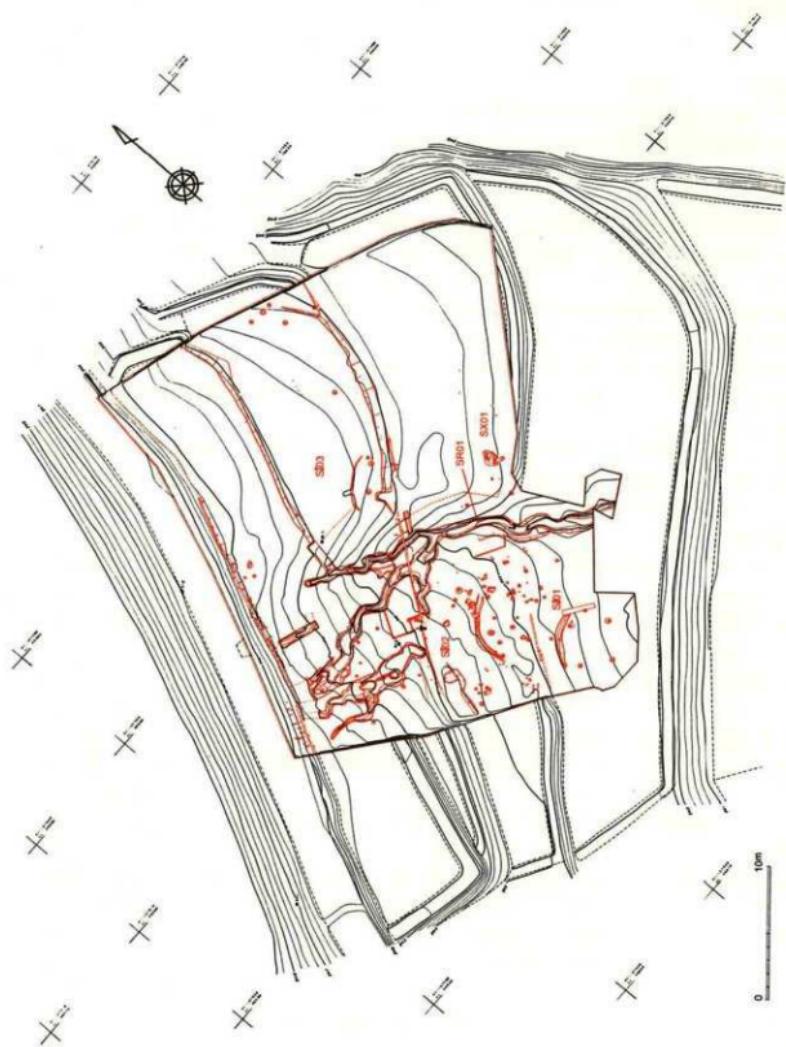
調査結果から、気になる事象として4層以上から検出された鉄滓(図版10b.c.)は、大きくて重くがっしりしたものであった。炭化物の付着が認められることから、精鍛滓(大鍛冶に伴う)と思われる。4層上面で、4~5世紀の土師器及び8~9世紀の須恵器蓋杯、身の口縁部と共に伴していることから、奈良・平安時代の製鐵(大鍛冶)がこの地にあった可能性を感じた。しかし、この後の章で述べるとおり、結論には至らなかった。

尚、この二カ年度に及ぶ現地調査及び発掘調査報告書を終了することができたのも、土地所有者の御理解と御協力、そして発掘作業員、整理作業員の功労によるものである。吹雪く中、積雪の中、真夏の炎天下のなか、また気の遠くなる程の遺物の洗いから注記、実測図のトレースまで等々、熱心に力を注いで頂きました。著者の励みになりました。ここに記して謝意を表したい。

第2図 坪ノ内遺跡 調査前地形図・調査区設定図



第3図 坪ノ内遺跡 調査後地形図・遺構位置図



## 第4章 遺構と遺物

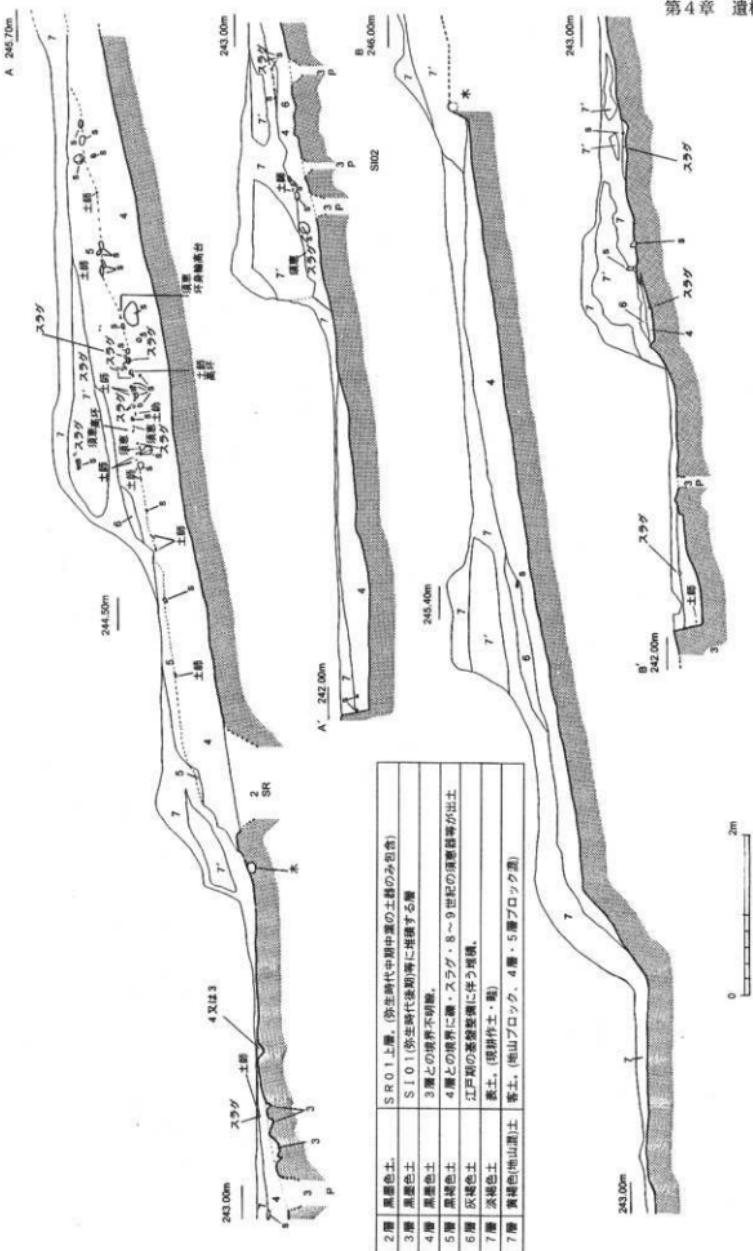
### 基本層序 (第2・12図)

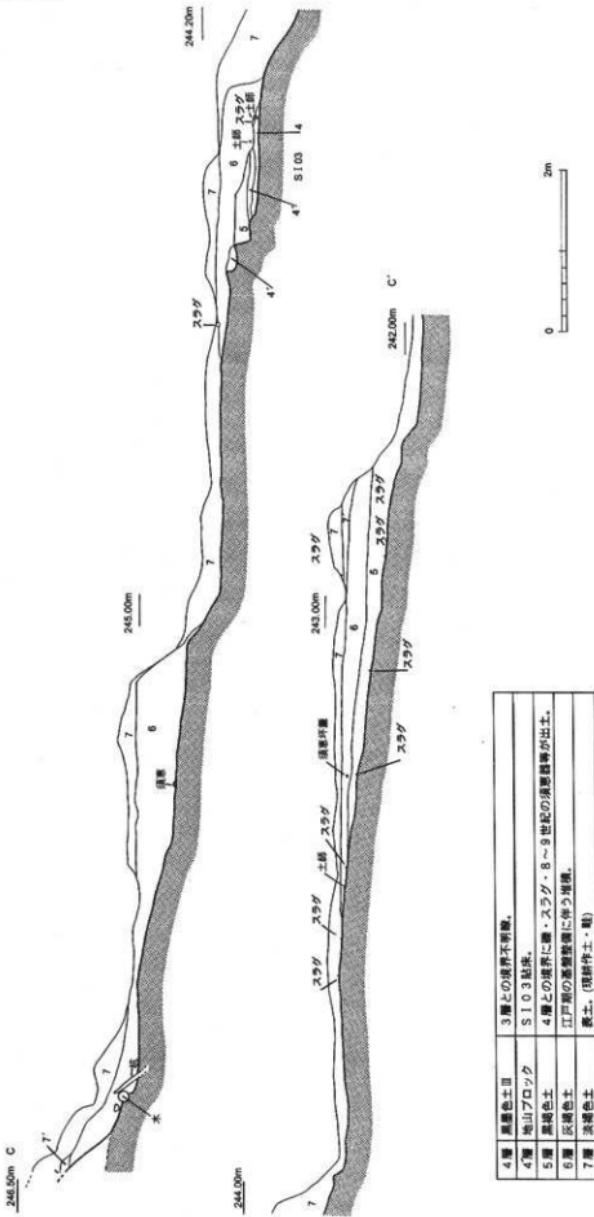
坪ノ内遺跡は圃場整備予定地内に所在する為、まず耕作土を削除移動してから行なった。基本的な土層堆積の状況は、第2図A-A'及び第12図の断面図をもとに示す。

まず、地山〔無遺物層〕(灰褐色～黄褐色)の上に、1層、SR(自然流路である旧谷側跡)の下層に堆積した黒色土砂礫層。その上層でありSRを完全に埋没させた2層の黒墨色土Ⅰ。そしてSI01等の遺構を埋没させた3層の黒黒色土Ⅱ。調査区I・II区の地山上面を覆いつくす4層の黒墨色土Ⅲ。統いて5層の黒褐色土。そしてⅢ区(第2・6図D-D'・図版10a・遺物28-1)の調査で江戸時代(18世紀中葉から末)の水田(面)が存在したことが判明した6層の灰褐色土。その上に現在の水田を造る際、客土された7'層の黄褐色(地山混)土。そして最上層に、表土である7層の淡褐色土(耕作土の一部や畦)となる。そして遺構の貼床等の他の層がそれらに割り込んでくる。

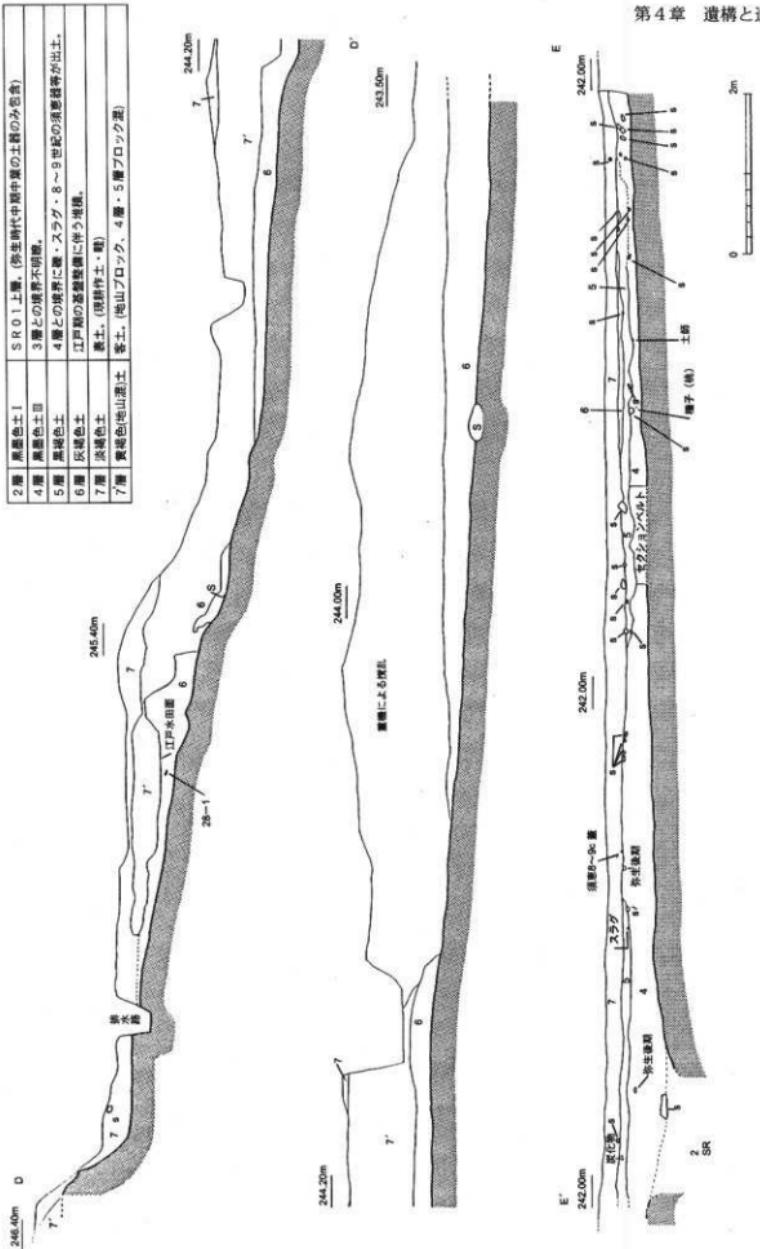
本村の様に平地の限られた山間部で耕地を確保する為には、先人の工夫に工夫を重ねてきた歴史と、結果としての棚田などの風景があるわけであるが、前回の発掘調査であった圃場整備に伴う昔城遺跡同様、調査区内は緩斜面である為、雨水によって地山面は寝食され、また6層は江戸時代の水田時の堆積、7'層が地山ブロックを含む層であることから、6層以後の時代に大規模な圃場(基盤)整備が行なわれたようだ、調査区山側は地山面まで切り取られている。山側(上方)を切り取り、谷側(下方)へ客土し、できるだけ広い耕作面積を確保しようとする智恵・工夫の跡が読み取れる。第2図と図版2cなどに見える松と思われる上留めの杭は、7'・7層堆積時のそれに伴うものと考えられる。したがって坪ノ内遺跡とは、地山面にわずかに残る、豊穴住居跡や柱穴などの遺構と、7'・7層堆積時の基盤整備による掘削・削除を免れた堆積、客土された堆積からの情報によるものと言える。ただし分層した層からの情報は明確なものではなかった。例えばSR上層の2層と3層及び4層は、2層以下からの遺物が弥生時代中期中葉と限られた時期であるのに対し、SI01等遺構に伴う3層からは後期の遺物が出土するという事実に基づき、観念的に分層したもので、著者の視覚、触覚において分層できるものではなかった。また調査区I・II区の(江戸期の削除を免れた部分)地山を覆う4層は、弥生時代中期中葉からおよそ8～9世紀以前の遺物を包含する層であることにより、3層と観念的に分層したものである。もちろん4層内も黒墨色土といふ闇夜に鳥状態の様相で5層までは分層できるものではなく、さらにSRやSIという基準や、混在する遺物のレベルにも一貫性を見い出せなかつたことから、観念的にも分層できなかった。この4層と5層は、黒墨色土に対しわずかに茶味を帯びた黒褐色土が堆積しており、視覚的にも分層できる。また第4図A-A'に観られるように、4層5層間に礫を咬む面があり、そこからは鉄滓と8世紀から9世紀の須恵器が出土し、著者を一時興奮させた(図版9a, 8c.)。しかし、調査の結果、製鉄に関連する遺構はもちろん、その時代の明確な遺構すら検出できなかったこともあり、また後述のことなどから結論には至っていない。今後、科学的な分析を依頼しその後を追ってみたい。実は同じく4層と5層の間のところ(第4図A-A'の最も山側のところ)で、第13図I-A・II-A区遺物出土状況図にあるとおり、古墳時代中期の土器がまとめて出土している。第13図中の遺物18-3腹の胴部が欠落しているのは、第4図7層すなわち現代の耕作によってある(図版8a,b.)。さらにII-D-D'で排水用に抜いた溝から、SR01と別の流路らしきものを確認した。旧谷川跡と認識し、また排水路として使用していたことから、この部分(II区拡張部)の調査を結果的に後回しにしてしまった。そして調査期間終了時に、駄目押しで掘削してみたところ、

第4図 坪ノ内遺跡 土層断面図(第2図A-A' B-B')





第5図 坪ノ内遺跡 土層断面図(第2図 C-C')



第6図 坪ノ内遺跡 土層断面図(第2図 D-D'・E-E' ) (1:60)

図版10b.c.にあるように、炭化物(炭)の付着のある鉄滓が出土した。あわてて拡張すると占墳時代中期の高坏(遺物17-1)や甕が出土し、著者をさらに動搖させた、しかしその後この高坏(17-1)に並んで、8~9世紀の須恵器蓋坏身の口縁部碎片が出土した。この第13図(II区拡張部土層断面図)の様な、旧流路あるいは遺構?の一部が確認された。当初想像していた2層以下の堆積ではなく4層による堆積で、窪み?の中にも占墳時代中期の甕が含まれていた。調査期間の問題が起ってしまったことと、今回の圃場整備で切り取られる標高にならなかったことを幸いに、それ以上の拡張しての調査は行なわなかった。4層以下からは出土しないものとして、5層からは、8世紀から9世紀以降、桃山時代以前の貿易陶磁器などが出土している。他に鉄滓や土師質上器(カ ワラケ)なども出土している。6層は、灰褐色土で江戸期の圃場整備に伴う堆積であることはすでに述べたが、図版9c.の白磁玉縁碗(遺物25-8)は、11世紀後半から12世紀のものであるが、第4図B-B'下段の6層に対応する出土である。また、図版6b.の雷文のある青磁蓮弁文碗(遺物26-7)は、14世紀中葉から15世紀のものであるが、第5図C-C'上段左のS I 0 3上面の6層からの出土である。これらの貿易陶磁器の出土は、恐らく調査区の上方(山側)からの客土であろうから、その辺りには中世の遺構がある(あった)と思われる。7'層は、発掘調査前の段階(今回の圃場整備前)の水田を造成する際の客土であり、地山ブロックを含むことから、調査区の地山面をカットした時のものである。7層は、今回の圃場整備前の表土(水田面であり畦)である。図版9b.の白磁玉縁碗(遺物25-4)は、遺物25-8と同時期のものである。この7'・7層からは、他に記載したあらゆる時代の遺物が出土している。

以上、旧谷側に流されてきた遺物や、その他、流れ込みではあったものの、実際に様々な時代と種類の遺物が出土したことからも言えることは、今回確認した遺構だけでなく、調査区上方(山側)には、さらに遺跡(遺構や遺物)が広がっているものと考えられる。

以下、遺構・遺物について個別に述べる。尚、出土遺物の大半である流れ込みによる遺物は、前述の理由で、あまり層別に出土遺物を載せる意味が無いように思われたことも手伝って、著者の力量にあわせ大雑把に分類した。間違い等多々あると思われるが、御指導頂ければと願うものである。

#### 遺構と遺跡

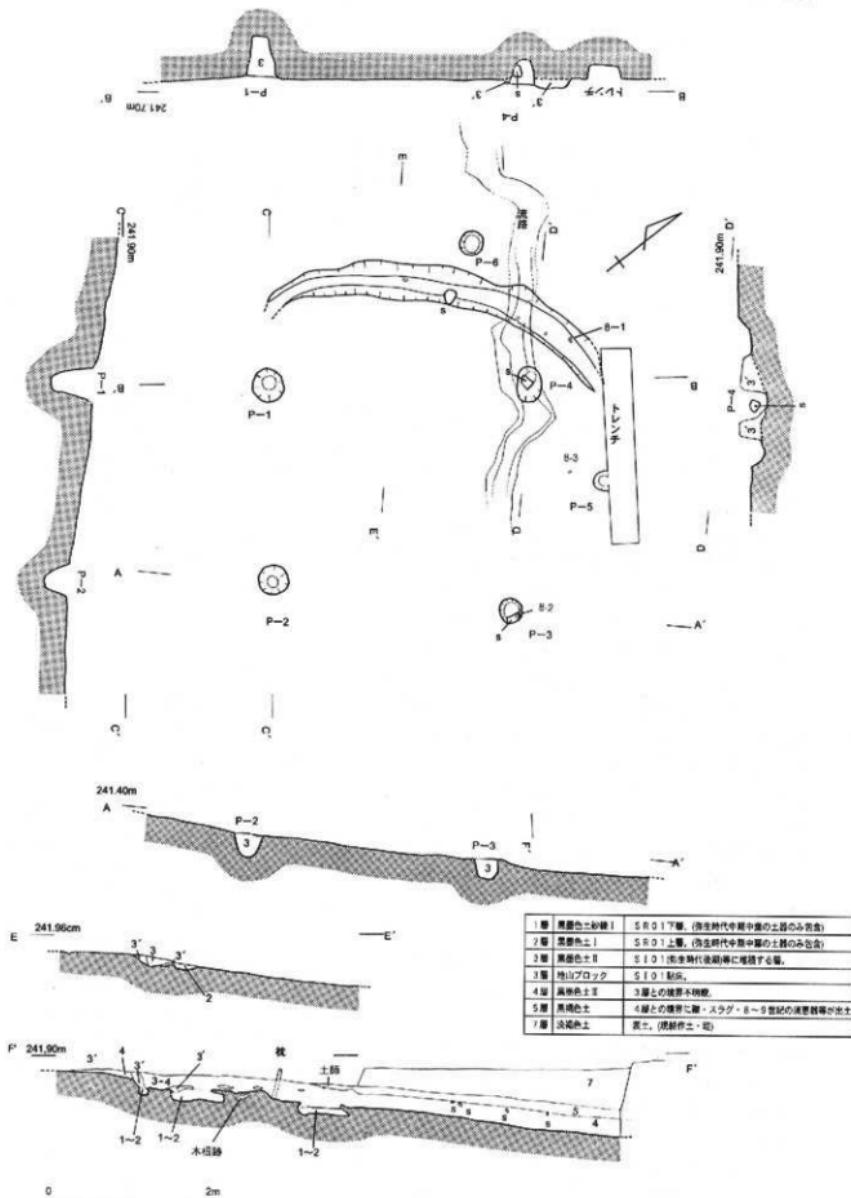
##### S I 0 1 (第2・7・8図)(図版2b.c.3a.b.c.4a.b.c.)

**位置** 調査区の南、I-D区・I区拡張部に位置する。床面は西(山)側の残存状態から、標高約241.60mを測る。I区を拡張したのはS I 0 1の検出による。

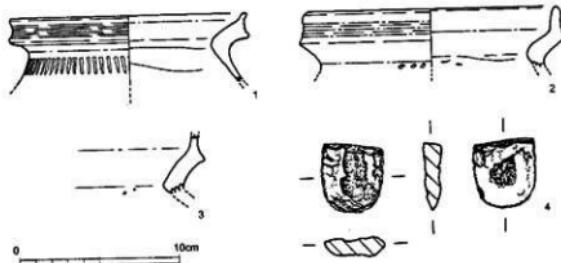
**形状** 5層(黒褐色土)及び4層(黒墨色土Ⅲ)を掘削後、地山面での精査中、壁溝とピット(柱穴)を検出した(図版2b.3a.).建物跡は雨水により流失しており、床面を水平に留めていないが、ピットの並びと西(山)側にかろうじて残った壁溝の形から4本柱の円形の堅穴住居跡であったと考えられる。復元した径はおよそ6mであった。

**覆土** 3層(黒墨色土Ⅱ)(及び4層)により、壁溝、柱穴とも埋没している。実は、丁度P-1の真下を通過するかたちで、細く浅い自然流路跡が検出された。その流路は、S R 0 1と同様2層(又は1層)により埋没しており、P-4は、その堆積した2層の上に3'層(地山ブロックと2層を混ぜたもの)の貼床を施し、床面を整えた上から掘り込まれたものであった。また、F-F'-E-E'を観ると、壁溝も流路の2層を切るように上から掘り込まれ、後から3'層を貼り付け調節し、床面側も貼床をしていることが判る。

**床面** 山側に残るP-1及びP-2の3'層(貼床)上面の標高から、床面の標高241.60mを測る。壁溝は、山側と壁溝下場との比高で約15cm。壁溝下場の標高約241.55cmであった。縦上で記述したとおり、3'層を



第7図 坪ノ内遺跡 SI01 実測図 (1 : 60)



第8図 坪ノ内遺跡 SI01 出土遺物 (1:3)

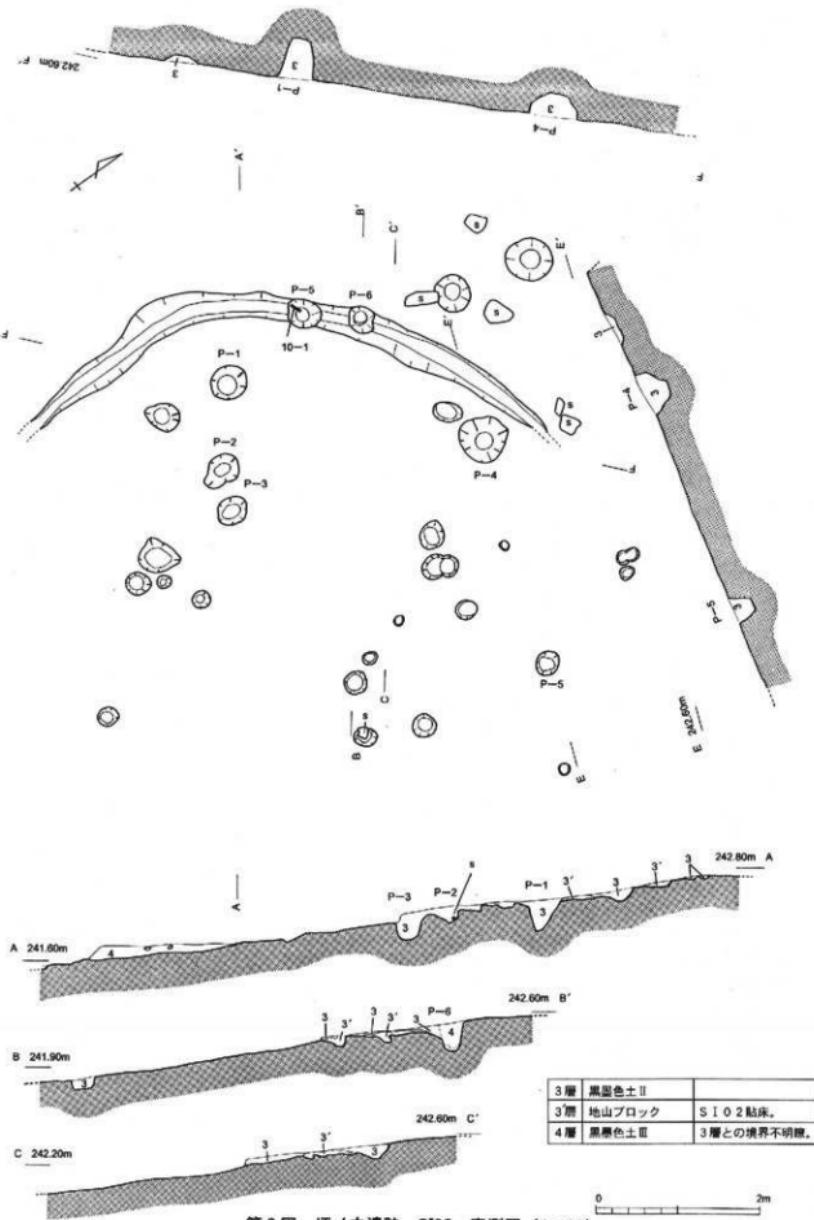
品目	器種	口径 cm	残高 cm	残存状況	胎 土	調 整		色 調		外 面 煤	時 期	調査区				
						口縁部 外 面	口縁部 内 面	内面頭 部以下	外面頭部 ~肩部	外 面	内 面					
1	弥生土器	要	14.6	4.2	不良	良好	2mm以下の 砂粒を含む	4条の凹 線模様	回転 ナデ	ヘラケ ズリ	1cm幅の工 具の刺突文	純い 黄焼	浅黄燒	無	後期 前半	I-D区 整内
2	弥生土器	要	15.5	3.5	不良	良好	3mm以下の 砂粒を含む	不明瞭な3条 の凹線模様	回転 ナデ	ヘラケ ズリ	5cm幅の工 具の刺突文	灰黃燒	浅黄燒	有	後期 前半	I-D区 (P-3)
3	弥生土器	要	/	2.9	不良	良好	3mm以下の 砂粒を含む	回転ナデ	回転 ナデ	ヘラケ ズリ	ナデ	純い 黄焼	純い 黄焼	有	後期 前半	I 区 北端部
4	石 器	磨製 石斧					砂岩製、幅:約4cm、厚さ:およそ1.5cm、先端から4cmのところで折れる。	4条の凹 線模様	回転 ナデ	ヘラケ ズリ	1cm幅の工 具の刺突文	純い 黄焼	浅黄燒	無	後期 前半	I 区 北端部

第8図 坪ノ内遺跡 SI01 出土遺物 観察表

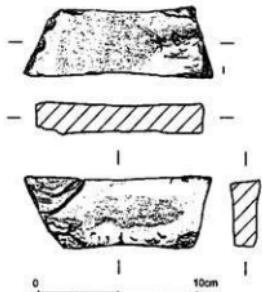
駆使し、低いところを埋るなど、床面などを調節していたようである。

柱穴 残存部から4穴のピットを確認した。その他付近にP-5・6が検出されたが、II-C区を中心とする柱穴群と同様、SI01との関連性は見い出せなかった。柱穴の上場は、歴史の中で流失していたり、調査中コンバネやブルーシートで覆っていたにもかかわらず、緩斜面であるために雨水が流れ込み崩れたりした。その為、柱穴の上場の径は記述できなくなってしまった。したがって下場の径を記述する。P-1・3が約18cm、P-2・4が約14cmであった。また、柱穴下場の標高は、P-1～3が標高241.00m～240.95mの間で、誤差実に5cmであった。P-1～3に立っていた柱は同一の長さであったに違いない。対しP-4の下場の標高は241.30mで、他の柱穴との誤差30cmである。P-4のみ前述のとおり、流路の関係で様相をことにしていったが、柱の長さも違っていたのであろうか。柱間は、P-1～2が2.46m、P-2～3が2.94m、P-3～4が2.94m、P-4～1が3.16m。誤差が70cmあるが、P-2～3とP-3～4はまったく同じ間隔であった。このことからP-4は、他の柱穴とはやはり無関係ではなくSI01に伴うものであることが判る。

遺物（第8図、図版11a） 弥生時代の遺物が出土した。壁溝内から出土した土器遺物1は、二重口縁端部のあまり上方への発達が観られない、やや内向する口縁を持つ。明確ではない4条の凹線文があり、外面頭部に刺突文のあるもの。P-3から出土の遺物2は、二重口縁は内向し、屈曲する部分外面が下方に発達していないもの。不明瞭な3条の凹線文があり、外面頭部に刺突文のあるもの。外面に煤付着あり。遺物3は、二重口縁の端部を失っているものであるが、ナデ調整で無文である。全体の器形は2に近いが、二重口縁の屈曲部外面が下方に発達してきているもの。外面に煤が付着している。3は、折れた磨製石斧である。が、完形でもいわゆる木を切り倒すといったイメージの大きさではない。磨製石斧にも用途は色々あったものと想像した。遺物の時期は、土器より石見V-1からV-2初め頃と思われ、この竪穴住居跡は、弥生時代後期前半頃のものと考えられる。



第9図 坪ノ内遺跡 SI02 実測図 (1:60)



器種		備考		
10kg	石器	砾石	備考	時 期
褐色質質岩製。			幅:3.3~4.4cm, 厚み:1.4~1.9cm, 四端は破損している。	
1			4面いずれも核用直有り。 色調は灰色, 152.5gを量る。	不明。層位的に、8~9世紀の可能性が高いとみる。 E-C (P-S)

第10図 坪ノ内遺跡 SI 02 出土遺物観察表

第10図 坪ノ内遺跡 SI 02 出土遺物 (1:3)

S I 0 2 (第2図・9・10図)(図版2 b.c. 4.c. 5.a.c.) 位置 調査区の南、I-C・II-C区、S I 0 1 上方(山側)に位置する。

形状と覆土 西(山)側の残存状態、第19図A-A'の3'層が貼床の一部と考えた位置から、標高約242.40mを測る。4層(黒墨色土Ⅲ)を掘削後、地山面での調査中、山側にわずかに残る壁溝と並びの不明なピット群を検出した。完掘後、この壁溝の形状から復元して、想像の域であるが7m前後の円形あるいは隅丸の豊穴住居跡と思われる。

床面 床面は地平を保たず、そのほとんどは雨水や後世の水田化に伴い失われたものと思われる。柱柱穴 S I 0 2 に伴う確実なピットは不明であった。P-5・P-6は、壁溝内に後に掘り込まれたものであり、S I 0 2 に伴わないものと考えられる。

遺物 第10図の砾石(図版5c)があるが、S I 0 2 に伴わないものと判断した。実はS I 0 2 の復元した住居範囲内から、二重口縁(甕)の碎片を採取している。端部もないが立ち上りの受け部の突出部分から弥生時代末~古墳時代初頭のものと思われる。この遺物と層位からS I 0 2 の時期を考えた。

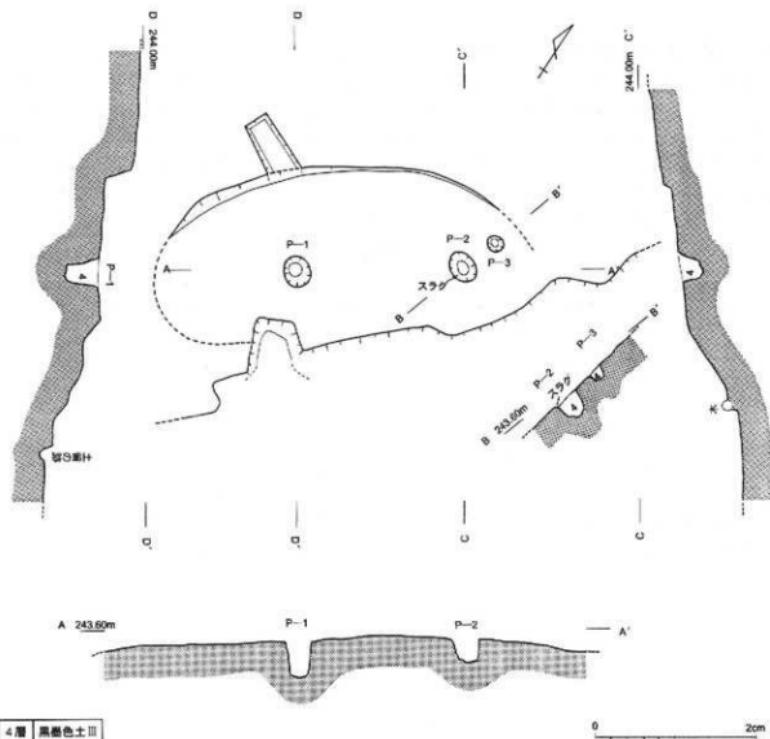
S I 0 3 (第2・5図、図版6 a.b.c.)

位置 調査区中央、II-B区とIII-C区の境界に位置する。後述するSRの南にSR 0 1・0 2 が位置していたが、S I 0 3 はSRの北に位置する。第5図C-C'上段右端のS I 0 3 の土層断面図から、床面は西(山)側の残存状態から、貼床と考えられる上面で標高243.66m。地山面で標高243.50~243.62mである。

形状と覆土 S I 0 3 は、当初第5図C-C'のセクションベルトに壁溝の可能性が考えられる段と平坦面を確認し、その存在の予想を立てていたものである。しかし調査Ⅲ区は、調査Ⅱ区が谷部にあたり4層以下の堆積を残すのに対し、丘陵部にあたる為、基本層序で述べたとおり江戸時代の水田化に伴う基盤整備と、現代までの影響を強く受けたことによって、地山面もかなりの部分削除されている。仮に江戸期の基盤整備による掘削を逃れている箇所も、丘陵部である為、4層の堆積は、セクションベルトで確認できるS I 0 3 の壁溝の段によってわずかに残されたものを確認できる程度であった。したがって、地山の上には、占めて5層・6層そして7層が堆積していた。それらの層を掘削削除し地山面での精査をすると、平面に5層による三日月状の堆積が現れたことから、やはり住居があったと調査したものである。

円形の豊穴住居と考え、復元すれば約5.5~6mになる。S I 0 1 と同じか一回り小さいものようである。地山面に壁溝が無い。4'層にて壁溝を作ったどうか。

床面 先のも述べたように、江戸期以降の基盤整備等の影響で、そのほとんどが失われている。セクションベルトにて確認した貼床と考えた地山ブロックの4'層は、平面では明確には広がっていないかった。



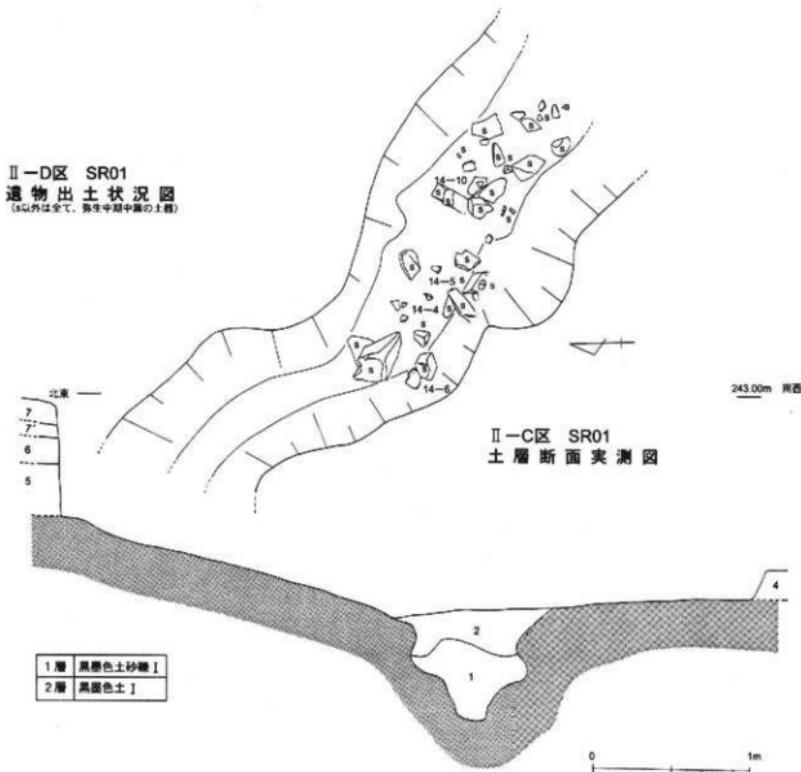
第11図 坪ノ内遺跡 S103 実測図 (1:60)

柱穴 残存する平坦面に3穴確認した。他にピットが検出されなかったことからも、この平坦面に対応するピットと間違いないと思われる。P-1とP-2は、2.1m。下場の標高はP-1が243m、P-2が243.2mを測り、誤差20cmであった。

遺物は、ピットから土師質の土器の碎片を検出したのみで、それも実測できるものではなかった。(須恵器の碎片もない)注目すべきは、地山にめり込むかたちで鉄滓が数点確認されたことである。このことからも3層(黒墨色土Ⅱ)とした堆積ではないことがわかる。図版6cに遺物26-7及び鉄滓が確認できる。龍泉窯系の口縁に雷文帯を持つ青磁碗は、14世紀中葉から15世紀のものであるが、4層(黒墨色土Ⅲ)の上に堆積する5層(黒褐色土)に包含するものである。5層は、8~9世紀の須恵器が認められ、また江戸時代の遺物は認められない堆積である。I-D区5層からは朝鮮通商も出土している。S103で検出した鉄滓は4層に包含するものである。4層は弥生時代中期中葉から8~9世紀の須恵器までを包含する層である。以上のこの建物に対するわずかな情報と、層位的な関係からS103は、その時期をあえて言えば4層に対応するが、およそ床面地山での鉄滓から、8~9世紀に建てられたものと考えている。

第12図 (第3図・第4図A-A'・第6図E-E')(図版7a.b.c.)

調査区西、I-A・II-A区から出現し東へ向かい、調査区およそ中央で東南に進路を変えつつ延びながらII-D区で調査区外となる旧谷側跡。II-C区で一筋の流れとなるまでに、3本以上の流路が確認できたが、後述する内容を理由に、SR01として扱ったものである。第2章で述べたとおり、調査区は谷部から丘陵部にかけて立地しているが、調査前までこの場所はかつての水田化に伴い、地面は切り盛りされ、当然のことであるが地平を保つ土地に化けている。しかし、発掘調査によって地山面まで掘削すると、調査区周辺の地形を受けた正直な姿が現われた。このSRは、1層である黒墨色土砂礫Ⅰの最下層と、2層である黒墨色土Ⅰにより完全に埋没しその機能を終えたものである。ただし、この分層した1・2層は、各層が1回ずつの雨水による調査区上方からの流出で堆積したものと断言はできるものではない。また、1度に堆積した層であったが長い歴史の中で、地下水の流れ



第12図 坪ノ内遺跡 SR01 実測図 (1:30)

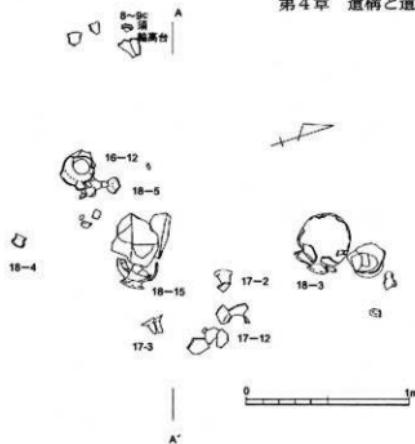
る脈として機能した、後世における理由で結果的に土質が変化した可能性を十分あるものである<sup>1)</sup>。調査中に結果的に、色・質で分層した2層ということに他ならない。このSRから判明したことは、I-A区からII-D区までつながる流路のII-A区とII-B区との丁度境目で出土した遺物と、II-D区で出土した遺物が弥生時代中期中葉の土器のみであったことである。この事実にからいえることは、このSRは弥生時代中期中葉に流れていたもので、またこの時期に埋没したということである。同時に一括して流されてきたと考えられるII-D区で検出した土器や石も、1層から2層にまたがっており、このとからも、1・2層は単純に表しているものとはいえない。出土した遺物については、第14図にて照会することにした。

**第13図 上段のI-A・II-A区遺物出土状況図及び、中段のII区拡張部土層断面図について**は、基本層序にて記述した内容と、出土した遺物にては第16~17図にて照会することにし、ここでの記述は割愛させて頂く。尚、これらの事象により、4層には8~9世紀以前、5層には8~9世紀以後の堆積によることが判明した。出土する鉄滓の時期はこの時期である可能性が一層強まった。

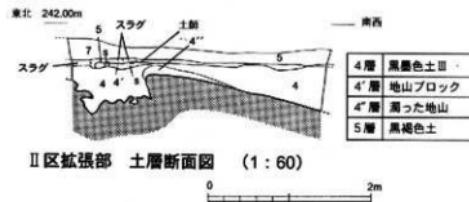
#### その他の遺構 SX01 第13図(下段)

##### (第2図・図版6a.)

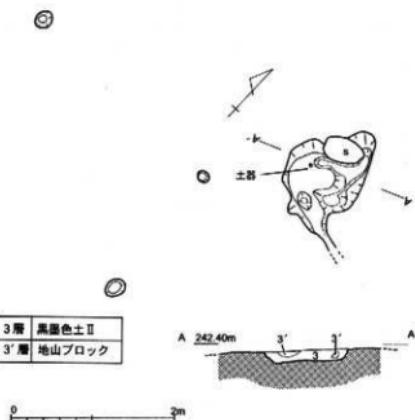
調査III-C区の南に位置。地山面での精査中検出し、当初土坑と考え調査したもの。覆土した黒墨色土に地山ブロックが混入している。遺物は土師質の碎片で不明。自然による堆みにも観えたが、立地に問題がありよく判らなかった。



I-A・II-A区 遺物出土状況図 (1:30)  
(第2図 A-A')

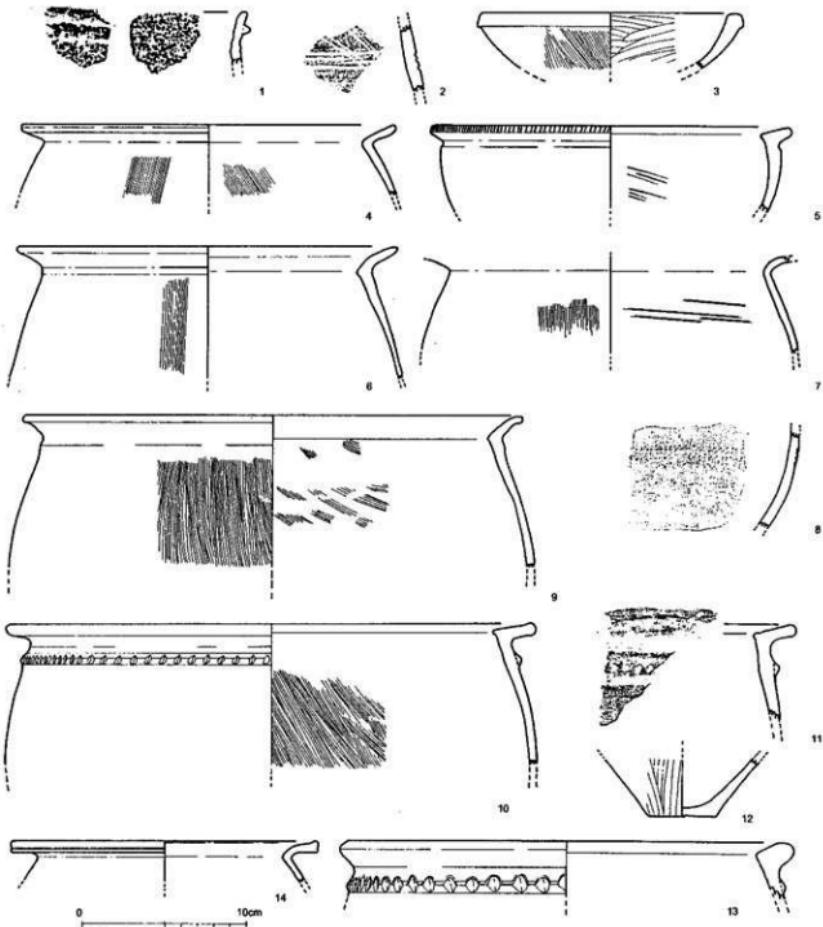


II区拡張部 土層断面図 (1:60)



III-C区 SX01 実測図

第13図 坪ノ内遺跡 I-A、II-A区 遺物出土状況図 他



第14図 坪ノ内遺跡 出土遺物（縄文晩期～弥生中期）（1:3）

## 包含層出土遺物

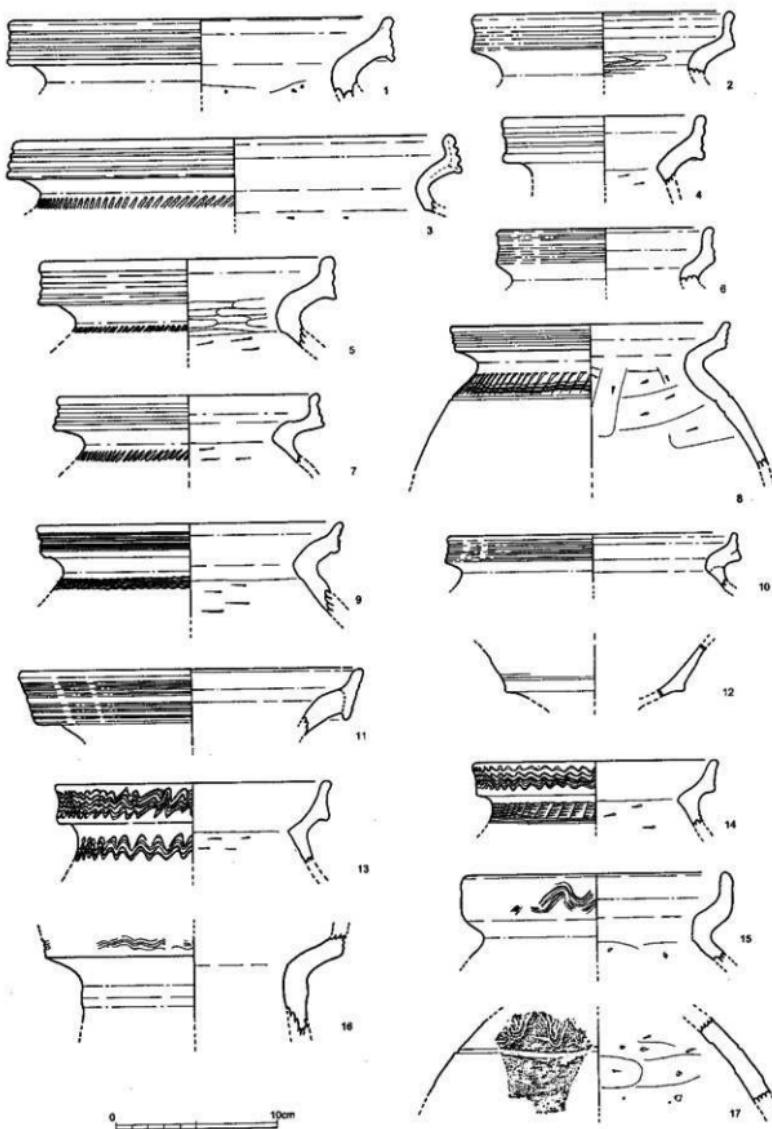
第14図 (図版11b.) 遺物1は、刻目突帯文を持つ深鉢である。縄文晩期。羽須美村での縄文土器の出土は、かつて今西遺跡から土器器の中に混在する形で、縄文晩期初頭頃の壺?底部と思われるものが出土した②1点だけである。残念ながら現存しない。2は、沈線の施された土器片で、縄文晩期の深鉢あるいは弥生前期の壺?と思われるもの。3から14は弥生中期中葉のもので、3・5が高壺と考えられるものの、3が口縁端部を丸くおさめているのに対し、5は壺に近い口縁を持ち、端部に刻目が入っている。それ以外は甕である。4・5・6・10は、II-D区SR01内からの出土である(第12図)

14 回	器種	口径 cm	底径 cm	深高 cm	残高 cm	焼成	胎土	調整等	色調 外面 内面	時期	調整区
1	縄文土器	/	/	/	3.3	良好	3mm以下の砂粒を含む:粗	割目突き文基盤土器。口縁部のカザミ不規則。外側内面共に黒いナデ。	黒い黄 黄灰	縄文時代 後期後半	I区
2	圓文の器 又は弥生の器	/	/	/	4.2	良好	2mm以下の砂粒を含む: 悪	外側内面共にナデ、外側にヘラ状工具による花瓶。	黒い黄 黄灰	圓文時代、又は 弥生最初の量	E-J地
3	弥生土器	15.6	/	/	3.5	良好	1mm以下の砂粒を含む: 悪	口縁部:ヨコナデ、外側:ハケ目、内面:ミガキ	黒灰 灰黑	弥生時代 中期中葉	4段目
4	弥生土器	22.6	/	/	4.4	良好	0.5mm以下の砂粒微量含む: 悪	口縁部:ヨコナデ、外側:ハケ目、内面:ハケ目	灰黄 灰黄	弥生時代 中期中葉	4段目
5	弥生土器	21.6	/	/	5.3	良好	0.5mm以下の砂粒微量含む: 悪	口縁部に削目文、外側:ナデ、内面:ハケ目?後ナデ	灰(清潔) 灰(清潔)	弥生時代 中期中葉	4段目
6	弥生土器	23	/	/	8.3	良好	0.5mm以下の砂粒微量含む: 悪	口縁部:ヨコナデ、外側:ハケ目、内面:ハケ目後ナデ	黒(清潔) 灰(清潔)	弥生時代 中期中葉	4段目
7	弥生土器	/	/	/	6	良好	0.5mm以下の砂粒微量含む: 悪	口縁部:ヨコナデ、外側:ハケ目、内面:ハケ目後ナデ	灰白 灰白	弥生時代 中期中葉	4段目
8	弥生土器	/	/	/	9.2	良好	1mm以下の砂粒を微量含む: 悪	割目外側:ハケ目、4条の棒状工具による?斜刻文。 内面:ハケ目後?ナデ	灰黄 灰灰	弥生時代 中期中葉	4段目
9	弥生土器	30	/	/	9.4	良好	1mm以下の砂粒を含む: やや粗	口縁部:ヨコナデ、外側:ハケ目、内面:ハケ目後ナデ、 部分的にミガキ	明赤褐 灰黄	弥生時代 中期中葉	II区
10	弥生土器	31.8	/	/	8.8	不良	3mm以下の砂粒を多量含む: やや粗	口縁部:ヨコナデ、外側:削目突き文、調整不明。 内面:黒いナデ目	黒褐 黒褐	弥生時代 中期中葉	4段目
11	弥生土器	/	/	/	6.1	良好	1mm以下の砂粒を微量含む: 悪	口縁部:ヨコナデ、外側:削目突き文、ハケ目、 内面: 黒いナデ目	灰灰 灰灰	弥生時代 中期中葉	II区
12	弥生土器	/	4	/	3.6	良好	2mm-0.5mm以下砂粒微量含む: 悪	外側:ミナリ、底盤:ミガキ?、内面:ナデ、 外側:ミナリ、底盤:ミガキ?、内面:ナデ、	暗灰青 灰黄	弥生時代 中期中葉	II区
13	弥生土器	18.4	/	/	2.7	良好	1mm以下の砂粒を微量含む: 悪	口縁部:ヨコナデ?、ヨコナデ、外側:調整不明、 内面:ハケ目後ナデ	浅黄 灰黄	弥生時代 中期中葉	4段目
14	弥生土器	26.4	/	/	3.5	良好	3mm-1mm以下砂粒微量含む: 悪	口縁部:外側内面共にヨコナデ、 内面:ハケ目後ナデ	黒(清潔) 黒(清潔)	弥生時代 中期後葉	II区

第14回坪ノ内遺跡 流れ込み遺物(縄文晚期～弥生中期) 観察表

(図版7a.b.c.)。遺跡からは、S101等弥生時代後期の遺構や遺物を検出しているにもかかわらず、SR01からは弥生時代中期中葉の遺物のみ検出されたことから、中期中葉に流れていた自然流路であり、後期までには埋没し、その機能を失っていたことが判る。4・6・7・9はその形態をほぼ同じくするものであるが、9のみ色調を異にしている。7・8は同一固体と思われる。11・12・13は突帯のあるもの。11と12は同一固体である。11と10は、刻目のある突帯の位置が微妙に違うことと、焼成が11は良好であるのに対し12は焼きが悪いことから、別固体であることが判る。13は、器厚・作り共にばてつとしており、他のものとは異質な感じがするもの。14は、口縁端部が上に立ち上がりかけ、また凹線文らしき1条の線がわずかに見受けられるもので、III-2様式初頭のものである。

第15回 遺物12以外の1から17は、弥生時代後期の土器である。4・16は壺と思われ、12は器台(弥生時代末)である。11は器台の可能性があるもの。その他は甕と思われる。口縁部の調整により、以下のとおり分類した。①円線の角が丸く、比較的幅の広いもの。遺物2・4・6・7・10・11が該当する。②凹線に角が残るもので、1・3・5・8。③櫛描きによる沈線のあるもの。③-1、平行沈線のあるもので9。③-2、波状文のあるもの、13・14・15・16・(17肩部)。編年では、石見V-1様式・吉川編年Ⅱに対応するものが、10。石見V-2様式・吉川編年Ⅲが、1・2・3・4・5・6・7・8・11。石見V-3様式・吉川編年IVが、9・13・14・15・16・17。(12は、石見V-4様式・吉川編年Vと思われる。) (遺物8は、図版11c.)

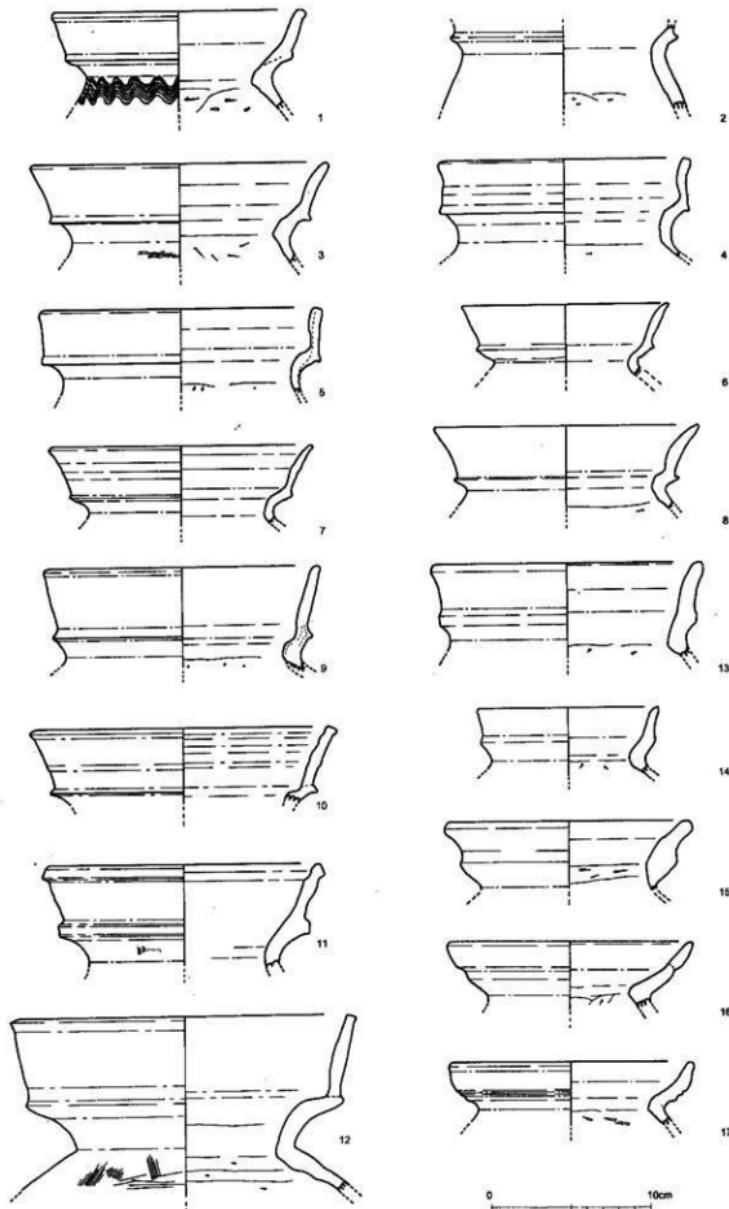


第15図 坪ノ内遺跡 出土遺物（弥生後期）（1:3）

15図	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残高 cm	焼成	治土	調整等			周縁部 内面	色調 外側	石見V2・ 吉川V4	媒	時期	調査区
								口縁部外面	口縁部内面	内壁部以下						
1	弥生時代 甕	23.2	/	/	5	良	3mm以下砂粒多含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	/	淡黄	無い堆	石見V2・ 吉川V4	/	2世紀中葉 ~2世紀末	3段目
2	弥生時代 甕	15.8	/	/	4	良	4mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ・ミガキ	ハラケズリ	網突(河 底)文様	無い堆	無い堆	石見V2・ 吉川V4	有	2世紀中葉 ~2世紀末	II区
3	弥生時代 甕	27	/	/	4.9	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	網突(河 底)文様	淡黄	無	石見V2・ 吉川V4	/	2世紀中葉 ~2世紀末	/
4	弥生時代 甕	6.2	/	/	4.3	良	2mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	/	黄(黄潤)	無	石見V2・ 吉川V4	有	2世紀中葉 ~2世紀末	II区
5	弥生土器 甕	18	/	/	5.7	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	網突(河 底)文様	無い(黄潤)	無	石見V2・ 吉川V4	/	2世紀中葉 ~2世紀末	II区
6	弥生土器 甕	13	/	/	3.3	良	2mm以下砂粒多含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	/	淡黄	無	石見V2・ 吉川V4	/	2世紀中葉 ~2世紀末	II区
7	弥生土器 甕	16	/	/	4.3	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ミガキ不規	/	灰黄褐	灰黄褐	石見V2・ 吉川V4	/	2世紀中葉 ~2世紀末	中央
8	弥生土器 甕	17.2	/	/	9.1	良	4mm以下砂粒多含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	網突(河 底)文様	無い(西側) 有(東側)	灰黄褐	石見V2・ 吉川V4	有	2世紀中葉 ~2世紀末	II区
9	弥生土器 甕	18.6	/	/	5.9	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	網突(河 底)文様	無い(西側) 有(東側)	灰黄褐	石見V3・ 吉川V4	/	3世紀初 ~3世中葉	II区
10	弥生土器 甕	17.6	/	/	3.5	良	2mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	/	灰黄褐	無	石見V1・ 吉川V4	有	2世紀初 ~2世中葉	II区
11	弥生土器 輪台?	21	/	/	4.2	良?	3mm以下砂粒多含1条の巴縫紋	ヨコナデ	/	/	灰黄褐	無	石見V2・ 吉川V4	/	2世紀中葉 ~2世紀末	中央
12	弥生土器 輪台?	/	/	/	3.3	良	2mm以下砂粒多含1条の巴縫紋	ヨコナデ・薄化粧	ミガキ	/	明黄(黄潤)	無い(堆)	石見V4・ 吉川V4	/	3世紀中葉 ~3世中葉	II区
13	弥生土器 甕	16.7	/	/	5.1	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	波状文様	淡黄	無	石見V3・ 吉川V4	/	3世紀初 ~3世中葉	II区
14	弥生土器 甕	14.8	/	/	4.2	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	波状文様	淡黄	無	石見V1・ 吉川V4	/	3世紀初 ~3世中葉	II区
15	弥生土器 甕	16	/	/	5.7	良	3mm以下の砂粒含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ハラケズリ	ヨコナデ	灰黄	無い堆	石見V3・ 吉川V4	/	3世紀初 ~3世中葉	中央
16	弥生土器 甕	/	/	/	6.2	良	3mm以下砂粒多含1条の巴縫紋	ヨコナデ	ミガキ不規	ヨコナデ	灰白(灰 潤)	無い堆	石見V3・ 吉川V4	/	3世紀初 ~3世中葉	II区
17	弥生土器 甕又は 壺	/	/	/	5.5	良	3mm以下の砂粒含	/	/	ハラケズリ	波状文様	淡黄	石見V3・ 吉川V4	/	3世紀初 ~3世中葉	II区

第15図 坪ノ内遺跡 出土遺物(弥生後期) 観察表

第16図 遺物1から17は甕又は壺である。1から16は、二重口縁を持つもの及び二重口縁の退化しているものである。遺物4・5は、口縁部がほどんど外反しないもので、二重口縁の下部と上部端部との径の差が小さいもの。端部に平坦に面取りをするが、古墳初期のもののように端部が外面に突出することなく丸くおさまったもの。口縁下部の突起は、立ち上がりが下方に発達したもの。以上のことから、的場式・石見V-3・吉川IVで弥生時代後期後葉頃のものと思われる。遺物2?・3・6・7・8・9は、口縁部が外反するもので、二重口縁の下部より上部端部の方が径が大きいもの。開いた二重口縁の端部は基本的に尖らせたもので、端部の意識的な面取りは観られない。口縁下部の突起は、受け部が外方に発達したものの以上のことから、鍵尾式・石見V-4・吉川Vで弥生時代末頃と思われる。遺物1は、頸部に波状文があるので、二重口縁の下部より上部の方が径が大きいもの。開いた二重口縁の端部は、明確な面取りは観られないものの、外面に突出している。口縁下部の突起は、受け部が外方に発達したものの口縁部外面に波状文はない。以上から、やはり鍵尾式・石見V-4・吉川Vの弥生時代末頃のものと考えた。遺物10は、二重口縁の下部より上部の方が径が大きいもの。開いた二重口縁の端部は、はっきり意識的に面取りされており、外面に突出している。口縁下部の突起は、受け部が外方に発達したものの。焼成良好。以上から、大木式から小谷式I(古(甕)A)を考えた。古墳時代初頭頃のものと考えられる。遺物11は、誇張された二重口縁を持つもの。口縁下部より上部が径が大きく、外方に屈曲された端部及び、受け部が外方に突出した口縁下部の突起端部は各1条の幅広の凹線が入っている。また、口縁端部内面にも同様の凹線が1条入っている。胎土も特に密でなく、装飾的ではあるが特に丁寧に作られている様子もない。しかし、祭祀的用具であった可能性が高いと

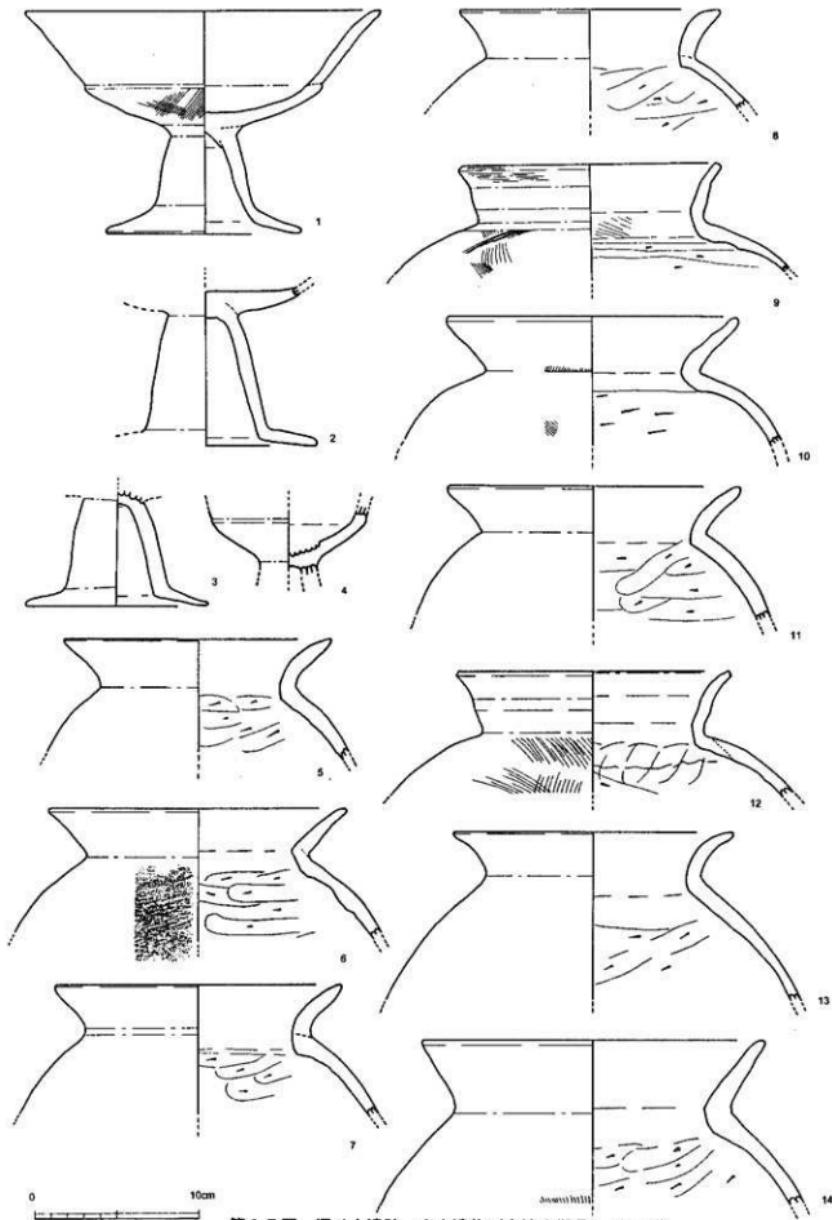


第16図 坪ノ内遺跡 出土遺物（弥生末期～古墳中期I）（1:3）

16 図	器 種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残高 cm	被 成	地 土	調 整 等			外面部 下～壁部 外面	色 調	石見編年 吉川編年	煤	時 期	調査区
								口縁部外面	口縁部内面	内面側頭以下～壁部 外面						
1 新石器時代	甕	15.4	/	6.2	良	3mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	透底文様	黄褐色	淡黃～同	石見V3・ 吉川V	有	2世紀中葉 ～2世紀末	/
2 新土器	甕	/	/	5.2	良	1mm以下の砂粒合	ヨコナヂ?	ヨコナヂ+ナヂ	ヘラケズリ	透底文様	黄褐色	淡黃～同	石見V3・ 吉川V	有	III区 3段目	
3 新土器	甕	8.2	/	6.2	良	1mm以下の砂粒合少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	縞模の??	黄褐色	黄褐色	石見V3・ 吉川V	有		/
4 新土器	甕	14.7	/	6.2	良	1mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	黄褐色	黄褐色	石見V3・ 吉川V	/	中央トレンチI段目	
5 新土器	甕	17	/	5.3	良	2mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	黄褐色	黄褐色	石見V3・ 吉川V	/	II区	
6 土師器	甕又は 壺	21.6	/	4.5	良	1mm以下の砂粒少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	/	/	黄褐色	黄褐色	石見V3・ 吉川V	有	中央トレンチ	
7 土師器	甕	15.9	/	4.9	良	2mm以下の砂粒少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	/	/	黄褐色	黄褐色	石見V3・ 吉川V	有	II区	
8 土師器	甕	16.4	/	5.3	良	2mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	灰褐色	灰褐色	石見V3・ 吉川V	/	II区 3段目	
9 新土器	甕	17	/	6.5	良	2mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	灰褐色	灰褐色	石見V4・ 吉川V	有		
10 土師器	甕	18	/	4.7	良	2mm以下の砂粒少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	/	/	黄褐色	黄褐色	吉川V	/	表探	
11 土師器	甕	16.6	/	6.6	良	2mm以下の砂粒少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	/	/	淡黃～灰褐色	淡黃～灰褐色	吉川V	/	古墳時代 前期後半	II区
12 土師器	甕	20.4	/	11.2	良	1mm以下の砂粒少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	ハケメ後 ナヂ	黄褐色	黄褐色	吉川V	有?	4世紀	
13 土師器	甕	16.6	/	5.8	良	2mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	灰褐色	灰褐色	石見V4・ 吉川V	/		
14 土師器	甕又は 壺	11.2	/	3.8	良	1mm以下の砂粒少含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	ハケメ 不明	黄褐色	黄褐色	小谷Ⅱ新 ～小谷Ⅲ	/	5世紀前葉 ～中葉	中央トレンチ
15 土師器	甕	15	/	4.3	良	2mm以下の砂粒合	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	灰白	灰白	小谷Ⅱ新 ～小谷Ⅲ	有	表探	
16 土師器	甕	15	/	3.8	良	2mm以下の砂粒多含	ヨコナヂ	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	黄褐色	黄褐色	小谷Ⅱ新 ～中葉	/	5世紀前葉 ～中葉	III区 3段目
17 土師器	甕	14.8	/	3.7	良	2mm以下の砂粒合	ヨコナヂ?	ヨコナヂ	ヘラケズリ	/	灰褐色	灰褐色	吉川V	/		

第16図 坪ノ内遺跡 出土遺物（弥生末期～古墳中期I） 観察表

感じた。村内で類例のない器形である。遺物12は、比較的小さく開いた二重口縁を持ち、その端部ははっきり意識的に面取りされており外面に突出している。口縁下部の突起は、受け部が外方に発達したもの。焼成良好で他の遺物に対して大きいものである。第12図 I-A・II-A区遺物出土状況図、図版8 b.12a.にるとおり、遺物17-2・17-3・17-12・18-3・18-4・18-5・18-15などと共に伴していることからこれらは、同時期のものと考えている。それらを総合的に考慮すると、小谷式II古から小谷式III(壺A)と考えた。4世紀後半から5世紀中葉頃(初期須恵器出現頃)。考えられる。遺物13・14の実測図は一見似ているが、13は、遺物9を粗雑にしたような感じであり、9と同様石見V-4と考えた。14は、胎土も密なもので、小谷式II新からIII、4世紀末から5世紀中葉のものと思われる。遺物15は、二重口縁を持つ甕Bで、一瞬石見V-3かとも思ったが、14と同様のものと考えた。14より、口縁の開くもので、外面はびっしり煤が付着している。小谷式II新から小谷式IIIか。遺物16・17は、退化した二重口縁がわずかに認められる16、甕B又は壺Aと、小谷IIの範疇と思われる甕Cの17である[1]。概ね5世紀後半までの畿内化された遺物が本村でも確認された。



第17図 坪ノ内遺跡 出土遺物（古墳中期Ⅱ）（1:3）

17 図	器 種	口径 cm	残高 cm	焼成	海 上	調 整	色 調	塗 装	時 期	調査区
							外 面 内 面			
1	土師器	高杯	21.6	13.8	良好	1mm以下の砂粒 少量含む。密	杯部内外面ハケ日後ヨコナデ。脚部外面 ハケ後ヨコナデ、筒部内面ケズリ	淡褐色	無	
2	土師器	高杯		9.8	良好	2mm以下の砂粒 少量含む。	外縁ナデ、筒部内面ケズリ	褐色	無	
3	土師器	高杯		7.6	良好	2mm以下の砂粒 少量含む。密	外部ハケ日後ナデ又はヨコナデ 筒部内面ケズリ	黄褐色		
4	土師器	高杯		3.7	良好	2mm以下の砂粒 少量含む。密		黃褐色	無	
5	土師器	甕	16	7.5	良好	1mm以下の砂粒 少量含む。密	外部ハケ日後ヨコナデ。口縁内面ヨコナデ 脚部内面ケズリ	褐色	有	
6	土師器	甕	17.8	7.7	良好	3mm以下の砂粒 少量含む。密	口縁部内外面ヨコナデ。脚部外側ハケ日後 ナデ。脚部内面ケズリ	黄褐色		
7	土師器	甕	17.3	8	良好	2mm以下の砂粒 少量含む。密	口縁内外面、脚部外側ヨコナデ。 脚部内面ケズリ	黃褐色	有	
8	土師器	甕	15.6	5.8	良好	2mm以下の砂粒 少數含む。	口縁内外面、下たい頸部外側ハケ日後ヨコ ナデ、脚部内面ケズリ	黄褐色	有	
9	土師器	甕	15.3	7.6	良好	1mm以下の砂粒 微数含む。密	口縁内外面ヨコナデ、脚部外側ハケ日。 脚部内面ケズリ	淡褐色		
10	土師器	甕	17.8	7.7	良好	大粒の砂粒含む	脚部外側ヨコナデ、脚部外側ハケ日後ヨコ ナデ、脚部内面ケズリ?	黃褐色		
11	土師器	甕	17.7	8	良好	2mm以下の砂粒 多く含む。密	口縁内外面ヨコナデ、脚部外側ハケ日後ナ デ、脚部内面ケズリ	黄褐色		
12	土師器	甕	16.4	7.5	良好	3mm以下の砂粒 多く含む。密	口縁内外面ヨコナデ、脚部外側ハケ日 脚部内面ケズリ	淡褐色 ~黒褐色	無	
13	土師器	甕	16.8	10.5	良好	2mm以下の砂粒 含む。粗	口縁内外面ヨコナデ、脚部外側ハケ日後 ナデ。内面ケズリ	淡褐色	有	
14	土師器	甕	20.6	10	良好	1mm以下の砂粒 含む。密	口縁内外面ヨコナデ、脚部外側ハケ日後 ヨコナデ。脚部内面ケズリ	淡褐色	有	

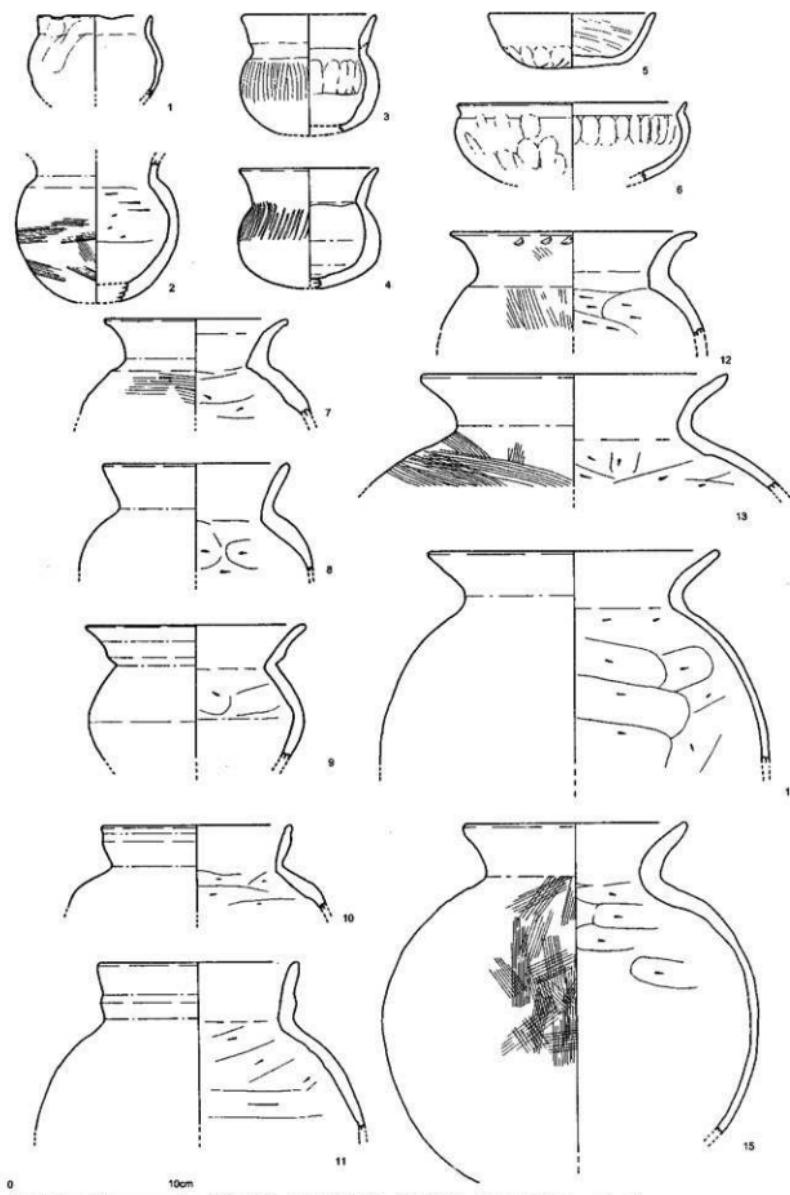
第17図 坪ノ内遺跡 出土遺物(古墳中期II) 観察表

第17図・18図 両図共に全て土師器である。第17図遺物1から4が高杯。第18図1から4が小型丸底甕(土甘)。第18図5は甕、6は甕あるいは小型丸底鉢。両図共にあとには甕又は甕である。甕(甕)の内、第18図7から12は比較的小さいものである。第17図遺物2・3・12(9)、第18図遺物4・5・13・15(及び遺物16-2)等は、調査I-A・II-A区(第13図I-A・II-A区)遺物出土状況図4層と5層の間から一括して出土したものである(図版8.a.b.13a)。甕は口縁部を谷側に向か倒れ、また遺物18-15は石に潰された格好であった。

第17図1は、調査II区拡張部(第2図・13図II区拡張部十層断面図参照)の4'層(地山ブロック)の混在する4層(黒墨色土Ⅲ)上面で確認されたものである(図版12a.10c)。これらの出土遺物は、小谷式Ⅱ古からⅢ(甕だけをみるとIVまで)、およそ4世紀中葉から5世紀中葉(末)のものと考えられる。また、前述のおよそ2つの地点からまとまった山上であり、器種構成が高杯や小型丸底甕も多いことから祭祀に関わるものと考える。水の湧くところに祭祀跡も多いとの教示も頂いた。ただし、8から9世紀の須恵器が共伴又はそれに近い状況での出土でもあり、出土地点で祭祀が行なわれたと断言できるものではない。

さて、第17図の1から3は高杯Bで小谷Ⅱ新~Ⅲ。4は口縁部と杯部の境に段が認められるものの、杯部が楕形を呈しているもので内面は剥離している。高杯Bで小谷式IVあるいは、高杯Cで小谷式Ⅲ・IVか。また、しかし、1から4が接続方法がβで、4が接続方法γであるのかは疑わしい。

第18図の10・11は、二重(複合)口縁の名残がある直行甕で、小谷式Ⅱ新~Ⅲ頃のものと思われる。



第18図 坪ノ内遺跡 出土遺物（古墳中期III）（1:3）

18図	器種	口径 cm	残高 cm	焼成	施土	調査等	色調	煤	時期	調査区
1	土師器 小型丸底壺	6.85	4.8	良好	微砂粒含む	手すくね整形。全面ナデ	淡褐色	無		
2	土師器 大型丸底壺	/	8.9	良好	微砂粒含む	肩部外面ハケ日後ナデ。胸部内面・上半ケズリ 肩部内面下半ナデ	灰黃褐色			
3	土師器 大型丸底壺									
4	土師器 小型丸底壺	8.4	7.5	良好	微砂粒含む。附 大粒の赤色砂粒 含む	口縁内外面ヨコナデ。胸部上半外表面ハケ日 向・下半ナデ。胸部内面折によるケズリ	淡黃褐色	無		
5	土師器 杯	10.2	2.3	良好		内面ハケ目後ヨコナデ。口縁外面ヨコナデ 内部内面ナデ	淡灰褐色			
6	土師器 杯	13.8	3.9	良好	微砂粒含む	口縁ヨコナデ。他は擦による整形後ナデ?	淡褐色			
7	土師器 甕	11	6	良好	微砂粒含む。密	口縁ヨコナデ。胸部外面ハケ目 胸部内面ケズリ	黃褐色	無		
8	土師器 甕	11	6.7	良好	微砂粒含む。密	口縁内面ハケ目。口縁外面ヨコナデ。胸部 内面ケズリ・胸部外面ハケ目後ヨコナデ	褐色	有		
9	土師器 甕	13.2	8.5	良好	微砂粒含む	口縁内面ハケ目。口縁外面ヨコナデ。胸部 内面ケズリ・胸部外面ハケ目後ヨコナデ	黃褐色	有		
10	土師器 甕	11.5	5.4	良好	微砂粒含む	口縁部内外面、頸部内面ヨコナデ。胸部外 面ハケ目後ヨコナデ。胸部内面ケズリ	黃褐色	無		
11	土師器 甕	12	10.4	良好	微砂粒含む	口縁内面ヨコナデ。頸部ハケ目後縦方向 にナデ。胸部内面ケズリ	黃褐色	有		
12	土師器 甕	15	6.5	良好	微砂粒含む	口縁内外面ヨコナデ。胸部外面ハケ目後ナ デ。胸部内面ケズリ	黃褐色	無		
13	土師器 甕	18.5	7	不良	やや大粒の砂粒 含む	口縁外面ヨコナデ。胸部外面ハケ目 胸部内面ケズリ	淡黃褐色	無		
14	土師器 甕	16.6	13.3	良好	微砂粒含む	口縁内外面ヨコナデ。胸部外面ナデ 胸部内面ケズリ	黃褐色	無		
15	土師器 甕	13.2	22.4	不良	微砂粒含む	口縁内面ハケ目。口縁外面ヨコナデ。 胸部外面ハケ目。胸部内面ケズリ	黃褐色	有		

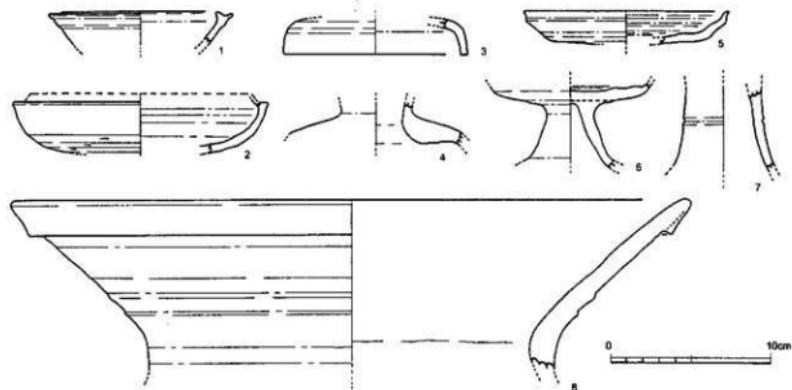
第18図 坪ノ内遺跡 出土遺物(古墳中期Ⅲ) 観察表

第18図の9も二重口縁の名残があるが、口縁がラッパ状に開くもの、胸部中央が屈曲気味である、外面に煤が付着しており実測で見落したが、肩部に粗い刷毛目がある。第18図の7・12は、開いた口縁端部が外面に張り出したもの。第17図の9・12は、屈曲気味に開いた口縁端部は意識的に平坦に面取りを施したもの、頸部は中位で膨らみを帯びている。両方共に焼成良好、質も似たこの二つは現在接合されている。第18図の1は手尽くねによるもの。3・4はほとんど同形のもの。

その他の土師器甕(壺)で、開いた口縁特に外面のプロボーションが比較的内湾気味のものとして、第17図の10・14。開いた口縁が外反するものとして第17図の8・11・13、第18図14が該当すると思われる。口縁も単純でないことが解った。

第19図 6世紀末から7世紀前半の須恵器と思われるもの。遺跡全体の出度量からすると微量であった。遺物1・2は、蓋壺の身である。1は、石見編年5から6A、大谷編年出雲5から6期初か、口径が小さい。2は、1より口径が大きく、立ち上がりも高くなりそうなもの。受部が発達していない。

3は、壺蓋であるが、口縁端部が平坦で沈線の入るもの。4は、壺あるいは甕の肩部。5は、皿又は高壺の壺部で、口縁端部に稜(段)のつくもの。6は、低脚無蓋高壺で透かしの無いもの、大谷編年出雲5～6期と考えられる。7は、恐らく長脚無蓋高壺で透かしは不明、出雲5期か。8は、甕の口縁部である。

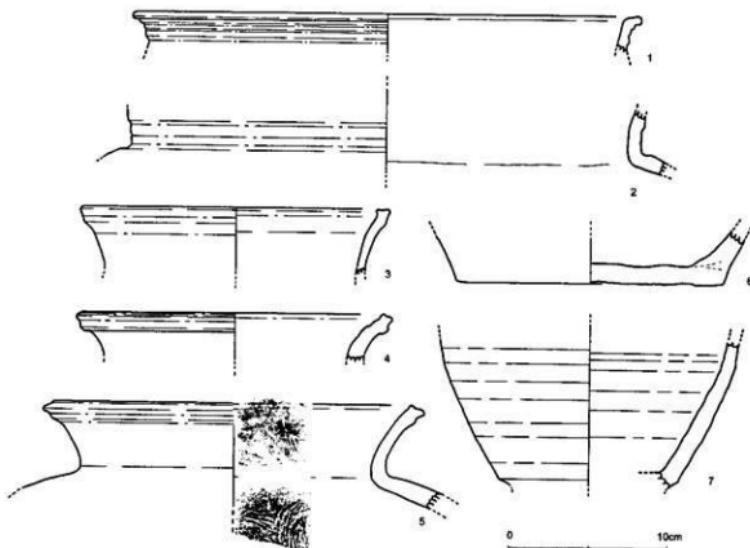


第19図 坪ノ内遺跡 出土遺物（古墳後期I）（1:3）

19 図	器種	口径 cm	底径 cm	現存 高	焼成	胎土	形態・調査	色調
1	須恵器 杯	9.3	/	2.1	良好	緻密	たちあがり短い。回転ナデ調整	灰色
2	須恵器 杯	15.7	/	3.1	良好	緻密	底部回転ケズリ。他は回転ナデ	灰色
3	須恵器 蓋	11.4	/	2.2	良好	緻密	天井部と口縁部の境にわずかに梭口縁部端平坦面	灰色
4	須恵器 蓋	/	/	2.7	良好	緻密	頸部織い	灰色
5	須恵器 盆	12.7	10	2	良好	緻密	高杯の可能性あり	灰色
6	須恵器 高杯	/	/	5.3	良好	緻密	脚は低く、大きく拡がる 杯部底部回転ケズリ	灰色
7	須恵器 高杯	/	/	5	良好	緻密	沈線1条 長頸壺の可能性あり	灰色
8	須恵器 蓋	42	/	10.3	良好	緻密	回転ナデ 全体に雜な調整	灰色

第19図 坪ノ内遺跡 出土遺物（古墳後期I） 観察表

第20図 当初、漠然と奈良から平安時代のものであろうと思い、第19図と結果的に分けてしまった須恵器群。遺物3・4・5は蓋の口縁部である。3は脚部とも考えたが蓋として実測していたもの。口縁端部の中央は凹んでいて、天を持ち上げたような形である。5は焼成が甘い。広島県世羅郡世羅町の自光窯跡から採取されたものに類似していると思われた。自光窯の年代から遺物3・4・5は、6世紀後半から7世紀初のものと考えた。遺物6・7は蓋又は壺の底部及び胴部下部であるが、8から9世紀のものではないかと思っている。遺物1・2は蓋の口縁部及び頸部と思われる。1・2の個体は違うが類似のものと考えている。恐らく頸部は短いもので、残存部で2条まで確認できる凹線と凹線の間は、丸みを帯びて膨らんでいる。類似する器の資料を見つけられなかった。ご教示頂ければ幸いである。

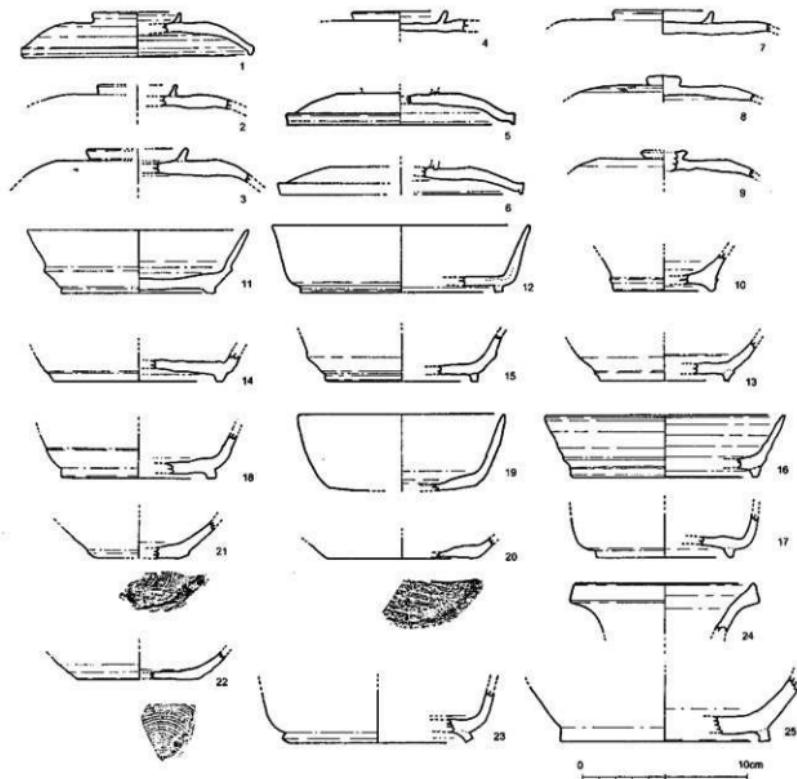


第20図 坪ノ内遺跡 出土遺物（古墳後期II）（1:3）

20 図	器 種	口 徑 cm	底 径 cm	器 高	焼 成	沿 土	形 態 ・ 調 整 等	色 調
1	須恵器 壺							灰色
2	須恵器 壺							灰色
3	須恵器 壺							灰色
4	須恵器 壺							灰色
5	須恵器 壺							灰色
6	須恵器 壺？	/	16.8	2.8	良好	やや粗。砂粒含む	底部ナデ	灰色
7	須恵器 壺	/	10	9	良好	やや粗。砂粒含む	底部ナデ。下端に強いナデ	青灰色

第20図 坪ノ内遺跡 出土遺物（古墳後期II） 観察表

第21図 遺物1から7は、輪状摘みを持つ壺蓋。8・9は、擬宝珠(ボタン状の)摘みを持つ壺蓋。10は、壺又は碗と思われる。焼成が悪く軟質である。11から18は、蓋壺の身である。11・13・15・16は、外面下位に稜が付く。金属器の影響が残るものであろう。器形や高台の付け方を観ると、11と15、13と16が同系と思われる。19は、焼きの甘い軟質の壺で、全面をナデ調整によって仕上げたもの。20は、底部に櫛目状の筋が見える。調整痕であるのか、成形後の乾燥時に付いた敷き物の跡なのか不明。内面は中世須恵器に観られる様な焼し銀である。21・22は、回転糸切り痕のあるもの。24は、長頸壺口縁部あるいは高壺の脚部である。23・25は、壺の底部と思われる。これらの遺物の大



第21図 坪ノ内遺跡 出土遺物（奈良・平安I）（1:3）

半は8世紀から9世紀のものと考えたが、註②によれば、須恵器底部に糸切り手法が出現するのは、1990年現在で9世紀後半頃と考えられている。（遺物11は、図版13c。）

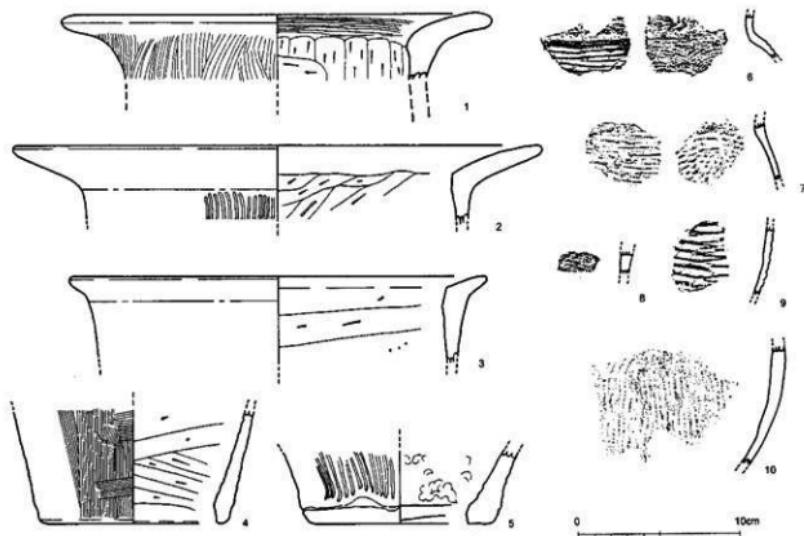
第22図 遺物1から10全て土師器。遺物1から3が甕。直行気味の体部に対し外に屈曲する口縁を持つ。4・5は甌であるが、胎土・調整など質が異なる。（把手の出土もある）。6・7は、外面に平行叩き目、内面に青海波文のあるもの、他の大多数の遺物と器厚や質感を異にしており、在地のものではないものという印象を受ける。玄界灘式の製塙土器の可能性もある。外面に煤が付着している。

8（図版14a.）は、布目痕のある碎片であり、型造りによるものと考えられる。六連島式の製塙土器の可能性もある。9・10は、外面が平行叩き目で内面がナデによるもの。質は在地（他の多数の土師器と質を同じくする）のもので、6・7とは違う。10は、内面にかすかに同心円文状の痕跡を残し、また煤が付着している。

21 回	器 種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	焼成	所 土	形 態・調 整等	色 調
1	須恵器	蓋	13.7	5.5	2.8	良好	微砂粒含む	青灰色
2	須恵器	壺	/	5	1.5	良好	微砂粒含む	青灰色
3	須恵器	蓋	/	6.2	2.2	良好	微砂粒含む	青灰色
4	須恵器	壺	/	6	1.3	良好	微砂粒含む	青灰色
5	須恵器	蓋				良好		
6	須恵器	壺	14.8	/	1.7	良好	微砂粒含む	青灰色
7	須恵器	蓋	/	5.9	1.5	良好	微砂粒含む	青灰色
8	須恵器	壺	/	2.1	1.5	良好	微砂粒多く含む	青灰色
9	須恵器	蓋	/	2.8	1.5	良好	微砂粒含む	青灰色
10	須恵器	杯	/	6	2.1	不良	微砂粒含む	灰白色
11	須恵器	杯	13.3	9.3	3.9	良好	微砂粒含む	青灰色
12	須恵器	杯				良好		青灰色
13	須恵器	杯	/	8	2.5	良好	微砂粒含む	青灰色
14	須恵器	杯	/	10.2	2.6	良好	微砂粒含む	青灰色
15	須恵器	杯	/	9.2	2.7	良好	微砂粒含む	青灰色
16	須恵器	杯	14.4	9.9	3.8	良好	微砂粒含む	青灰色
17	須恵器	杯	/	9.4	3.8	良好	微砂粒含む	青灰色
18	須恵器	杯	/	8.2	2.7	良好	微砂粒含む	青灰色
19	須恵器	杯	12.8	9	4.7	不良	微砂粒多く含む	黑灰色
20	須恵器	杯	/	9.2	1.3	良好	砂粒多い	黑灰色
21	須恵器	杯						
22	須恵器	杯	/	7.4	1.8	良好	微砂粒含む	白灰色
23	須恵器	蓋	/	11	3.2	良好	微砂粒多い	青灰色
24	須恵器	蓋又は壺	/	11.5	3	良好	微砂粒含む	青灰色
25	須恵器	壺	/	12.8	3.7	良好	微砂粒含む	青灰色

第21図 坪ノ内遺跡 出土遺物（奈良・平安I）観察表

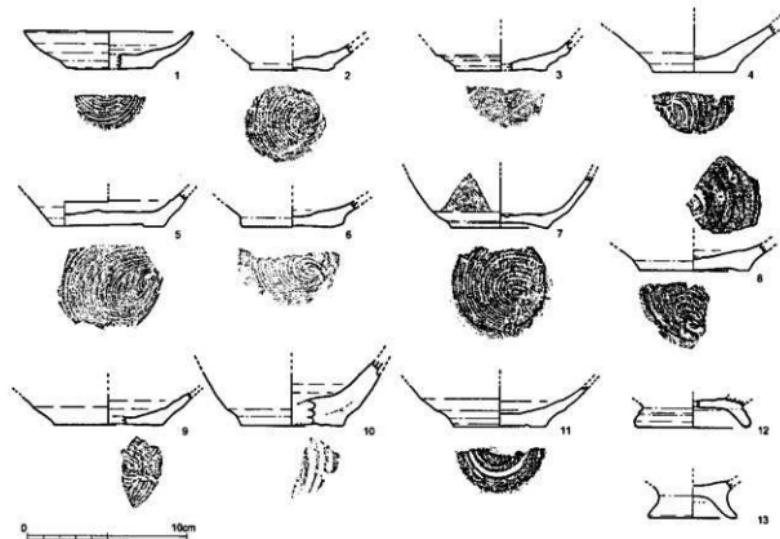
第23図 遺物1は皿、2から13までは土師器の壺である。1から9(10)は、底部を回転糸切りによつて切り離したもの。4は、体部がラッパ状に開くもの。5は、圓場整備に際して行なった試掘で出土したものの、本調査区外のもの。7は、発掘調査前に土地所有者の菅原春雄氏が調査区内で採取されたものである。見込みを中心に煤が付着しており、灯明皿であったことが判る。外面残存部の上位に布目痕が認められる。遺物22-8が、これと同様のものの碎片である可能性も残る。8は、内面全面に煤に為か? 黒色土器の様になっている。10は、胎上は極密であるが器厚が厚いもの。底部は他の回転



22 図	器 種	口 径 cm	底 径 cm	焼 成	治 土	調 整	色 調	保 	備 考
1	土師器 甕	62.8	/	良好	大小の砂粒含む	口縁部ヨコナデ、ハケ目。脚部外面ハケ目。 脚部内部ケズリ	赤褐色		
2	土師器 甕	33	/	良好	微砂粒多く含む	口縁内面、脚部外面ハケ目。 口縁外面ヨコナデ、脚部内面ケズリ	黄褐色		
3	土師器 甕	24	/	良好	微砂粒多く含む	口縁内面ハケ目。口縁外面ヨコナデ 脚部内面ケズリ。脚部外面ハケ目	赤褐色		
4	土師器 甕	/	11.8	良好	微砂粒多く含む	外ハケ目。内面ケズリ	茶褐色		
5	土師器 甕	/	11.5	良好	砂粒多く含む	外面粗いハケ目。内面ナデ?	黄褐色		
6	土師器 甕	/	/	良好	砂粒多く含む	外面平行叩き。内面同心円文 器壁うすい	暗茶褐色		製塙土器?
7	土師器 甕	/	/	良好	大小の砂粒 少々含む	外面平行叩き。内面同心円文 器壁うすい	黒褐色		製塙土器?
8	土師器 ?	/	/	良好	赤色の砂粒含む	内面有目底	赤褐色		製塙土器?
9	土師器 甕	/	/	良好	砂粒をほとんど 含まない	外面平行叩き。内面ナデ	暗褐色		
10	土師器 甕	/	/	良好	微砂粒多く含む	外面平行叩き。内面ナデ 内面にわずかに同心円文みえる	赤褐色		

第22図 坪ノ内遺跡 出土遺物（奈良・平安II）観察表

糸切りのそれとは違うようである。11は、底部が笠切り?によるものか。12・13は、高台の付くタイプ。造構に伴い時代標識となる遺物と同伴することがなかった為、9世紀後半から14世紀のものとする。器形から時期が判れば御教授頂きたい。



第23図 坪ノ内遺跡 出土遺物（中世）（1:3）

23 図	器 種	口 径 cm	底 径 cm	器 高 cm	燒 成	殆 上	形 態・調 整 等		色 調
1	土師質 土器	杯		5	良好	砂粒多く含む	底部回転糸切		
2	土師質 土器	杯	/	5	/	砂粒多く含む	底部回転糸切		黄褐色
3	土師質 土器	杯	/	7.6	/	砂粒はほとんど 含まない	底部回転糸切		灰白色
4	土師質 土器	杯	/	7.2	/	砂粒はほとんど 含まない	底部回転糸切、縦面滑らか		暗茶褐色
5	土師質 土器	杯	/	7	/	砂粒はほとんど 含まない	底部回転糸切		赤褐色
6	土師質 土器	杯	/	6.4	/	大粒の砂粒含む	底部回転糸切		灰白色
7	土師質 土器	杯	/	6	/	砂粒はほとんど 含まない	底部回転糸切。体部外面に布目痕		黄褐色
8	土師質 土器	杯	/	7	/	微砂粒含む	底部回転糸切		内面黒色
9	土師質 土器	杯	/	7	/				
10	土師質 土器	杯	/	6.4	/	砂粒はほとんど 含まない	底部粗い回転糸切。器壁厚い		茶褐色
11	土師質 土器	杯	/	5.7	/	金雲母含む	底部へら切り?		褐色
12	土師質 土器	杯	/	7	/	微砂粒含む	切り離し不明。高台がつく		黒褐色
13	土師質 土器	杯	/	5.4	/	良好	切り離し不明。高台がつく		黄褐色

第23図 坪ノ内遺跡 出土遺物（中世）観察表

第24図 (図版14c.) 鎌倉時代の焼物で、遺物1・2は、外面に格子叩き目が入る軟質の中世須恵器で、同一固体と思われる。1の平らに成形された口縁端部及び内面(口縁部の天に向かう面)は、ナデ調整であるが、対し2の内面は、板目状の調整痕であるのか?削りか?横方向に細かな筋が走っている。色調は表面と断面中心は黒に近い灰色、その間が灰黄色である。龜山窯系の甕と考えている。

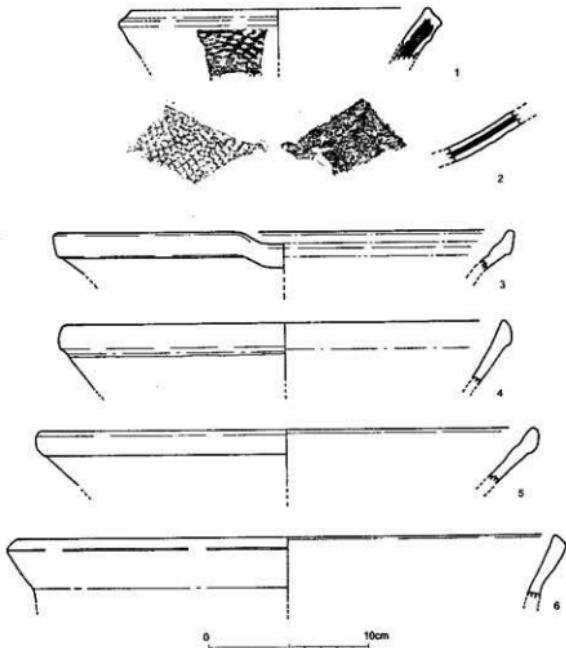
3は、東播系片口鉢

鉢の片口部を確認できる遺物である。口縁部外面に重ね焼痕がはっきりと判る。

第II期第2段階で12世紀末葉から13世紀初頭。4・5も3と同様同時期のもの。

実測し忘れたが、東播系片口鉢で第III期第1段階、13世紀のものが1点ある。

6は、土師質土器で復元口径33.6cmを測る甕である。残存部、口縁部の調整はナデである。色調は灰白色。外面に鍋らしく煤が付着している。图

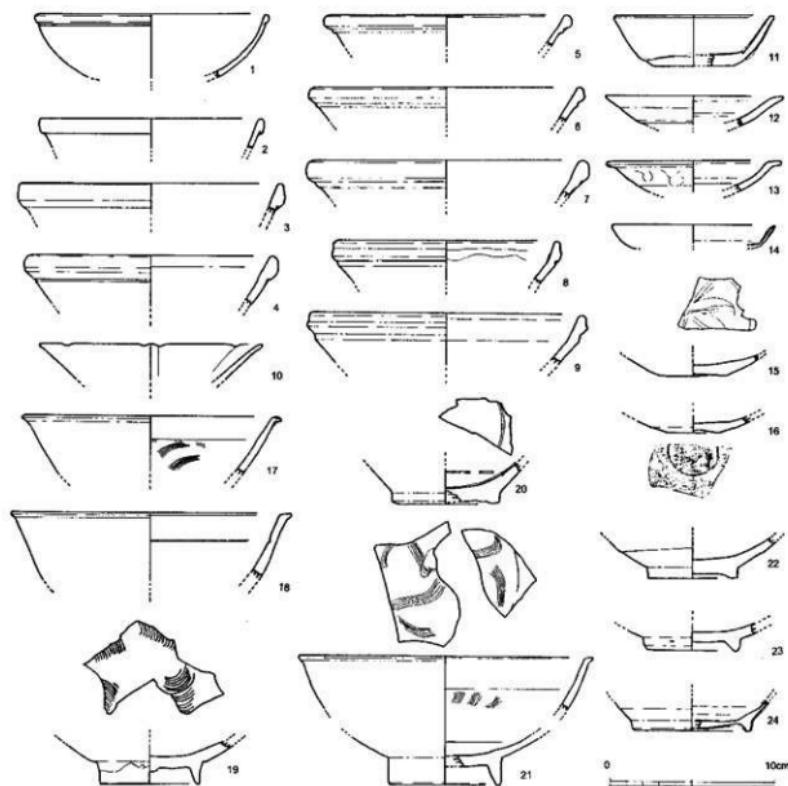


第24図 坪ノ内遺跡 出土遺物 (鎌倉) (1:3)

24 図	器 種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	焼成	施 土	形 態・ 調 整 等	色 調	備 考
1	中世 須恵器	/	/	/	不良	微砂粒含む	外面格子叩き。口縁端部平面、断面中央は黒色、周辺は褐色	黒色	龜山窯系
2	中世 須恵器	/	/	/	不良	微砂粒含む	外面平行明き、内面ハケ目 断面中央は黒色、周辺は褐色	黒色	1と同一 固体か
3	中世 須恵器	片口 鉢	28	/	良好	微砂粒含む	片口。口縁部に重ね焼痕	青灰色	東播系
4	中世 須恵器	片口 鉢	24.5	/	良好	微砂粒含む	口縁部に重ね焼痕	青灰色	東播系
5	中世 須恵器	片口 鉢	30.8	/	良好	微砂粒含む	口縁部に重ね焼痕。内面ナデ	青灰色	東播系
6	土師質 土器	33.6	/	/	やや良好	微砂粒含む	全面回転ナデ。瓦質に近い	茶褐色	/

第24図 坪ノ内遺跡 出土遺物 (鎌倉) 觀察表

第25図 平安時代後期から鎌倉時代に対応する貿易陶磁器。(図版15a,b,16a,b.) ② 遺物1から24まで全て白磁である。1から9は下縁碗の口縁部で、20・22・23は底部である。4(図版9b)・8(図版9c)をはじめ大半が白磁碗IV類の範疇ではないかと考えたが実際よく分からなかった、御指導頂きたい。1は、玉縁が小さく胴部が丸みを持って立ち上がるもので、化粧があり、他の玉縁碗より軟質に見えることから白磁碗II類と考えた。10は、輪花碗又は鉢でわずかに外反した口縁と内面に隆線を持つもの。11から16は皿である。11は、口縁部の釉を剥いだいわゆる「口禿」の小皿である。元の時代のもの。12は、口縁が外反し、外面下位及び見込みに釉が見られないもの。13は、口縁が端反り形で、外面下位及び内面下位は無釉となっており、見込みに目跡が確認できる。外面の釉は垂れ、玉状となっている。14は口縁部が屈曲して立ち上がる直口縁を持つ小皿。15は、小皿で見込みに、片切彫の刻花蓮花文を持つもの。高台の無い底部のみ釉を剥ぎ取っている。松江市大草町の才台垣遺跡や天満谷遺跡から同様のものが出土している。16は、やはり皿の底部である。見込みに細かな貫入のあ



第25図 坪ノ内遺跡 出土遺物（平安後期～鎌倉）（貿易陶磁Ⅰ）（1:3）

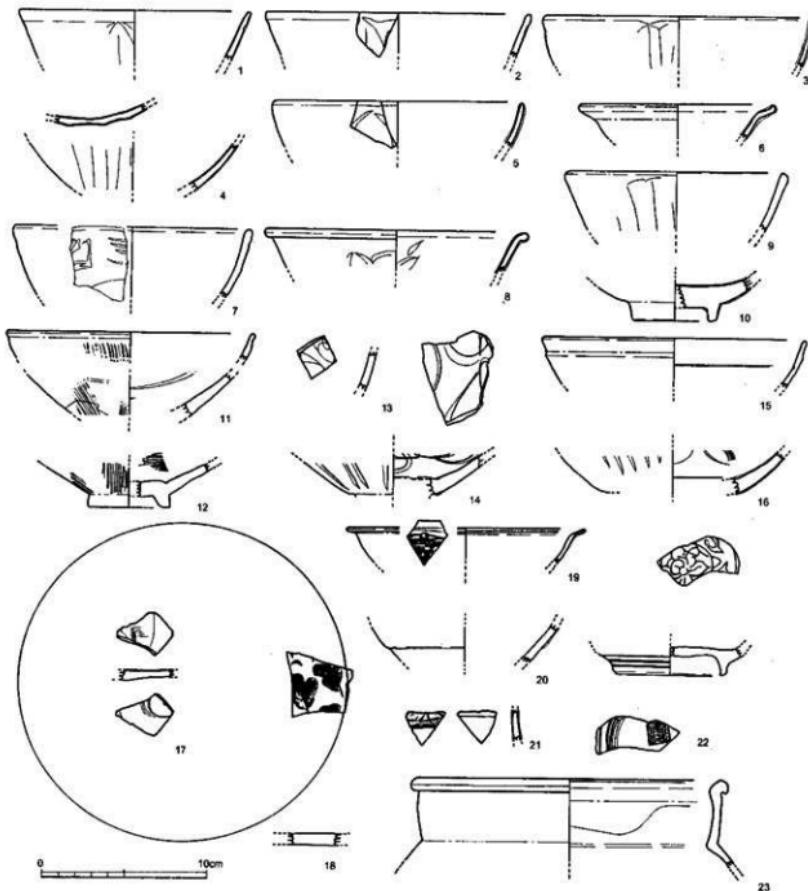
## 第4章 遺構と遺物

る軸が掛かるが、外面残存部には軸は認められない。皿VI. 17から19・21は、V類で高台が高く直立するものである。軸は19以外は黄灰色である。17・18・21は、横に屈折する口縁で内面上位に沈線、21は、内面下位にも沈線を確認できる。17・18・21は内面に櫛描きによる文様が施されている。20は、内面下位に沈線を持つ底部で、高台は厚く削り出しがわざかなもの。IV類-1。22は、IV-1よりも高く高台を削り出したもので、IV類-2。軸が薄かった為か内外面とも剥落した状態になっている。24は、皿で軸は高台疊付き以外全てに厚目に掛かっている。この1点のみ明代のものと考えた。

25 回	器種	口径 cm	底径 cm	脚高 cm	残高 cm		調 色調(沿調)・使用法・調整・焼成・等	製作地・製作年代		調査区 区分
								太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	
1	磁器 白磁釉	14.5	/	/	4.5	玉筋焼?	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。 化粧あり?	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I区段目
2	磁器 白磁釉	13.4	/	/	1.9	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I区段
3	磁器 白磁釉	15.8	/	/	2	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I区段外段
4	磁器 白磁釉	14.6	/	/	3.1	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I段目
5	磁器 白磁釉	14.4	/	/	2	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I区段
6	磁器 白磁釉	16.7	/	/	2.2	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I区
7	磁器 白磁釉	16.1	/	/	2.4	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I区
8	磁器 白磁釉	13.6	/	/	2.8	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 I~II区
9	磁器 白磁釉	16.6	/	/	3.2	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。 入耳有り。	太宰府 編年:三周張	江南地方 北宋後~南宋	II世纪中葉~12世纪前葉 II区
10	磁器 白磁釉	13.6	/	/	2.3	輪花口	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。			新土
11	磁器 白磁釉	9.6	4.6	3.2	/	口壳小皿	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む。口唇部の 色調をもつていた。口の内面及び口縁部には朱漆で明 鏡模様があり。			Ⅱ区 段目
12	磁器 白磁釉	10.6	/	/	1.9	小皿	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。		元	II世纪中葉~12世纪中葉 II区段目
13	磁器 白磁釉	10.6	/	/	2	小皿	入耳有り、蓋・口被絞が微妙に広がる 色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。			日式 4段目
14	磁器 白磁釉	9.9	/	/	1.4	小皿	外腹に斜垂れ口部がくの字に広がる 色調:素地は 細粒			
15	磁器 白磁釉	/	3.6	/	1.4	花文小皿	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を含む海は灰白。 被絞部に朱漆で模様があり、見込み式口縁によ る特徴文様			I区段目
16	磁器 白磁釉	/	3.1	/	1.1	小皿	色調:素地は灰白・海は内面に凹凸・東部及び外側 存底部に施釉。			新土
17	磁器 白磁釉	16	/	/	3.7	圓口文鏡	色調:素地は灰・赤土中黑細粒・輪花・灰白・外腹裏裏 の細粒及び口縁部の細粒・海は灰白・内面裏裏に花紋			I区段
18	磁器 白磁釉	17	/	/	4.2	弧文の口	色調:素地は灰白・輪花・灰白・内面・口縁と器の底に灰 褐色は濃度高い文様は認められない輪花部は反 転			I区段
19	磁器 白磁釉	/	6	/	2.7	侈口文鏡	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒を多量含む。海は 灰白・内面裏裏目録・輪花部がよく剥離す。			Ⅱ区 段目
20	磁器 白磁釉	/	6.6	/	2.6		色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒多量含む・透窓・高台 の織部及び輪花部の細粒・海は灰白・内面裏裏に花紋			Ⅱ区段目
21	磁器 白磁釉	18	6.6	8	/	櫛注文鏡	色調:素地は灰白・赤土中黑細粒・輪花・灰白・外腹裏裏 に花紋・被絞部・厚刃口・鋸歯形底と器の底に灰褐色・外 輪花部に蓋・底	圆V-4	12~13世纪	Ⅱ区段目
22	磁器 白磁釉	/	5.4	/	2.5	玉筋焼	色調:素地は灰白・赤土中に黒い細粒含む・海は兩面削 するがその施釉が剥離しているのが少なめの状態。			Ⅱ区段目
23	磁器 白磁釉	/	5.4	/	1.7	五瓣口	色調:素地は灰白・赤土中・長・瓣款名・海・灰白・高台 底以外全周(輪花・被絞部)・底台(付器)に施釉。			Ⅱ区段目
24	磁器 白磁釉	/	7	/	2				明	Ⅱ区段目

第25図 坪ノ内遺跡 出土遺物(平安後期~鎌倉) (貿易陶磁 I) 観察表

第26図 平安時代末から安土桃山時代に対応する貿易陶磁器。(図版15c, 16c, 17a, 18a) ② 遺物1から17までが青磁であり、18・19・21・22が青花、20が天目。23は褐釉壺と思われる。1から10・13は龍泉窯系青磁である。1から5・7から9までは、蓮弁文を持つもの。高台が残存しない為、口縁部での判断であるが、1・2は、龍泉窯系碗B1類。3・4は、B0類。4は貫入が目立つ。5は、B2類又はB1類で粉青色のもの。7は、口縁に雷文帯、胴に大きな線描きの蓮弁文を持つものでC2類(図版6c.)。8は、口縁端部が外反し、片切形による簡略化された蓮弁文をもつるものでB2類、内面にも片切形による文様が認められる。9は、線描き又は箇描きによる蓮弁文を持つものでB4類。6は、口縁部が外に屈曲し、さらに端部が微妙に直立するタイプの無文皿と思われる。



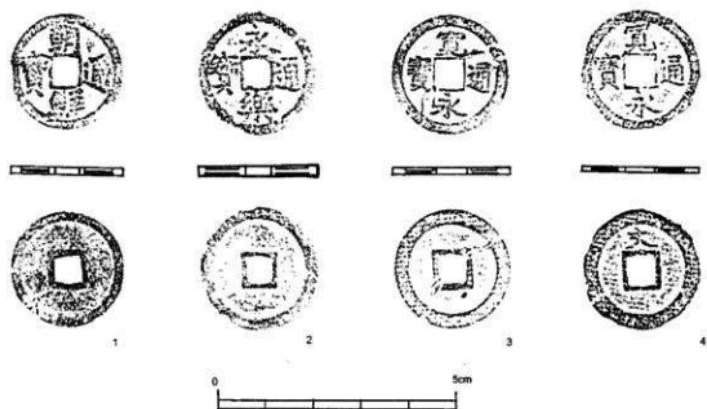
第26図 坪ノ内遺跡 出土遺物(平安末~安土・桃山)(貿易陶磁II) (1:3)

10は、無文の碗の底部。全面に厚く釉が掛かり、高台付にても釉が掛かっている。高台内を丸く釉剥ぎしていることから、恐らく直行碗、龍泉窯系碗E類と思われる。13は、内面に劃花文、外面無文の碗と思われる。11・12・15・17は同安窯系青磁である。11・12は、伝世の珠光青磁に類似するもので、いわゆる猫描きと呼ばれる櫛描きによる文様が認められる。12は、内外面両面に櫛描きがあり、11は、外面に櫛描き、内面は覽描きが認められる。15は、口縁部内面に沈線があるが、残存部に文様は認められない。しかし器形は同安窯系の碗であり、残存部さらに下位には猫描きがあるものと考えられる。17は、青磁劃花文皿。底部中央の釉を丸く掻く取っている。14・16は、外面片切彫りで綾線を施し、内面には片切彫で同安窯系青磁碗内面の様な劃花文を施しているもの。16には、内面に櫛描きも認められる。同安窯系なのか龍泉窯系であるのか御教授頂いたにもかかわらず解らなくなってしまった。

26 図	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	残高 cm	備考 色調(釉調)・使用法・調製・焼成等	製作地・製作年代・分類等	調査区	
1	磁器 青磁碗	14	/	/	3.1	緑運舟文鏡 色調:底地は灰白、釉は薄い、アーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による緑運舟文鏡	良知鹿児島系 南宋~元 13世紀中葉~14世紀初 Ⅲ区		
2	磁器 青磁碗	16.7	/	/	2.7	緑運舟文鏡 色調:底地は灰白、釉は薄い、厚い外壁片切彫 形(?)による緑運舟文鏡	良知鹿児島系 南宋~元 13世紀中葉~14世紀初 Ⅲ区	Ⅳ区	
3	磁器 青磁碗	16.2	/	/	3.1	緑運舟文鏡 色調:底地は灰白、釉は薄い、厚い外壁片切彫 形(?)による緑運舟文鏡	良知鹿児島系 南宋~元 13世紀中葉~14世紀初 Ⅲ区		
4	磁器 青磁碗	/	/	/	3	緑運舟文鏡 色調:底地は灰白(?)、釉は薄い、厚い外壁片切彫 形(?)による緑運舟文鏡	良知鹿児島系 南宋~元 13世紀中葉~14世紀初 Ⅲ区	Ⅴ区	
5	磁器 青磁碗	15	/	/	2.9	哥窑文鏡 色調:底地は灰白、薄い、厚い外壁片切彫 形(?)による哥窑文鏡	良知鹿児島系 南宋~元 14世紀後葉~15世紀初 中央沖子		
6	磁器 青磁小皿	11.6	/	/	2.2	小皿 色調:底地は灰白、薄い、厚い外壁片切彫 形(?)による哥窑文鏡	良知鹿児島系		Ⅳ区
7	磁器 青磁碗	14.3	/	/	4.3	對刻紋 色調:底地は灰白(?)はアーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡分文鏡	良知鹿児島系 南宋 元~明 14世紀後葉~15世紀初 Ⅲ区	Ⅳ区	
8	磁器 青磁碗	15.7	/	/	2.6	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白、中間部含蓋はオリーブ、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 南宋 14世紀後葉~15世紀初 Ⅲ区	Ⅴ区	
9	磁器 青磁碗	15	/	/	3.7	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白、中間部含蓋はオリーブ、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 明 15世紀後葉~16世紀初 Ⅱ区	Ⅳ区	
10	磁器 青磁碗	/	5.1	/	2.7	莲瓣文鏡 色調:底地は灰白、釉は薄い、アーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 明 14世紀後葉~15世紀初 Ⅲ区		
11	磁器 青磁碗	14.8	/	/	5.27	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白、中間部含蓋はオリーブ、 外壁片切彫(?)含蓋を内側曲輪状に凸起 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 南宋 12世紀末~13世紀初 Ⅲ区		
12	磁器 青磁碗	/	4.8	/	2.8	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白、中間部含蓋はオリーブ、 外壁片切彫(?)含蓋を内側曲輪状に凸起 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 南宋 12世紀~13世紀後葉 Ⅱ区		
13	磁器 青磁碗 又は皿	/	/	/	2.27	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白、中間部含蓋はオリーブ、 外壁片切彫(?)含蓋を内側曲輪状に凸起 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 南宋 12世紀末~13世紀初 Ⅱ区		
14	磁器 青磁碗	/	/	/	2.5	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白、釉は薄い、アーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 南宋 12世紀末~13世紀初 Ⅲ区		
15	磁器 青磁碗	16.7	/	/	3	色調:灰白、釉は薄い、アーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	(良知)良知系 南宋 12世紀~13世紀後葉 Ⅳ区	Ⅳ区	
16	磁器 青磁碗	/	/	/	2.7	蓮瓣文鏡 色調:灰白、釉は薄い、アーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	(良知)良知系 南宋 12世紀中葉~13世紀初 Ⅳ区	Ⅳ区	
17	磁器 青磁碗?	/	/	/	0.77	蓮瓣文鏡 色調:底地は灰白(?)はアーバー風、厚い外壁片切彫 形(?)による青白文鏡	良知鹿児島系 南宋 12世紀中葉~13世紀初 Ⅲ区	Ⅳ区	
18	磁器 青花盤?	/	/	/	0.87	青花盤(?) 色調:底地は灰白、中間部含蓋は青花模様 外壁片切彫(?)	良知鹿児島系 南宋 12世紀後葉~13世紀初 Ⅳ区	Ⅳ区	
19	磁器 青花碗	14.6	/	/	2.2	青花文鏡 色調:底地は青白、中間部含蓋は青花模様 外壁片切彫(?)	良知鹿児島系 南宋 12世紀後葉~13世紀初 Ⅳ区	Ⅴ区	
20	陶器 天日繪碗	/	/	/	2.2	天目茶碗 色調:底地は青白、中間部含蓋は青花模様 外壁片切彫(?)	良知鹿児島系 南宋 12世紀後葉~13世紀初 Ⅳ区	吉原	
21	磁器 青花碗	/	/	/	2.9	青花(唐物) 色調:底地は白磁、中間部含蓋は青花模様 外壁片切彫(?)	良知鹿児島系 南宋 12世紀後葉~13世紀初 Ⅳ区	龜路(門)寺 表	
22	磁器 青花碗	/	6.4	/	1.8	青花(唐物) 色調:底地は白磁、中間部含蓋は青花模様 外壁片切彫(?)	良知鹿児島系 南宋 12世紀後葉~13世紀初 Ⅳ区	中国南部 13世紀~14世紀 Ⅳ区	
23	陶器 萬字壺	18.2	/	/	5.4	萬字壺 色調:底地は灰白、中間部含蓋は青花模様 外壁片切彫(?)	良知鹿児島系 南宋 12世紀後葉~13世紀初 Ⅳ区	中国南部 13世紀~14世紀 Ⅳ区	

第26図 坪ノ内遺跡 出土遺物(平安末~安土・桃山)(貿易陶磁II)観察表

18は、盤で簡略化された唐草文様が描かれている。コバルトとの葉色に黒斑が滲み出でて美しい。明代の青花と考えた。が、出土した断片をみると底部にも釉(白磁)が掛かり、ハリ支えの目跡らしきものを確認したことから17世紀中頃以降の肥前系磁器の可能性が出た。19は、青花で口縁部が外反するタイプの碗あるいは皿である。20は、青花であるが器形は不明。これは、第1図22(亀円寺五輪塔群)辺りで表探したものである。22は、青花碗でいわゆる慢頭心と呼ばれ、見込み中央部が盛り上がるタイプ。確E群(碗VII)に分類されるものと思われる。16世紀中葉から17世紀初頭。20は、天目茶碗。素地は灰色で、釉は表面が暗褐色で断面(内面)は黒曜石の様である。23は、いわゆる呂宋壺と呼ばれた茶葉壺の類と思われる。色調は、素地が灰色で釉は灰オリーブ色である。

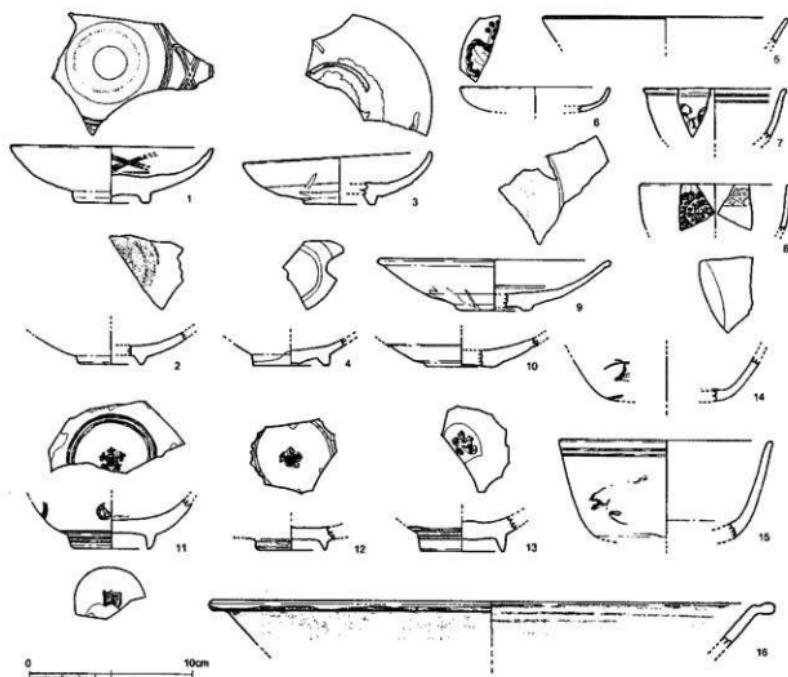


第27図 坪ノ内遺跡 出土遺物(室町・江戸)(古銭)(1:1)

27 図	銘	貨 銭文・背	直径 cm	重量 g	鑑 考			測定区
					鑑	考	考	
1	銅銭	高麗銭又は私鉄銭	朝鮮通寶	無背	2.3	李氏朝鮮(太祖)永徳(92年～1296年)・日本(元永年間1294～1411年)・朝鮮	銅 銭	室町 時代
2	銅銭	高麗銭又は私鉄銭	水樂通寶	無背	2.5	明治皇帝(成澤)(永樂通宝)102～1424年・永樂元年(1403)～永樂22年(1424)・明治	銅 銭	室町 時代
3	銅銭	江戸時代の一文銭	寛永通寶	無背・通の 種じの	2.4	延宝年間以降(1673年～)・新寛永銭	銅 銭	江戸
4	銅銭	江戸時代の一文銭	寛永通寶	無名・通の 種じの	2.5	新寛文寛文(1668～1672年)・新寛永銭	銅 銭	江戸

第27図 坪ノ内遺跡 出土遺物(室町・江戸)(古銭) 観察表

第27図 室町時代に対応する輸入銭と寛永通寶。1は、朝鮮通宝で14世紀末頃のもの。2は、永樂通寶で、15世紀前葉頃のもの。(1・2が模鋳銭であれば話は別)3・4は寛永通寶で、3は、無背で、通の頭がコの字であることから、延宝年間(1673年)以降の新寛永銭と思われる。4は、銭文の「寛」と、背文の「文」で「寛文」、寛文年間(1668～1672年)の新寛永銭と思われる。



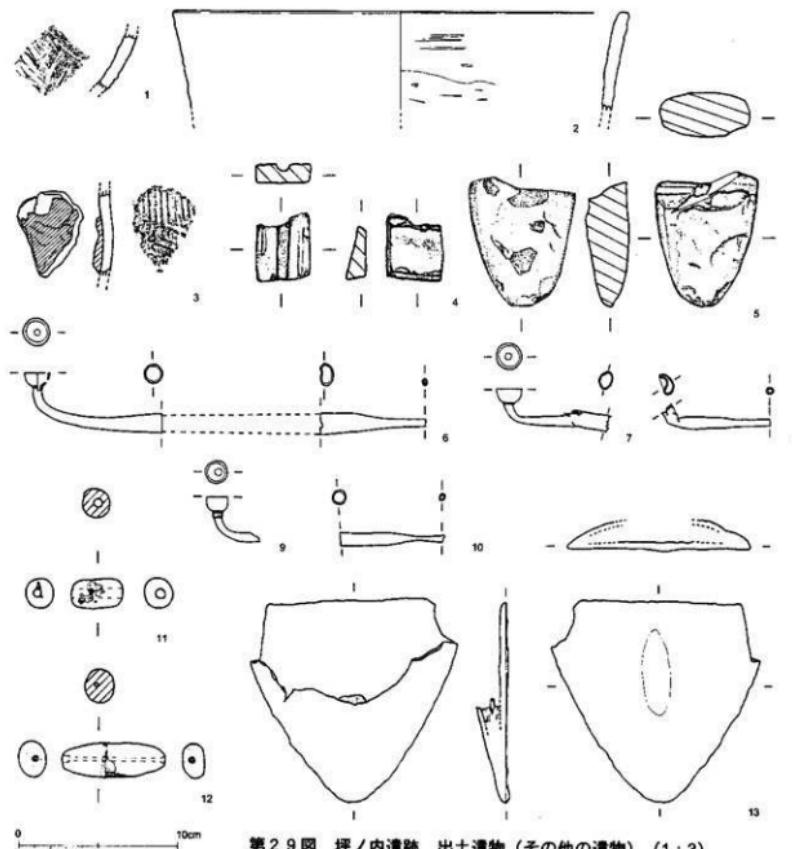
第28図 坪ノ内遺跡 出土遺物（江戸）（1:3）

第28図 江戸時代。(図版17b.18b.) ㉙ 遺物 1 から 16 まで全て肥前系陶磁器である。1は、調査区Ⅲ-A区、調査区北の土層断面上で出土したもの(第2図6図D-D')(図版10a.)。江戸時代の水田面での検出である。復元口径12.2cmの染付小皿であり、見込みに蛇の目釉剥ぎと、高台疊付きに釉が無いもの。この高台疊付きに1mm以下の砂粒がめり込む形で付着していることと、蛇の目釉剥ぎ部分に残る重ね焼痕の砂粒をわずかに残す高台跡の直径が、一致することから同一の皿を重ねていたことが判る。内面に格子文の染付。18世紀中葉から末。水田はその頃のものと考えた。2は、残存部のみでいうと白磁皿である。見込みに蛇の目釉剥ぎ、細砂粒が融着している。3は、復元口径11.6cmの染付小皿である。焼成時に重ね過ぎたのか、温度が上がり過ぎたのか、皿の部分が高台にめり込んだもの、歪んだ皿である。また、上に重なった皿の高台の疊付き部分が融着している。さらに見込みには漆？か何かが付着している。4は、残存部のみでいえば白磁である。見込みに蛇の釉剥ぎがあるもの。5は、口紅を施した白磁碗。6は、見込みに手描きによる桐の文様をあしらった染付の小皿または豆皿。復元口径は8.8cm。7は、色絵(赤絵)の碗である。内面上位の2状の線、下段が朱、上段が紅。外面1条の線は朱、その下の胴部に朱又は紅の線描きの上に青・緑・黄の着彩。復元口径8.6cm。8は、外面に鮒唐草文、鮒唐草文様が1本の太い線で表現してあることから宝暦以降のものと思われる。内面に四

28 図	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残高 cm	備考		製作地	肥前陶器の支店 (大須原二箇年)	調査区
						繪付(彩)	文様・使用施設等			
1 磁器 盆		12.2	4.4	3.5	/	繪下彩 細巻青(染付)	外面:染付け無、高台底部1mm以下/内面:多量付着内面:見込に蛇/目袖剥げ、底付 板付	肥前系		
2 磁器 盆		/	4	/	2.1	白磁 又は染付	外面:染付け無、内面:見込に蛇/目袖剥げ、底付部分に鉛松子/砂粒?底面付着	肥前系	表採	
3 磁器 盆		11.5	4.2			繪下彩 細巻青(染付)	内面:染付け無、見込に蛇/目袖剥げ、底付、重ね?蛇/高台付着?更に袖剥げ部分?底付着。	肥前系	Ⅲ区3段目	
4 磁器 盆		/	4.6	/	1.7	白磁 又は染付	内面:蛇/目袖剥げ、重ね?底付有り、外面:無 地/輪高台の繪面けけ化。	肥前系		Ⅲ区3段目
5 磁器 盆		15	/	/	1.6	口釦を施した 白磁/又は赤絵	「口紅」(口縁端部を鉄錆で錆取っている)	肥前系		Ⅲ区3段目
6 磁器 小皿		9	/	/	1.6	繪下彩 細巻青(染付)	外面:見込みに裏書きによる「桜」文様	肥前系		Ⅲ区3段目
7 磁器 碗		8.6	/	/	3.2	繪上彩 赤絵(色絵)	内面:上端/紅/下端小窓、外面:朱赤の藤 文様に藍・黄・緑の花書き、彩色後、不要部分 を拭き落す	肥前系	18~19世紀	Ⅲ区3段目
8 磁器 碗		9	/	/	2.9	繪下彩 細巻青(染付)	外面:青磁地、墨書き文が日本の人い 確に识别してあることから宝鏡以降、内面: 四瓣花文様文様	肥前系	18~19世紀	Ⅲ区3段目
9 磁器 盆		13.9	3.1	3.1	/		黒い貴賤色の素地に濃赤色の袖/内面:繪 高台が内反、三日月、繪面/内面:見込みに 目袖剥ぎがある	肥前・ 唐津系		Ⅲ区3段目
10 磁器 盆		/	/	/	1.9		外面:高台が内反、三日月、繪面、腹部に 輪を認めない内面:平行?褐色の袖が 薄く剥かれてる	肥前・ 唐津系		Ⅱ区
11 磁器 碗		/	/	/	3.2	繪下彩 細巻青(染付)	外面:染付、裏絵(変形字跡)有り、内面:見 込みにコンニャク印判による退化した 五弁花文	肥前系	元禄以降	中央トレンチ
12 磁器 碗		/	/	/	1.5	繪下彩 細巻青(染付)	外面:青磁地、高台底部には濃青色、砂粒付着 内面:見込みにコンニャク印判による退 化した五弁花文	肥前系	元禄以降	拂土
13 磁器 碗		/	/	/	2.2	繪下彩 細巻青(染付)	外面:染付(内面:見込に蛇/目袖剥げ)及び コンニャク印判による退化した五弁花文	肥前系	元禄以降	Ⅱ区
14 磁器 碗		/	/	/	2.7	繪下彩 細巻青(染付)	外面:染付(隠す?灰に発色)内面:見込み に蛇の目袖剥ぎ	肥前系		
15 磁器又 は陶器 碗		12.9	/	/	6.1	繪下彩 細巻青(染付)	灰色の素地に高付脚部?灰~青灰に発色 ?カマ?灰色の輪が掛かるが万里瓦調地 の疑惑。	肥前系		Ⅰ区
16 磁器 大皿		34.4	/	/	2.7	繪下彩	輪?青磁色の素地に外面内面共に白刷 毛目内面部分的に各種剥落点。	肥前系		Ⅲ区3段目

第28図 坪ノ内遺跡 出土遺物(江戸) 観察表

方桿文の線文様。復元口径 9cm。9は、唐津焼きの皿である。口径13.9cmで、見込みに砂目が熔着している。見込みから口縁に向かって立ち上がるところが段になっている。17世紀か。10は、唐津系の皿である。高台内の削り出しがわずかなもの。見込みに砂目積みの跡は観られない。11から13は見込みにコンニャク印判の退化した五弁花文を持つ染付碗である。11は、裏名(底裏名)のあるもの。12は、外面が青磁釉を施したもの。蓋付きの部分が赤褐色になっている。13は、見込みに蛇の目袖剥ぎのあるもの。14は、見込みに蛇の目袖剥ぎのある碗の胴部で、染付が灰オーリーブ色に発色したもの。15は、陶質の磁器染付碗。素地が灰色で、釉色と染付も灰オーリーブ色のもの。復元口径12.9cm。16は、唐津系の大皿で、内面に白化粧土の太い線を入れ、その上から内外面共に薄い白化粧土を刷毛で塗っている。



第29図 坪ノ内遺跡 出土遺物（その他の遺物）（1:3）

## 第29図

1は、土質質の土器片で、外面に調整痕か文様か、成形時又は乾燥する間に、何かに触れた結果付いた痕跡かよく解らなかつたもの。外面に煤が付着している。2は、口縁端部に面を作り、内面にケズリの観られるもの。内面に煤が付着している。縄文の深鉢か。3は、外面に平行叩き、灰色で焼きのあまい須恵器にも觀えるが、胎土が粗く土師器的な質の土器である。その内面に鐵滓が融着している。坩堝のようなものの可能性を考えた。とすれば現在の色調は、二次焼成によって土師器が変色したものかもしれない。（図版18c）。4は、調査区II-C区のS102上面の4層から出土した砥石（図版14b）。きめ細かな流紋岩製で特に中央で何か円いもの、刃先の円いもの？を研いでいる。中央の凹の左右でも研いだ痕跡が認められる。5は、石斧である。排土からの出土。6から10は煙管である。7・8はⅢ区の6層からのもので、江戸時代のものであろう。11・12は土鍤で、11はⅢ区の搅乱層からのもの。12は、I-C区の南西、調査区の外で表探したもの。この二つは形状を異にするが、時期は不明。13は、劔先である。

29 図	器 種	口徑 cm	底径 cm	高 cm	焼 成	地 上	形 態・ 調 整 等	色 調	備 考
1	土師器 不明	/	/	/	良 好	微砂粒含む	外面にヘラまたはクシ状工具による 挫痕痕	黒褐色	後・晚期?
2	縄文? 深鉢	28.6	/	/	良 好	微砂粒多く含む	口縁端平坦。外面二枚貝状痕? ナデ 内面ケズリ	暗茶褐色	
3	須恵器 甕?	/	/	/	良 好 (比較用)?	微砂粒含む	外面平行叩き。内面に鉄? 洋村蓋 底部に近い部位か	灰色	るっぽ?
4	石器 砥石	長3.8	幅3.5	厚1.1		きめこまやかな 石材	5面使用。1面には幅9mm、深さ4mmの 溝状の凹み	淡褐色	流紋岩製 29.5g
5	石器 石斧	長8.4	幅6.6	厚2.6			磨製斧基部。全面研磨	灰色	砂岩製? 179.0g
6	きせる						雁首 長8.7cm 上端径1.8cm 菖径1.1cm 吸口 長6.6cm 菖径1.3cm 口径0.5cm		
7	きせる						雁首 長7.2cm 上端径1.6cm 菖径1.1cm		
8	きせる						吸口 長6.9cm 菖径0.7cm 口径0.4cm		
9	きせる						雁首 長3.3cm 菖径0.5m 口径1.3cm		
10	きせる						吸口 長6.6cm 菖径0.8cm 口径0.4cm		
11	土錐	長3.3					円柱形	黄褐色	
12	土錐	長6.4	径1.7				柄錐形	黒褐色	
13	鐵器 鍔先	長12.2	径1.8	厚1.9					

第29図 坪ノ内遺跡 出土遺物（その他の遺物）観察表

## 第5章 調査の成果と課題

遺跡名の『坪ノ内』という地名は、出土した中世の遺物のボリュームからして、城館に関わりのある地名ではないかと調べたが、答えになりそうなものを見出だせなかった。地名にはしばしば当て字が使われることを承知で、『坪』の字を辞書で引くとその中に「殿舎の間。垣の内の庭など一区画のせまい(平らな)土地をいう。中庭。宮中の部屋。壺の字をも借用する」とあった。「壺」の字には、「宮中の道。つぼね。宮中の婦人の居間。」の意があった。また別の辞典図には下記のとおりあった。『つぼ』  
 「坪」(一)古代における土地区画。元来は道・溝・畔・柵・堀・建物などで区画された土地をいう  
 …(後略)。

(二)近世以降に用いられた面積の単位。耕地以外の屋敷地などに使用されていたが、明治24年  
 (1891)制定の度量衡法に、…(後略)。

「壺」「壺」 寝殿造の対や廊などにかこまれた方形の空間。坪とも書く。壺には時に泉が湧き、  
 道水が流されることもあるが、普通、草花、低木が風致的に植えられ、坪前栽と  
 呼ぶ。…(後略)。

発掘中、作業員の方が「壺(やきもの)が出るからツボノウチではないか」と言われた、あるいは、坪(冠婚葬祭等で使用する漆器)(8~9世紀の蓋杯に似ている!)が出るから…案外そういうことかもしれない」と調査中感じたのを思い出す。

さて、坪ノ内遺跡の発掘調査を終え判明したことは、まず弥生時代中期中葉に存在した旧谷川跡。そして、その谷川が埋没した後の、弥生時代後期の住居跡を3棟検出したことである。さらには、江戸時代の基盤整備に伴い、攪乱された土層の含む遺物や、自然作用による流れ込み遺物ではあったものの、縄文晩期から江戸時代の及ぶ遺物を確認したことである。そしてそれは、平成7年度に調査した袖ノ木地区菅城遺跡①の遺物の出土状況及び、遺構の出土(残存)状況と、両遺跡とも水田内に立地している為か非常に似ていた。

しかし両遺跡の遺物を比較していくと、菅城遺跡で古墳時代後期の(飛鳥時代)(6世紀後半~7世紀初)の須恵器が多いという特徴があったのに対し、坪ノ内遺跡からの出土は少なく。また坪ノ内遺跡からは古墳時代前期から中期(4世紀~5世紀)の土師器が多数出土しているが、菅城遺跡からの出土はその可能性のあるものを含め微量であった。さらに坪ノ内遺跡では奈良時代から平安時代(8~9世紀)の遺物が多いのに対し、菅城遺跡では同じく微量であった。さらに注目すべきは、坪ノ内遺跡、菅城遺跡の両遺跡から、11世紀後半~16世紀に及ぶ白磁や青磁、天目や青花の貿易陶磁が出土したことである。郷土史に於いて、それは平安時代後期に賀茂別雷神社(上賀茂神社)が莊園を置いた時代から、中世高橋氏そして羽羽氏の時代に対応する。かつて羽須美の地が安芸・備後に接する要衝として存在することを示す資料といえよう。これらの出土遺物の時代的な特徴は、調査区域内での特徴であるため、これらを直接袖ノ木の歴史、長田の歴史に結びつけることは避けなければならないが、両地区内で判明した事実であり、興味深い事例になった。

14世紀中頃~16世紀の出土遺物は、袖ノ木菅城遺跡では鷲影城(高橋氏)を、坪ノ内遺跡では横尾(足)城(高橋氏~口羽氏)あるいは亀縫(円)寺(禪宗)との関わりを考えるのが適当と思われたが、仏教、仏教的な遺物の出土はないことから寺院跡に伴う遺物とは考えにくい。また坪ノ内遺跡北西の『谷』という地名の「谷」は「金井」、すなわち鉄穴流しを含む製鉄に関係する名と考えてよさそうであり、

あり、坪ノ内遺跡出土の鉄滓とも結びつくものとも思われる。中世羽須美村を中心に強大な勢力をふるった高橋氏と鉄生産を考える資料ともいえるが、鉄滓の時期については、流れ込みによるものであり現在のところ結論をだしていない、しかし中世以前のものであることはまず間違いない、11世紀後半からの貿易陶磁器の出土の背景や、8～9世紀の須恵器を含む層から出土していることを考えると、古代に遡る可能性は高いと思われる。また、菅城遺跡・坪ノ内遺跡共、植物遺体(桃または梅の種子)が出土しており、鉄滓同様時期について結論をだしていないが、中世あるいは古代の食生活に関わる遺物である。鉄滓や植物遺体は、将来科学的分析による年代測定を行いたいと願っている。以上、坪ノ内遺跡発掘調査の報告とする。

尚、調査区内の出土遺物は流れ込みによるものがほとんどである為、調査区の西(山)側に遺跡が広がっている可能性が高い。今後圃場整備その他の開発事業で、地形が変更される場合には、遺跡として取り扱う必要がある。

原 始 古 代	縄文時代	深鉢	柱 六 群	時 期 が 不 明 確 な も の	植物 遺体 (桃 の 種 子)
	弥生時代 前期	壺?			
	中期	甕・高坏 旧谷川跡からは中期中葉			
	後期	甕・石斧 磨穴住居跡S101後期前半			
	弥生時代 前期 ～中期	土師器(甕・高坏 小型丸底壺等)			
	後期	須恵器蓋坏・高坏・甕 他			
	奈良・平安時代 8～9世紀	須恵器(蓋坏・高坏・甕)・土師器(甕・瓶 ・製塙土器(六連島式・玄界灘式)?) 他			
中 世	平安末～ 鎌倉・南北朝	上師質土器(坏・羽釜・甕) 東播系片口鉢・龜山窯系甕 朝鮮通宝・永楽通寶土器(曲物)	S103		鉄滓(製鐵関連)
近 世	室町・戦国	貿易陶磁器の白磁・青磁(同安窯系・龍 泉窯系)・天目・青花・茶壺? 他			
	安土・桃山	キセル 鋤先			
	江戸	肥前系陶磁器・鋤先・寛永通寶			

## 第6章 試掘調査（輪ノ内遺跡）に至る経緯

### 役場庁舎建設予定地内 埋蔵文化財有無確認 試掘調査

村内遺跡発掘調査「埋蔵文化財有無確認試掘調査」は、中山間地域総合整備事業(長田地区圃場整備)に伴う、坪ノ内遺跡発掘調査と共に、平成10年度からの実施予定であった中山間地域総合整備事業広域連携型(原田地区圃場整備)予定地内の試掘調査として計画したものである。しかし平成9年9月、担当課からこの事業の計画が変更、事業実施の見通しが立たなくなつたとの紹介があり、原田地区的試掘調査が行えなくなった。この為、島根県教育庁文化財課の指導を仰ぎつつ、改めて村内の事業計画を基に協議し、将来役場庁舎建設予定である地を事前に調査することとなった。

役場庁舎予定地は、現羽須美村役場の真裏(北側)に位置する841m<sup>2</sup>とその西、623m<sup>2</sup>の駐車場予定地からなり、共に旧水田内にある。

## 第7章 試掘調査区の位置と環境

羽須美村は、島根県のおよそ中央部邑智郡の南東部に位置し、北は大和村、西に瑞穂町、そして南は広島県高田郡高宮町・美土里町、東に江ノ川を隔て広島県双三郡作木村と接する県境の地であり、村の中央を江ノ川支流出羽川が流れ、川沿いの標高約170mに阿須那の街、標高約110mには口羽の街がある。(昭和32年2月11日、旧口羽村・旧阿須那村が合併し羽須美村は誕生した。)

大字下口羽は羽須美村の北北東に位置し、江ノ川と支流出羽川の合流地点に位置する。出羽川左岸にそびえる龍尾山(標高約280m)の山頂には、口羽(志道氏)(1530年頃～1600年)の櫛城、琵琶甲城跡がある。城を中心にして、北は江ノ川、東及び南は、出羽川によって囲まれており、西方以外のすべてが河川による自然の堀に守られた形となっている。また、東対岸の丘陵上には祈願寺(真言宗)延命寺、南西に延びる尾根筋先端の麓(土居)に菩提寺(臨済宗)宗林寺、南東に延びる尾根筋丘陵先端に宮尾山八幡宮、さらに南東対岸の尾根筋先端には比(毘)丘人城跡があり、琵琶甲城の支城ともいわれる。

調査区のある下口羽根布は、琵琶甲城跡の南南東の対岸に位置し、調査区は高畠城跡を伝える高畠山(標高361m)から派生し北(琵琶甲城跡)に向かう丘陵先端の麓、現羽須美村役場の裏(北)にある。

『島根県の地名』山本清監修[4]の羽須美村「口羽」及び『琵琶甲城』に次のとおりあるので、そのまま引用する。(前述と重複する部分はご了承頂きたい。)

### 『口羽』

『現羽須美村北東端の出羽川と江川の合流点付近から出羽川上流域に比定され、近世には上口羽村・下口羽村が成立している。貞応二年(一二二三)三月三日の石見国惣田數注文に邑智郡の公領として「くちは四丁九反三百ト」とみえる。文明八年(一四七六)九月・五日に藤根城主高橋氏が益田氏との間に結んだ契状(益田家什書)に高橋被官16名が傘連判を加えており、そのうちに口羽下野守光慶(高橋氏庶家の大宅光慶といわれる)の名がみえる。享禄四年(一五三一)三月三日、安芸厳島神社に口羽村のうち精

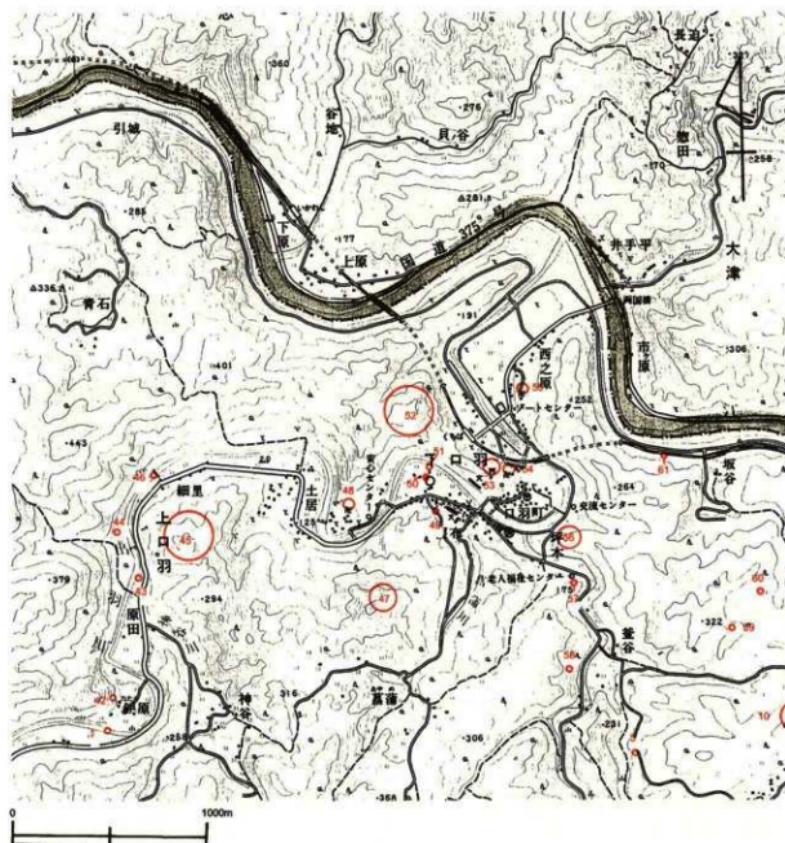
戸名・河隅名(現在の粕戸と川角)が寄進されている(「毛利元就寄進上」閑闇録)。おそらくこの時点をあまりさかのばらない時期にこの地が毛利氏領となったものであろう。天文二年(一五四二)三月二六日には口羽内の「原田名一町三反・はたい五段」が兎玉木工允(就秋)に給地として与えられている(「毛利元就知行宛行状」同書)。天正十九年(一五九一)のものとされる一二月一七日の小早川隆景状(諸録)によると、元就は重臣志道元良の子道良(口羽道良)を口羽城(琵琶甲城)に入れて石見方面進出の足掛かりとしている。

#### 『琵琶甲城』

『東流する出羽川が大きく馬蹄形に方向を変えて江ノ川に合流する地点の西、出羽川左岸に川をめぐって屹立する龍尾山(標高276メートル、比高160メートル)の天陥の山上に築かれた山城。本丸・二の丸・まりの段・笠屋の段の主要郭群を中心、南に延びる尾根には勢溜と思われる10段の削平地と、北東に延びる尾根に9段の削平地があり、いずれも比較的広く、先端に堅堀・空堀を設けている。西方の斜面も急峻で、七条の堅堀が認められ、続く背後の鞍部を大きく堀切で画している。城主口羽氏の居館跡といわれる地には土居・馬場の地名が残り、現在は同氏の菩提寺宗林寺がある。城の東方少し南の出羽川対岸の丘上には毘丘人城と呼ばれ、当城の支城跡ともいわれる。琵琶甲城は毛利元就四奉行の一人、口羽刑部大輔下野守通良の拠城で、矢羽城(石見八重藩・石見誌)ともいう。享禄二年(一五二九)毛利元就は尼子氏に帰服したとして藤根城の高橋興光を滅ぼし、そのあと家臣志道元良の次男通良が口羽に封ぜられ、在地名を名乗つて口羽氏を称した(「口羽氏系図」閑闇録など)。通良は琵琶甲城を築いて拠城とし、のち毛利四天王とも称された。天正十九年(一五九一)のものとみられる一二月一七日の小早川隆景状(諸録)には「其時北口二者口羽之城を被取出候、此間之下野守を被指籠たる御事候」とある。城地は赤名(現赤来町)を経て出雲・都賀(現大和村)を経て石見銀山、安芸国川根(現広島県高宮町)から吉田郡山城(現同県吉田町)へと続く毛利氏の軍事・交通・経済の要衝にあたり、山陰進出への拠点となつた。

城の南西出羽川対岸に幡屋城と呼ばれる堅固な山城跡がある。上口羽にまたがる標高311メートル・比高190メートルの山塊頂上を本丸とし、三方の尾根に郭を階段状に配し、北東に延びる長い尾根にはさらに二方に9段もの郭群を設けている。城の東麓、下口羽地内の集落は上居といわれ、山際に数基の宝篋印塔・五輪塔からなる墓地があり、善林寺の地名も残る。文明八年(一四七六)九月一五日に高橋氏が益田氏と結んだ契約(益田家書)に傘連判を加えた者の一人として口羽下野守光慶の名がみえ、この地を本貫地としたともいわれる。また志道通良が琵琶甲城築城以前に居城としたとも考えられる。』

さて、高橋氏の名には「光」の字が付く習わしがあったようであるが、九郎左衛門師光・与次郎光・弾正盛光・大九郎興光等、光が下に付くものが本家筋であったようである。また、光が上に付く口羽下野守光慶・長山備前守光季・曾田民部少輔光理等は、地位の高い家臣團ではなかったかと考えられる。ちなみに、永暦二年(一五六九)、大宅(高橋)朝臣就光により、羽須美村大字阿須那に所在する賀茂神社に繪馬(狩野治部少輔(秀賴)筆、『神馬岡』(二面)重要文化財)が奉納されている。このことから、毛利家の家臣に組み込まれながら、高橋氏の名跡を継いだ「就光」なる象徴的な名を持つ人物が存在したことがわかる。



42 大元神社(宮尾山八幡宮に合祀)	43 原田二号跡跡	44 原田一号跡跡
45 椅屋城跡(高畠城をこれとする説もある)	46 黒神堂	47 高畠城跡(椅子屋の支城的形態)
48 宗林寺(臨済宗)(口羽氏菩提寺)(中原古墳)		49 麻沙門堂と神業指定
50 輪ノ内遺跡	51 大元神社(田森家内)(宮尾山八幡宮に合祀)	52 矢羽甲(矢羽)城跡
53 宮尾山八幡宮と宮尾山古墳(古墳は消滅)	54 西念寺(浄土真宗)(明治時代に阿須賀大庭よりこの地に移る)	
55 延命寺(真言宗)(口羽氏祈願寺)	56 比(西)丘人城跡	57 大仙神社(宮尾山八幡宮に祀)
58 盖谷跡跡	59 鈴ヶ迫二号跡跡	60 鈴ヶ迫一号跡跡
61 坂谷跡跡		

第30図 輪ノ内遺跡位置図 (1:25000)

## 第8章 試掘調査の概要と経過

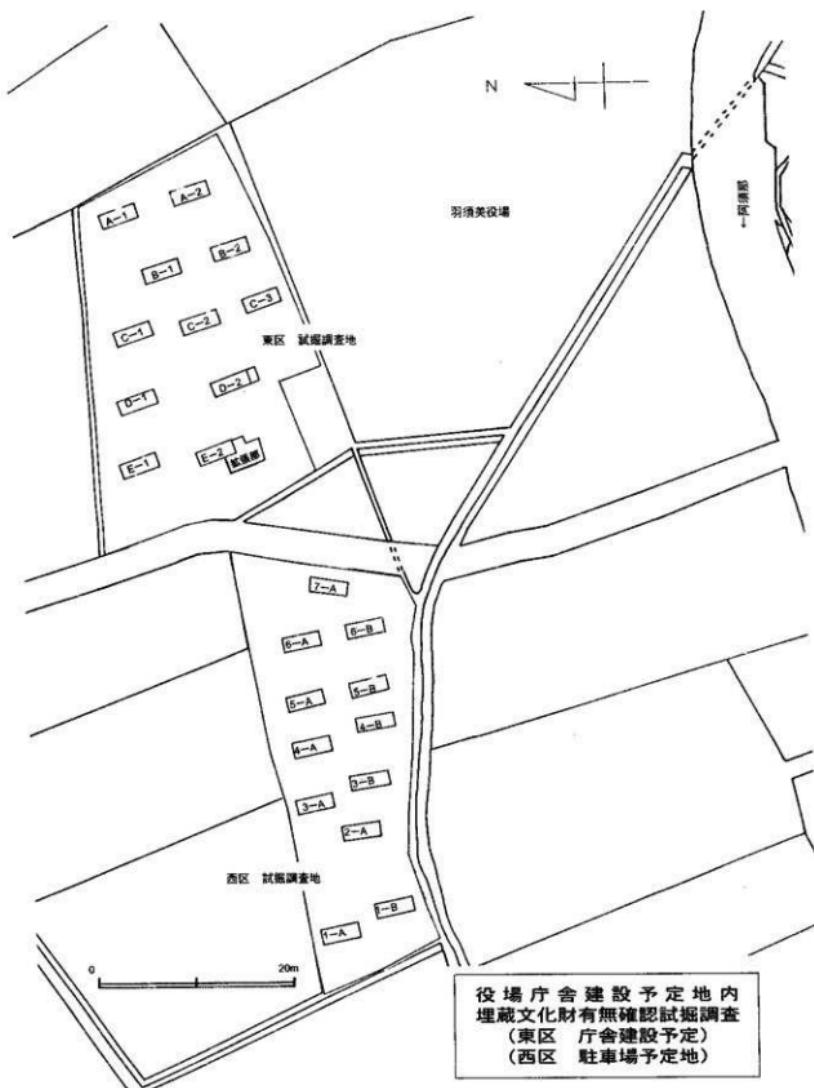
輪ノ内遺跡の発見は、平成9年11月27日から同年12月25日の現地調査期間による、役場庁舎建設予定地内の埋蔵文化財の有無確認調査によってなされたものである。（以下第31回参照）

試掘調査対象地（調査区）は、建設予定地である東区841m<sup>2</sup>と、駐車場予定地の西区623m<sup>2</sup>に別れる。総面積は1,464m<sup>2</sup>である。その中をトレンチにより調査を行なった。埋蔵文化財の有無を確認する為の調査であることから、掘削し、写真、断面の実測等を行い、調査後は元のように埋め戻すというかたちで進めた。実測に際し、標高は、現羽須美村役場正面に設置してある、降雪・積雪観測地の標高115m（資料：建設課）を基準にした。（しかし、これは厳密な数値ではないようである為、輪ノ内遺跡の本調査の際には、試掘での標高と誤差が生じるものと思われることを断わておく。）さて、試掘調査はまず主要部であり面積も広い東区トレンチA-1からA-2、B-1へと順に行なった。トレンチA-1の耕作土1層を削除、耕盤2層を削除すると、褐色で砂質の4層が堆積していた。この時点で、水による影響を受けていることが想像できたが、兎にも角にも、無遺物層としての地山というより、普段から慣れ親しむ質感のあの地山を目指して掘り進んだ。しかし、黒褐色砂礫層の5層が堆積していた。この5層には、幅15cmから40cm程度のいわゆる角のない丸い川石が詰まっており、このトレンチA-1の5層などは、石の層といった具合であった。その幅70cm近い石もあり、作業員一人の手には到底手におえないものもあった。この5層上位からは、須恵器壺の底部（遺物33-8）が出土した（図版19b.c）。このトレンチA-1の5層を観察していると、この石の堆積は人為的に積まれた、あるいは放り込まれたものの可能性も考慮して調査を行なった。しかし、石垣とは考えられず、また他の東・西区トレンチからの5層の状況を総合的に判断して、人工的なものではないとの結論に至った。トレンチA-2で注目すべきは、このトレンチの砂層、5層（又は4層）から鉄滓が出土していることである。5層であり、また第9・10章で述べるとおり、5層での出土遺物でその時期の最も新しい遺物が、14世紀後半のもの（遺物33-19）であることからすれば、鉄滓は中世以前のものである可能性が高い。（勿論、肥前系陶磁器の出土は、2層以上である。）トレンチC-1の4層下位、5層との境目から、糸切り痕のある須恵器壺と考えられる底部が出土している。9世紀後半のものと思われる[2]。トレンチD-1は、2層下位4層上位に焦茶褐色の砂質土が堆積し、他のトレンチに観られない状況であったことから、遺構の存在する可能性があるものとして、拡張し調査を行なった。しかし遺構ではなかった。

トレンチE-2についてはここでは省略する。東区の掘削をほぼ終えたところで、調査西区に移った。西区は、調査区最も西からトレンチI-AからI-B、2-Aの順に行なった。トレンチ5-Bの5層から遺物33-2・3など8から9世紀の須恵器蓋片片が割りに多く出土した。遺物33-3は、坪ノ内遺跡出土の遺物21-11・15の胸部分位に段が付くタイプのものではなく、遺物21-12に近いものである。

トレンチ6-Bについて、ここでは省略する。その他、最後に調査した7-Aも、遺物33-1・4・18などが出土している。調査結果として、出土遺物量は、現在の出羽川から離れた方、現役場庁舎側に近いトレンチの方が多かった。

最後になったが、試掘調査は前述のとおり狭いトレンチ内での作業の上、多くの川石が出土した。にも関わらず、調査員である著者の無理な要求にも精一杯応えて頂いた。この試掘調査ができたのもひとえに作業員の地道な作業の積み重ねがあってこそであった。ここに記して謝意を表したい。



第31図 試掘調査区（輪ノ内遺跡）トレンチ設定図（1:500）

## 第9章 遺構と遺物

### 基本層序 (第32図)

役場建設予定地内の埋蔵文化財有無確認の試掘調査地は、これまで水田であった。堆積は、耕作土である灰褐色土の1層、耕盤である黄褐色粘質土の2層。遺構面(柱穴等)を覆する灰黃褐色土の3層。褐色砂質土の4層、砂と川石の堆積であり、旧河川と考えられる黒褐色砂礫の5層。5層以下全て旧河川による堆積と思われるが、色・質の違いによって分層した。川砂の黄褐色砂層の6層。川砂と川石の褐色砂礫の7層。なお、遺物の出土は、1層から5層までであったことと、5層以下は旧河川(旧出羽川流路?)に伴う流れ込みであることが判明したことから7層以下の掘削は行なわなかった。

### 遺構と遺物 (第31・32・33図)(図版20a.b.c.)

輪ノ内遺跡の存在が判明した遺構である。

羽須美村役場本庁裏に位置する調査東区のトレンチE-2を掘削したところ、トレンチ西壁に、2層から5層中を下方に伸びる30~40cm幅の2筋の灰黃褐色の堆積(3層)を発見。南壁にも短いが同様の堆積を確認したことから、柱穴の可能性が高いとしてトレンチを拡張した。拡張部2層下面まで掘削し精査したところ、平面上に同じく灰黃褐色の2m弱の円形堆積を確認。土坑と考えたが、調査の目的から今回それ以上の調査を行なわなかった。その他、柱穴の上面になりそうな円形の堆積を数ヶ所確認していることから、このトレンチ周辺には柱穴群が広がっているようである。また、トレンチの拡張と平行して、P-1・P-2を半切したところ、P-1から、中世須恵器(軟質)の擂鉢(遺物33-22)出土した。この遺物の細かい年代は不明であるが、このことによって中世の柱穴であることが判明した。なお、土坑上面から龍泉窯青磁碗(遺物33-17)が出土したところから、14世紀中葉から15世紀前葉の遺構群であると考えている。

### 包含層出土遺物

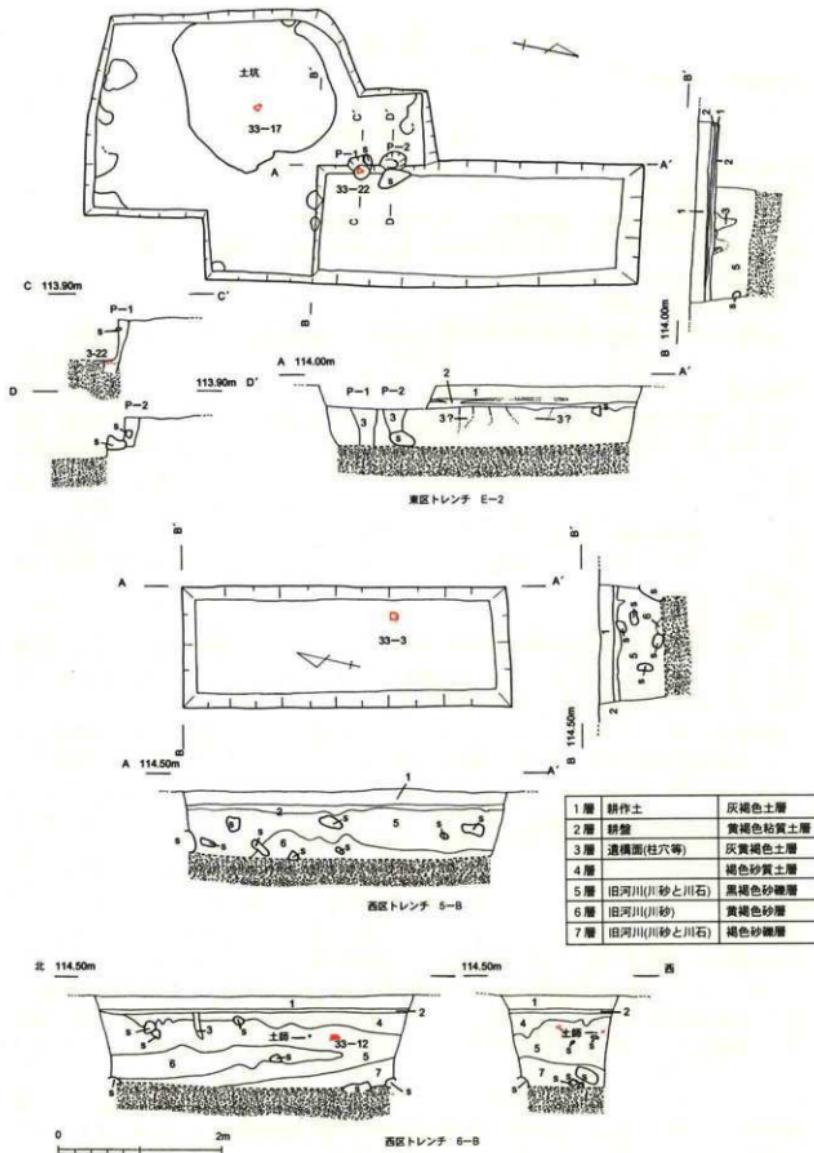
第33図 遺跡の有無確認の試掘調査に伴い、およそ以下の遺物が出土した。(図版23a.b.c.24a.b.c.25a.b.c.) 編年などについて、遺物33-12・14は註④、13・16・17は註⑤等、15は註⑥等、19から21は註⑦等、24から29は註⑧等を参考にした。

遺物1は、西区トレンチ7-Aの2層から出土した、二重口縁を持つ土師器、口径も10.5cm程度と小さく、胎土も密で器厚も薄い、村内他の遺跡では出土例のないタイプ。2から9は、8~9世紀のものと思われるものである。2は、須恵器輪状摘みを持つ壺蓋。西区トレンチ5-B 5層出土のもの。

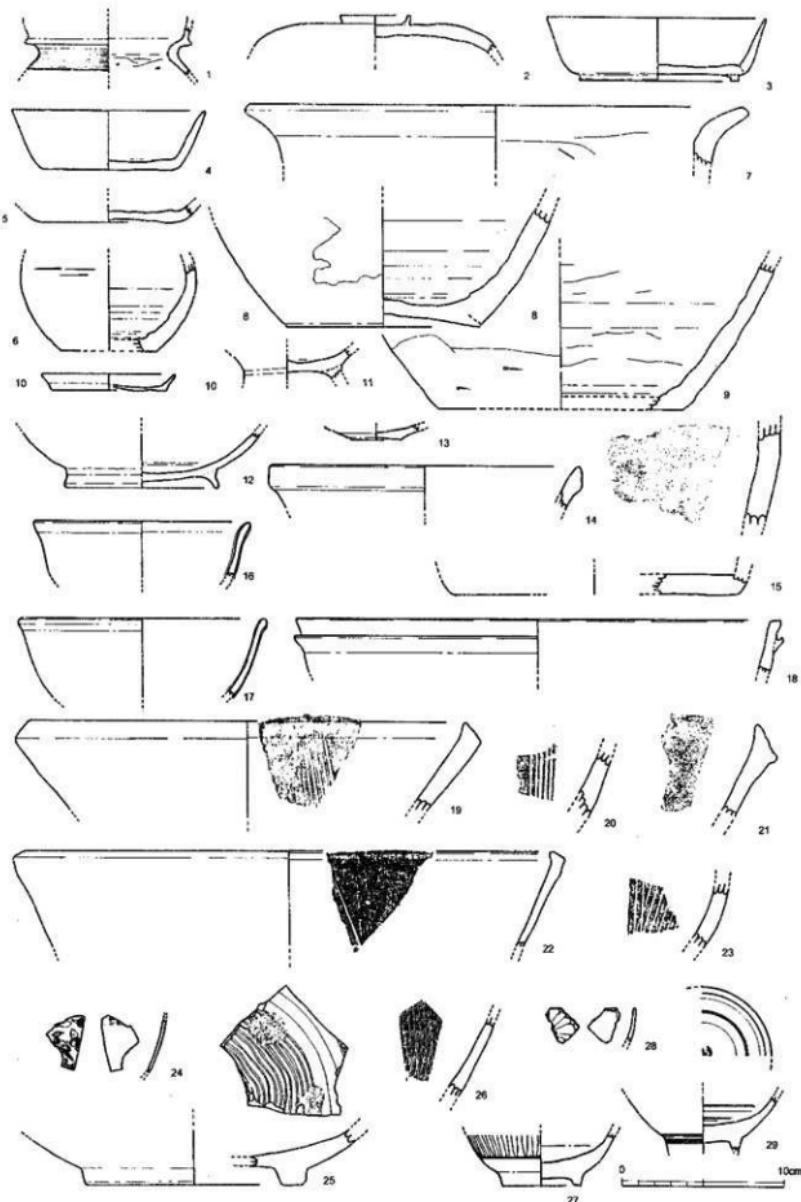
3は、貼り付けの輪高台ある蓋杯の身。西区トレンチ5-B 5層(図版21b.c.)。4・5は、高台の付かない蓋杯の身。4は焼成が特に悪い。西区トレンチ7-A 5層、5は、西区トレンチ5-B 5層。

6は、壺の胴部と思われる。東区トレンチD-2の1層。7は、土師器甕。外面口縁部以下の調整不明。西区トレンチ7-A 2層。8・9は、須恵器甕の底部。8は東区トレンチA-1の5層、9は東区トレンチA-2の5層。10は、器高1.05cmの浅い土師器小皿で、器厚も1mm~4mmの薄いもので、底部は笠切り。西区トレンチ5-B 2層(図版22a)。11は輪高台の付く土師器の碗と思われる。

12は、西区トレンチ6-B 5層から出土した灰釉陶器の碗である。(図版22b.c.23c.24c.)底部は付け高台で、施釉方法は、体部内外面ともハケヌリである。見込みに重ね焼痕がみられるが、丁度その部分だけ、釉を塗らなかったのか、釉を剥ぎ取ったのか不明だが無釉である。付け高台の一部に釉が掛かっているが、疊付け及び底部は無釉である。高台疊付き部分の直径は9cmを測る。これに対し、見込みにはっきりと残る重ね焼痕(高台疊付き部分)は8.5cmを測ることから、結果として気持ち小さい高台を持つものが載せてあったことが判る。註⑨の灰釉陶器の編年と器種構成によると、K90窯式に入り、灰釉陶器生産の最盛期となると、焼成方法で三叉トチンを用いず直接重ね焼が行なわれるようになる…1形式では、重ね焼による融着を防ぐ為に、高台接地面を施釉しないものが現われる…続く〇53裏



第32図 試掘調査（輪ノ内遺跡）トレンチ実測図（1:60）



第33図 試掘調査（輪ノ内遺跡）出土遺物（1:3）

式からは、量産化の進行に伴い粗雑化する。施釉方法もツケガケに変わる。とあるので、およそ以上のことから、遺物12が、猿投山周辺で焼かれたものであれば、K90様式の年代である9世紀後半のものと考えた。島根県内の灰釉陶器の出土は余り類例はないと聞いた、石見空港建設予定地内遺跡の根ノ木田遺跡D区から出土した壺がある。13は、東区トレンチE-2の2層出土の貿易磁器で、白磁小皿の底部である。遺物25-16と同様のもの。見込みに細かな貫入のある薄い釉が掛かり、外面下位までの釉が認められる。有るか無いか程度の削り出しの無い底部の中央は凹んでいる。皿VIで11世紀後半から12世紀前半。14は、東播系方口鉢。第II期第II段階のもので12世紀末葉から13世紀初頭。

15は、東区トレンチA-2の5層出土、中世の瓦質の火鉢と思われる。縦横に丁寧な削り痕がみられ、布目痕と見間違えた。色調は断面は灰白色で、内外両面とも黒に近い灰色。体部外面残存部に「奈良火鉢」にみられる花文スタンプは認められない。16は、東区トレンチB-1の1層から出土したもの。端反碗、内外面無文。釉は比較的厚く掛かり、色は灰オリーブ色。龍泉窯系碗D類。17は、東区トレンチE-2拡張部(3層)平面で確認した土坑上面にて検出したものである。端反碗、内外面無文のもの。釉はしつかり掛かり、色は粉青色で貫入がみられる。龍泉窯系碗D類。16・17共に14世紀中葉から15世紀前葉。現在のところこの17により、輪ノ内遺跡の年代を決定している。18は、瓦質の羽釜で、西区トレンチ7-A2層出土。19・20・21は備前焼の擂鉢。口縁の形から、19はⅢ期後半で、14世紀後半と考えられるもの。焼成も良好でいわゆる火色を呈している。内面に6又は7条の目を持った櫛でおろし目を入れている。口径不明。東区トレンチC-1の5層出土。20は、残存部から5条までの櫛目を確認できるもの。色調は青備前の様。東区トレンチE-2の排水採取。21は、IV期後半で15世紀後半のもの。残存部から1条の櫛目を辛うじて確認できる。東区トレンチB-2の2層出土。

22は東区トレンチE-2の3層から検出した柱穴(P-1)内から出土したものである。この遺物により『輪ノ内遺跡』の存在が決定的となった。復元径は32.4cmで、色調は灰黄色。軟質の中世須恵器の擂鉢である。残存部から1条の櫛目が確認できる。恐らくそう遠くない地域で焼かれたものと想像した。23は、瓦質の擂鉢で、残存部から6条までの櫛目が確認でき、その櫛目が放射状に引かれた際に交差した部分が観える。色調は内面は灰黄色、外は純い褐色、断面は黒に近い灰色。24から29は肥前系陶磁器(江戸期18から19世紀)のものである。24は、色絵(赤絵)の花鳥文碗である。上絵付は、変色したり剥している為、状態は悪いが、鳥に着色された緑色は確認できる。東区トレンチC-1。

25は、唐津系陶器の刷毛目皿である。底部は削り出し高台で、素地は純い赤褐色、内面見込みに白化粧土の刷毛目が施されている。砂目が擦着しており、17世紀末から18世紀前半と思われる。トレンチE-2。26は、唐津系の擂鉢。残存部から8条までの櫛目が確認でき、その櫛目が放射状に細かく引かれた際に交差した部分が観える。色調は灰赤色。東区トレンチE-2。27は、焼きの甘い陶器質の染付。外面に笠による縦方向の鎬があり、鎬の終わる外面下位に横方向に1条の染付の線が入っている。釉は、豊付き以外全てに比較的厚めに掛けられ、貫入が目立つ。西区トレンチ4-B2層出土。

28は、菊花重ね文様のある染付。西区トレンチ3-B2層出土。29は、見込みに退化したコンニャク印判による五弁花文様のある染付。見込みに蛇の目釉剥ぎが施され、重ね焼痕が認められる。東区トレンチB-2の1層出土。他に、実測し忘れたものに、西区トレンチ6-B5層出土の同安窯系青磁碗の口縁端部碎片がある。外面にいわゆる猫搔きと呼ばれる櫛描き文様と、内面上位に1条の沈線が確認できる。

## 第10章 試掘調査の成果と課題

埋蔵文化財の有無確認試掘調査を行った役場庁舎建設予定地及び駐車場予定地は、これまで水田であったところである。しかし、耕作土・耕盤以下の下層である5層以下(あるいは4層以下)は、全て砂礫の層であったことにより、この地が旧河川、あるいは洪水に幾度となく襲われた土地であったことが判明した。おそらく調査区の北を流れる江ノ川支流出羽川は、現在の位置に定まっておらず、長い年月をかけ、自然的そして人工的に北へ水路を移していったと思われる。

この旧河川の影響を受けた5層の砂礫層からは、8から9世紀の須恵器の蓋壺や猿投窯系の灰釉陶器の碗(遺物33-12)が1点出土した。島根県内における灰釉陶器の出土例は、石見空港建設予定地として調査された根ノ木田遺跡D区から出土した壺がある他、県内でも未だそれ程の出土例はないとも伺っている。もちろん灰釉陶器の出土は本村において初めてである。出土した比較的焼きの甘い8世紀から9世紀の須恵器に対し、灰釉陶器は焼成が良好であった為か、口縁部を失ってはいるものの磨耗痕は認められない。このことから、旧河川に流されてきたとはいえ、調査区とそう遠くない場所にその生活があったのではないかと想像した。また、この5層以下の遺物の出土はなかった。

そして、調査東区のトレンチE-2及びその拡張部から柱穴及び、柱穴に伴う擂鉢(遺物33-22)が出土し、さらに平面圖上での確認にとどめたものの土抗らしき遺構を確認。上抗上面には中国龍泉窯系の青磁碗(口縁部端反、内外面無文)(遺物33-17)が出土した。擂鉢は焼きの甘い中世須恵器であり、産地は不明であるが、近隣の地域で焼かれたものと思われる。当然その時期についても不明確であるが、室町頃であろうとのご教示頂いた図。したがって青磁碗の時期からこれらの遺構は、おおむね14世紀中葉から15世紀前葉頃のものと考えている。

その他遺物は、5層以上からのものであるが、5層からの出土遺物で最もその時期の新しいものは備前擂鉢(遺物33-19)で、14世紀後半のものであることから、この調査区を襲った最後の?水害は、14世紀後半と考えられ、あるいは、河川としての役割を終えたのがこの頃に遡るのではないかと思われる。

そして時期を挟まず、この地での生活があったのである。

試掘調査の結果から、調査西区は須恵器や、灰釉陶器が出土したもの、遺構とするものが検出されなかつたことと、駐車場予定地であることから、耕作土以下の層に影響はないものと判断した。

調査東区は前述のとおり、一部に遺構を確認したことから遺跡であることが判明した。遺跡名を地名から「輪ノ内遺跡」として周知し、役場庁舎の建設に際しては輪ノ内遺跡の発掘調査(記録保存)が必要である。

最後に『輪ノ内』という地名について考えてみたい。まず輪ノ内遺跡は14世紀中葉から15世紀前葉の遺跡である。村史においてこの時代は高橋氏の時代であり、対岸には琵琶甲城(矢羽城)(第30図52)が築立っている。通説[3]では琵琶甲城は、佐波氏の拠城であった矢羽城を高橋時代の後、口羽氏が改修築城し拠城としたといわれている。しかしこの城の(a)立地条件、(b)出羽川の合流地点、即ち江ノ川、備後方面からの敵に対する死角を防ぐ重要な位置、しかも出羽川と江ノ川による自然の堀で守られている。)と、また、(b)『島根県の地名[4]』「下口羽村・琵琶甲城跡」によれば、琵琶甲城跡山麓に所

在し、口羽氏との縁の深い宮尾山八幡宮(第30図53)について次のような記述がある。「(前略)…「石見年表」には永享三年(一四三二)に「下口羽村八幡宮を旧地に帰す願主大宅某」文明九年(一四七七)に「下口羽村八幡宮造立大旦那大宅光慶」…(後略)」(a)・(b)のことからも、正平八年(一三五三)頃、羽須美村大字木須田に藤掛(根)城を築城しその後、享禄三年(一五三〇)頃、毛利元就に滅ぼされるまで、全盛期には瑞穂町・大和村・瑞穂町・作木村・美土里町・高宮町にまでその勢力を擴張した大宅、即ち高橋氏が、後の口羽氏同様、宮尾山八幡宮と深くつながっていたことがわかる。したがって、佐波氏の時代からあったとされる矢羽城(琵琶甲城)と呼ばれるこの城を利用しないはずがないとみる。

いずれにせよ、このような城下に存在する遺跡であることから、「輪」とは、いわゆる「郭」「曲輪」の「輪」の意ではないかと想像した。しかし、「輪ノ内」という地名には、『岐阜県安八郡輪之内町』があり、平凡社「岐阜県の地名」には「(前略)…「輪の内」「輪の中」といわれた典型的な環堤集落で、町名の由来にもなっている。…(後略)とある。さらに、吉川文庫「国史大辞典」の『わじゅう』「輪中」によれば次のとおりある。「(前略)…いわゆる木曾三川(濃尾三川)の合流地帯に見られる水除堤で囲繞された集落形態。堤防が輪のようにめぐっているところから輪中という。…(中略)…輪中の分布地域は岐阜市・大垣市あたりから三川河口に至る岐阜県南部を中心に、一部は三重・愛知両県の隣接部に及ぶ。…(中略)…輪中成立の時期についてはよくわかっていない。江戸時代に書かれた『百輪中旧記』に、鎌倉時代末期の元応元年(一三一九)高須輪中の潮除堤が築造された旨、記されているが、確実な史料では確認されていない。中世にも輪中らしきものは存在したと推定されるが、本格的な輪中堤の築造はやはり近世になってからのことであろう。…(後略)」

のことから羽須美村に輪中堤の築造があったかどうかは不明であるが、しかし羽須美村の『輪ノ内』もこのような立地的特徴から付いた地名と考えられる。

試掘調査(輪ノ内遺跡)遺構・遺物			
古 代	古墳時代 初頭	土師器(甕)	時 期 が 不 明 確 な 遺 物  鉄 滓 (製 鐵 関 連)
	奈良～平安時代	須恵器(蓋坏・甕) 土師器(甕) 灰釉陶器(碗)	
中 世	平安末～ 鎌倉・南北朝 室町・戦国	土師質土器(坏) 東播系片口鉢・備前擂鉢・羽釜 奈良火鉢?・中世須恵器擂鉢 貿易陶磁器の白磁小皿・青磁碗等(同窯系・龍泉窯系) 14世紀～15世紀の柱穴群(建物跡)・土抗	
近 世	安土・桃山 江戸	肥前系陶磁器	

## 註(参考・引用文献、教示内容) (順不同)

- ① -『普城遺跡 発掘調査報告書』 島根県 羽須美村教育委員会 1996年
- ② -『羽須美村誌上下巻』 島根県 羽須美村誌編集委員会
- ③ -『羽須美の文化財』 島根県 羽須美村教育委員会・羽須美村文化財審議会
- ④ -『郷土歴史大事典 日本歴史地名大系33 『島根県の地名』』『邑智郡羽須美村』より 平凡社
- ⑤ -『やきものの観賞基礎知識』 矢部良明 編 至文堂
- ⑥ -『とんぼの本『やきもの鑑定入門』 出川直樹 監修 芸術新潮編集部 編 新潮社
- ⑦ -『日本土器事典』 大川清 鈴木公雄 工楽善道 編 雄山閣出版
- ⑧ -『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 正岡聰夫 松本岩雄 編 木耳社
- ⑨ - 1996年石見考古学会で提唱された、吉川正氏の弥生中期末～古墳時代初頭のVI期編年『吉川編年』を、八雲立つ風土記の丘 特別展「書きかえられる石見・隠岐の古代史」の資料から使用
- ⑩ -『島根考古学会誌第4集』『山陰古式土器飾の形式学的研究－島根県内の資料を中心として－』 花谷めぐむ 島根考古学会 1987年
- ⑪ -『島根考古学会誌第8集』『山陰における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－』 松山智弘 島根考古学会 1991年
- ⑫ -『島根考古学会誌第11集』『島根県の縄文時代後期中葉～晩期上器の概要－飯石郡頬原町森遺跡出土土器を中心に－』 柳浦俊一 島根考古学会 1994年
- ⑬ -『島根考古学会誌第11集』『出雲地域の須恵器の編年と地域色』 大谷晃二 島根考古学会 1994年
- ⑭ -『島根考古学会誌第13集』『森Ⅲ遺跡の祭祀土器』 山崎順子 島根考古学会 1996年
- ⑮ -『須恵器集成図録 第一巻 近畿編Ⅰ』 中村浩 編 雄山閣出版社
- ⑯ -『須恵器集成図録 第五巻 西日本編』 舟山良一 松本敏三 池田栄史 編 雄山閣出版社
- ⑰ -『古代の土器研究会第2回シンポジウム『古代の土器研究－律令の土器様式の西・東2須恵器－』』 古代の土器研究会
- ⑱ -『古代の土器1 都城の土器集成』 古代の土器研究会 編
- ⑲ -『古代の土器2 都城の上器集成II』 古代の土器研究会 編
- ⑳ -『川ノ面遺跡 発掘調査報告書』 島根県 瑞穂町教育委員会 1996年
- ㉑ -『クロコ谷遺跡 発掘調査報告書』 島根県 瑞穂町教育委員会 1990年
- ㉒ -『石見空港建設予定地内遺跡 発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1992年
- ㉓ -『古市遺跡 発掘調査概報』 島根県浜田市教育委員会 1995年
- ㉔ -『横路遺跡(土器地区) 発掘調査報告書』 1997年
- ㉕ -『松江考古 第8号』 松江考古学談話会 1992年
- ㉖ -『中国の陶磁④青磁』 長谷部楽爾 監修 平凡社
- ㉗ -『中国の陶磁⑧元・民の青花』 長谷部楽爾 監修 平凡社
- ㉘ -『中国の陶磁⑩日本出土の貿易陶磁』 長谷部楽爾 監修 平凡社
- ㉙ -『九州歴史資料館 研究論集4 『太宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－』』 横田賢次郎 森田寛著 1978年
- ㉚ -『中国陶磁の八千年』 矢部良明著
- ㉛ -『貿易陶磁研究No.2』 日本貿易陶磁研究会 1982年
- ㉜ -『貿易陶磁器等について広島県立美術館 上任学芸員 村上勇氏にご教示頂いた。』

- [33] - 国立歴史民俗博物館 博物館資料調査報告書4『日本出土の貿易陶磁器 西日本編1』 国立歴史民俗博物館 1993年
- [34] - 別冊太陽 日本のこころ63『古伊万里』 西田宏子 大橋康三 監修 平凡社
- [35] - 別冊太陽 骨董を楽しむ10『色絵鉢』 大橋康三 監修 平凡社
- [36] - 別冊太陽 骨董を楽しむ13『絵皿文様づくし』 平凡社
- [37] - 別冊太陽 骨董を楽しむ18『染付の粹』 大橋康三 監修 平凡社
- [38] - 暮らしの本④『古伊万里に魅せられた暮らし』 ふだん使い実例集 Gakken
- [39] - 暮らしの本⑤『古伊万里に魅せられた暮らし』 ふだん使い実例集 Gakken
- [40] - 『そば猪口絵柄事典』 小川魯司著 光芸出版
- [41] - 『世界陶磁全集 3 日本中世・8江戸(三)・12木・13漆・金・元』 小学館
- [42] - 考古学ライブラリー-55『肥前陶磁』 大橋康二著 ニューサイエンス社
- [43] - 『古伊万里の文様 初期肥前磁器を中心に』 大橋康二著 理工学社
- [44] - 『古伊万里と社会-経済学の目で見るやきものの歴史』 大矢野栄次著 同文館
- [45] - 考古学ライブラリー-60『備前焼』 間壁忠彦著 ニューサイエンス社
- [46] - 『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 編 貞陽社より「灰釉陶器・山茶椀」「土師質土器椀」「中世陶器」「貿易陶磁器」など
- [47] - よみうりカラームックシリーズ『【新】日本のやきもの 1 有田・唐津・九州民窯』 読売新聞社
- [48] - よみうりカラームックシリーズ『【新】日本のやきもの 2 備前・丹波・萩・山陰』 読売新聞社
- [49] - 日本の陶磁古代・中世編6『信楽 備前 丹波』 谷川徹三 川端康成監修 樽崎彰一編集 中央公論社
- [50] - 平成四年度 特別企画展図録『中国山地とたら製鉄』 広島県立歴史民俗資料館
- [51] - 島根県文化財保護指導委員 吉川正氏にご教示頂いた。
- [52] - 羽須美村文化財審議会 委員長 日高伊三氏にご教示頂いた。
- [53] - 郷土歴史大事典 日本歴史地名大系21『岐阜県の地名』から「安八郡輪ノ内町」より 平凡社
- [54] - 『国史大辞典9』「つぼ(坪)・(壺)」より 吉川弘文館
- [55] - 『国史大辞典14』「わじゅう(輪中)」より 吉川弘文館
- [56] - 『世界大百科事典18』「つぼ(坪)・(壺)」より 平凡社
- [57] - 『世界大百科事典30』「わのうち(輪ノ内[町])」より 平凡社
- [58] - 『日本歴史館』 小学館
- [59] - ジャパン・クロニック『日本全史』 講談社
- [60] - 『広辞苑』「つぼ(坪)・(壺)・わ(輪)」より 岩波書店
- [61] - 角川日本地名大辞典32『島根県』「邑智郡羽須美村」より 角川書店
- [62] - 島根県中近世城館跡分布調査報告書(第1集)『石見の城館跡』 島根県教育委員会 1997年
- [63] - 増補改訂『島根県遺跡地図 II(石見編)』 島根県教育委員会 1992年
- [64] - 羽須美村文化財審議会副委員長 日高亘氏にご教示頂いた。
- [65] - 島根県教育庁文化財課 西尾克己氏にご教示頂いた。
- [66] - 島根県教育庁文化財課 柳浦俊一氏にご教示頂いた。
- [67] - 『毛利元就 その時代と至宝展』図録 1991年広島県立美術館 他「神馬図二面」より

# 図 版

## 凡 例

- 
- ①図版中の出土遺物●▲-▲●は、挿  
図中の第●▲図▲●に対応する。
  - ②図版中の西→は、被写体を西側から  
撮影したという意味。
-



a. 坪ノ内遺跡遺景  
1976年9月(1:7000)空撮



b. 遺跡の背景(山側)  
尾根先端部に墳地  
その右は「叶谷」南東→



I-A区からの眺望。遠景の  
右山に浮橋寺、左山に桃尾  
城跡 南東→

坪ノ内遺跡

図版 2





a. S101 検出状況 南西→



b. S101 土層堆積状況 北東→

c. S101(盤溝部)  
土層堆積状況  
南西→

a. SI01 (壁溝内)  
遺物8-1 出土状況 東→



b. SI01 遺物8-4 出土状況 東→



C. SI01・SI02 完整状況  
北東→

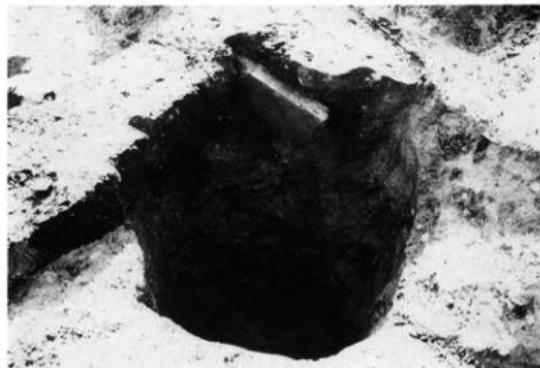




a. S102 検出状況 東→



b. S102 突溝と突溝内の柱穴検出状況 南西→

c. S102 突溝内柱穴 遺物10-1  
出土状況 東→

坪ノ内遺跡

図版 6

a. S103 掘削状況 南東→



b. S103 掘削状況 北東→



c. S103と遺物26-7  
及び鉄滓出土状況 北東→





a. SR01(II-D区)  
土層堆積状況 南東→



b. SR01(II-D区)  
検出状況 北西→



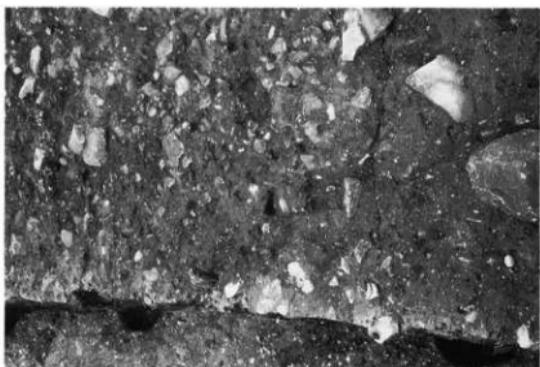
c. SR01(II-D区)  
遺物14-6 出土状況 北西→



a. II-A区 遺物17-2 他  
出土状況 北西→



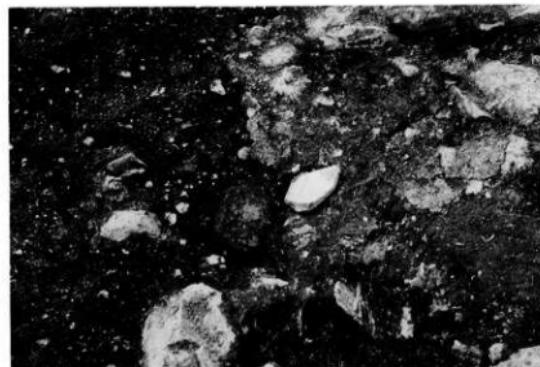
b. I-A 遺物16-12 他  
出土状況 北→



c. I-C区 8~9世紀の須恵器と  
S102 柱穴検出状況 北西→



a. I-B区 8～9世紀の  
須恵器と鉄滓出土状況



b. I-C区 遺物25-4  
出土状況と鉄滓出土状況



c. I-D区 遺物25-8  
出土状況 北東→



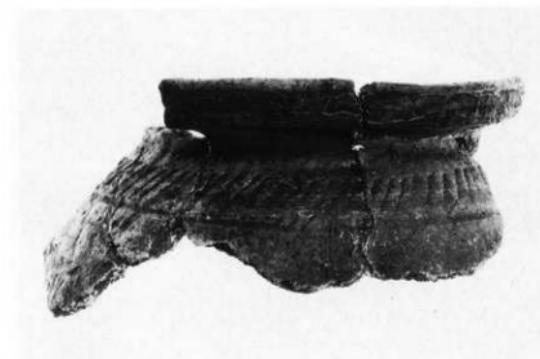
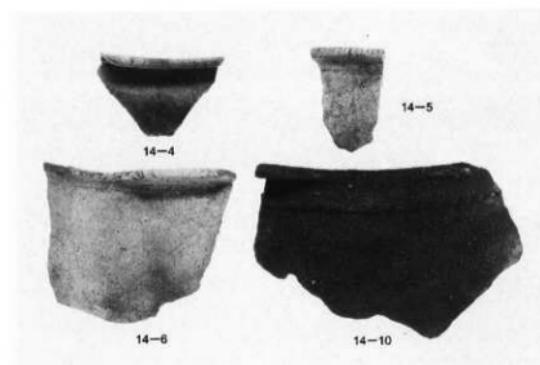
a. III-A区(第2回土層断面D-D')  
遺物28-1 出土状況 南→



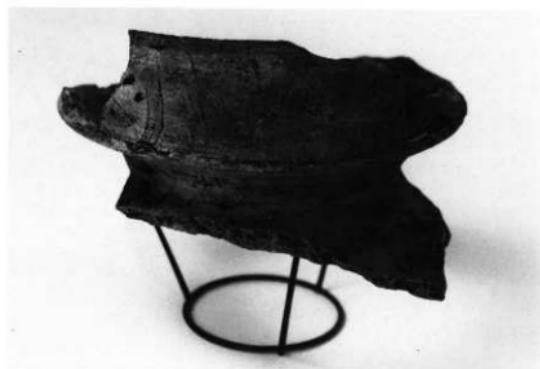
b. II区 拡張部  
鉄滓出土状況 北西→



c. II区 拡張部 遺物17-1  
出土状況 北西→



a. 遺物16—12



b. 遺物17—1



c. 遺物18—15





a. 遺物 18-4

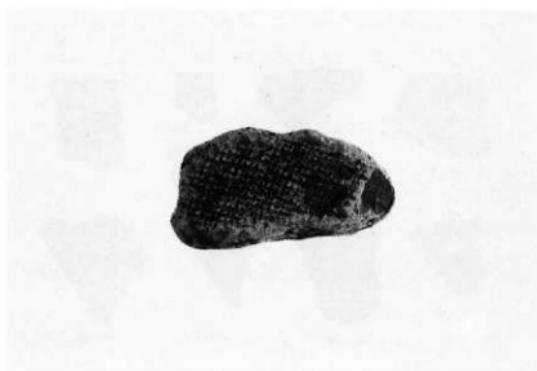


b. 遺物 18-6



c. 遺物 20-11

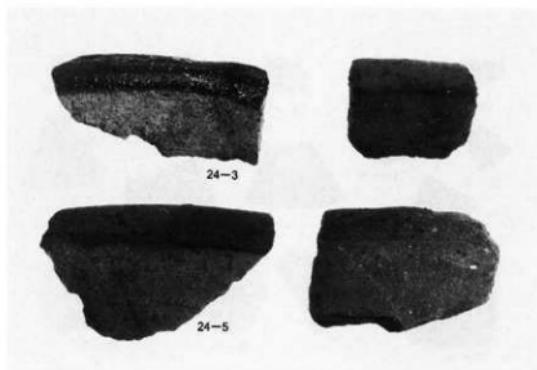
a. 遺物22-8  
(布目痕のある土器片)

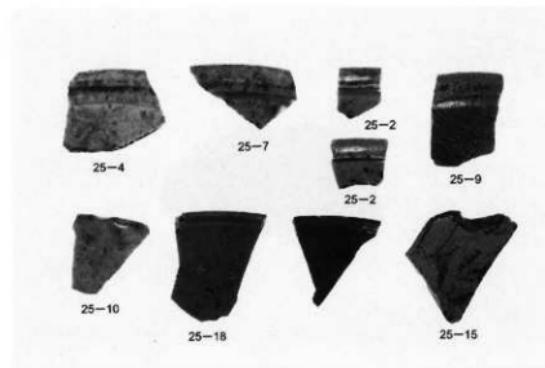


b. 遺物29-4(砥石)

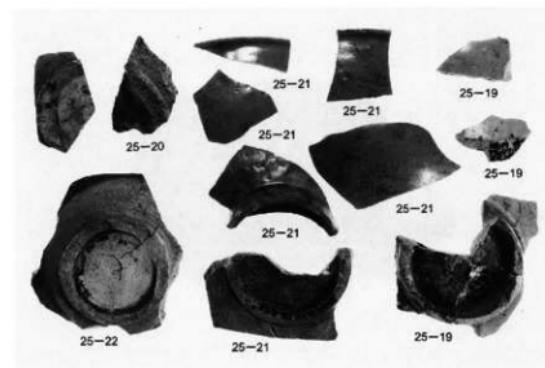


C. 遺物24-3他  
(束縛系片口鉢)外面

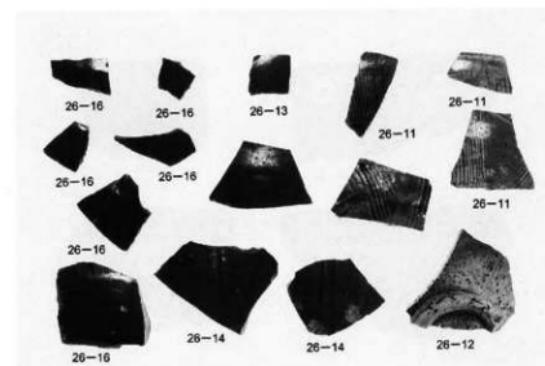




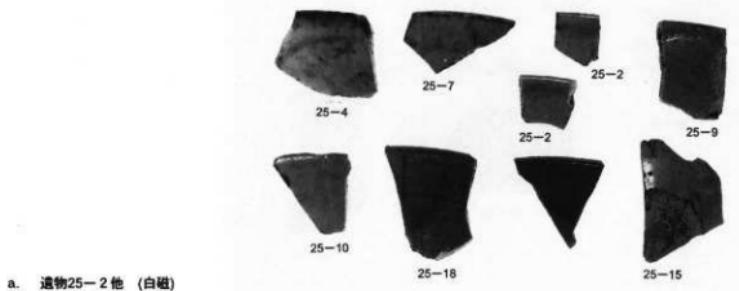
a. 遺物25-2他 (白磁)



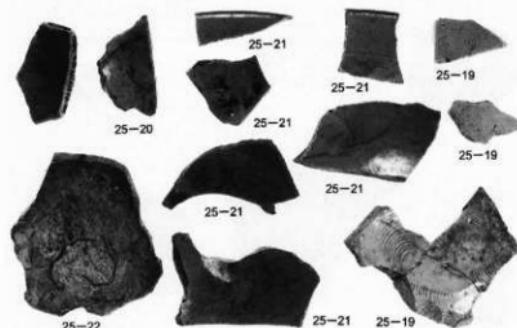
b. 遺物25-19他 (白磁) 外面



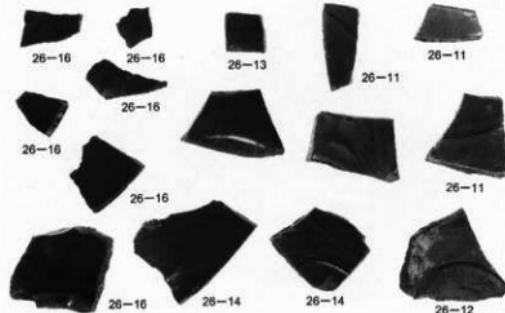
c. 遺物26-11他 (青磁) 外面



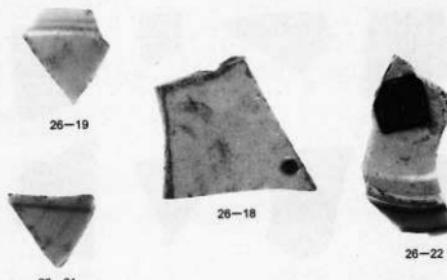
a. 遺物25-2他 (白磁)



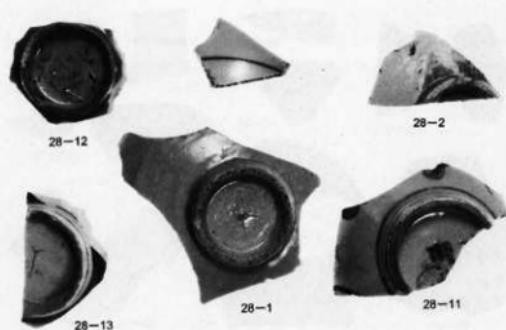
b. 遺物25-19他 (白磁) 内面



c. 遺物26-11他 (青磁) 内面



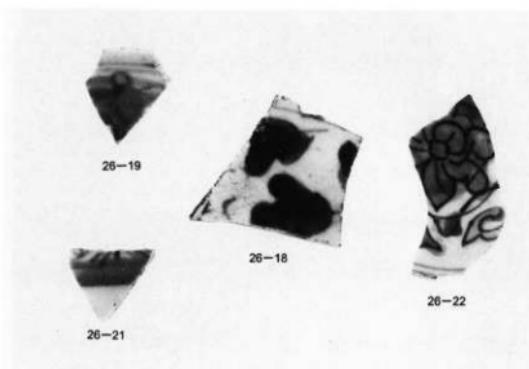
a. 遺物26-18他 (青花)



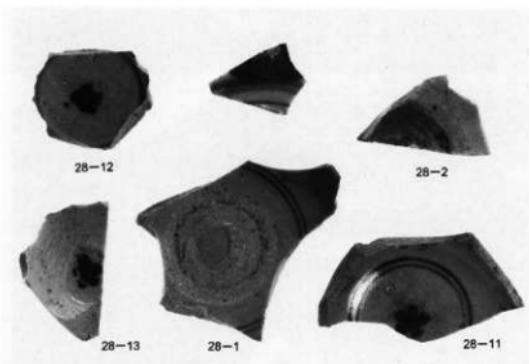
b. 遺物28-1他 (肥前系染付)

c. 遺物29-3  
(鉄滓が付着した土器片)外面

a. 遺物26-18他 (青花)



b. 遺物28-1他 (肥前系染付)



c. 遺物29-3  
(鉄滓が付着した土器片)内面





↑ 西  
試掘調査(輪ノ内遺跡)  
a.



b. 東区トレンチA-1  
完壁状況 南東→



c. 東区トレンチA-1  
遺物33-8 出土状況 南東→

a. 東区トレンチE-2  
完掘状況 南東→



b. 東区トレンチE-2(拡張部)  
遺構検出状況 東→

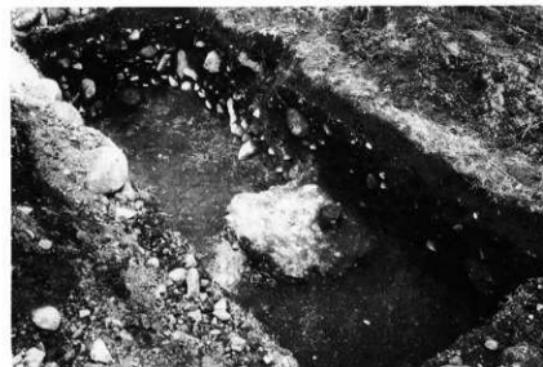


東区トレンチE-2(柱穴)  
遺物33-22 出土状況 東↑





a. 試掘調査 西区 全景 東→



b. 西区トレンチ5-B  
完掘状況 南西→



c. 西区トレンチ5-B  
遺物33-3 出土状況 南西→

a. 西区トレンチ5-B  
遺物33-10 出土状況 南→



b. 西区トレンチ6-B  
完掘状況 南西→

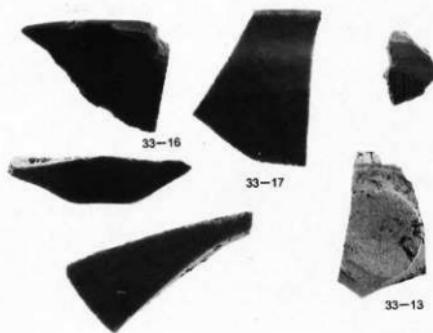


c. 西区トレンチ6-B  
遺物33-12 出土状況 北西→





a. 東区トレンチE-2  
柱穴出土遺物33-22 外面



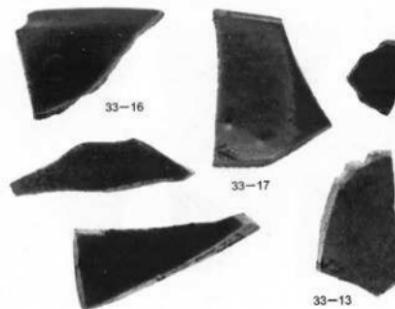
b. 東区トレンチE-2 拡張部土坑上面  
出土遺物33-17他 外面



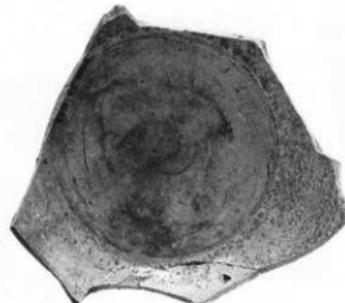
c. 西区トレンチ6-B  
出土遺物33-12 (灰釉陶)外面



a. 東区トレンチE-2  
柱穴出土遺物33-22 内面



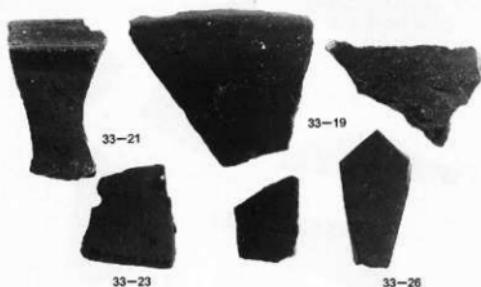
b. 東区トレンチE-2 拡張部土坑上面  
出土遺物33-17他 内面



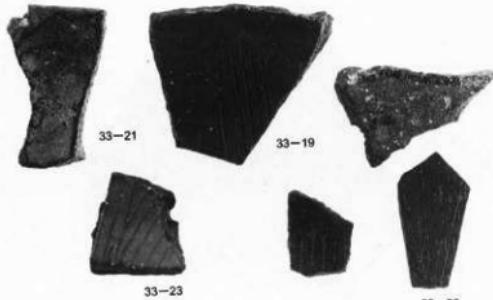
c. 西区トレンチ6-B  
出土遺物33-12 (灰釉陶) 内面



a. 西区トレンチ5-B 出土遺物33-3  
輪ノ内遺跡



b. 東区トレンチC-1 出土遺物33-19他  
外面



c. 東区トレンチC-1 出土遺物33-19他  
内面



# 報告書抄録

ふりがな	わのうち いせき							
書名	輪ノ内遺跡 (WANOUCHI ISEKI)							
副書名	役場庁舎建設予定地内 埋蔵文化財有無確認 試掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	羽須美村 埋蔵文化財調査 報告書							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	角矢 永嗣 かくやえいじ							
編集機関	羽須美村 教育委員会 はすみむら きょういくいいんかい							
所在地	〒696-0603 島根県邑智郡羽須美村大字下口羽484番地1 TEL 0855-87-0220							
発行年月日	西暦 1998年 3月							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘調査期間	調査面積	調査原因
わのうちいせき 輪ノ内遺跡	しまねけんおおらぐんはすみむら 島根県邑智郡羽須美村 おおらぐくちば 大字下口羽472番地1 外	市町村	遺跡番号	度	度	1997 1127	1,464m <sup>2</sup> をトレンチ 調査	役場庁舎 建設予定 地
			32444	分	分	1998 1225		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
わのうちいせき 輪ノ内遺跡	建物跡 (柱穴群)	14~15世紀 南北朝~	掘立柱建物 (柱穴群)	古墳時代前期上器、奈良・平安時代の土器、 中国製貿易陶磁器・鐵滓・束縛系片口鉢・備前焼・肥前系陶磁器 他		灰釉陶器が出 土。 中世の遺構検 出。		
	土坑	室町時代	上坑					

島根県邑智郡羽須美村

坪ノ内遺跡  
TSUBONOUCHI ISEKI  
中山間地域総合整備事業  
(長田地区圃場整備)予定地内

輪ノ内遺跡  
WANOUCHI ISEKI  
役場庁舎建設予定地内 埋蔵文化財有無確認試掘調査

埋蔵文化財発掘調査報告書  
1998年3月

発行 羽須美村教育委員会  
印刷 三星舎印刷有限会社